506
9

始

506-9
210/81

宋四明沙門知禮校註

枕草子

大正
11. 2. 13
内交

緒言

一、清少納言の枕草子が、王朝文學隨一の權威であることは、夙に學界の承認して居ることである。單に王朝期ばかりではない。古往今來、わが邦文壇の生んだ天才的文字である。

一、只遺憾なのは、在來の本書は、本文の誤訛が多くて、通讀にすら困難を感ずる。良書のないことは、どの位本書の價値を殺ぐか知れない。

一、この校註枕草子は、その缺陷を補ふ目的で物したのである。底本は普通流布本(春曙抄本)によることとし、それをおもに磐齋抄に對比校訂し、また他本をも參照した。これで餘ほど、原書の眞面目に近づき得たと、固く信ずる。

一、標註は簡單明瞭を主とし、成るべく讀者が自發的の理解に俟つこと

とした。

一、この校註本は、實に如上の特色を有してをる。これらの點が、高等學校程度の教科書としても、唯一の適當のものであると思ふ。

大正十一年一月

金子元臣識

校註 枕草子目次

一 春は曙……一
二 こゝろは……二
三 正月一日は……二
四 ことゝなるもの……五
五 思はむ子を……六
六 大進生昌が家に……六
七 うへに侍ふ御猫は……一〇
八 正月一日……一三
九 よろこび奏するこそ……一四
一〇 今内裏の東をば……一四
一一 山は……一四
一二 峯は……一五
一三 原は……一五
一四 市は……一五
一五 淵は……一五
一六 海は……一六
一七 わたりは……一六
一八 みさゝぎは……一六
一九 家は……一六
二〇 清涼殿の丑寅の隅の……一六
二一 すさまじきもの……一三
二二 たゆまるゝもの……一六
二三 人にあなづらるゝもの……一六
二四 にくきもの(上)(下)……一六
二五 小一條院をば……二三
二六 心ときめきするもの……二三
二七 すぎにし方戀しきもの……二四
二八 こゝろゆくもの……二四
二九 檳榔毛はのどやかに……二五
三〇 說經師は顏よき……二五
三一 菩提といふ寺に……二八
三二 小白河といふ所は……二八
三三 七月ばかり……二三
三四 木の花は……二四
三五 池は……二四
三六 せちは……二七
三七 木は……二七
三八 鳥は……二七
三九 あてなるもの……二四
四〇 蟲は……二五
四一 七月ばかりに……二四
四二 にげなきもの……二五
四三 細殿に……二五
四四 主殿司こそ……二五
四五 職の御曹司の……二七
四六 殿上の名對面こそ……二七
四七 若くてよろしき男の……二六
四八 わかき人とちごは……二六
四九 人の家の前を渡るに……二五
五〇 瀧は……二五
五一 川は……二四
五二 橋は……二四
五三 里は……二四
五四 草は……二五
五五 集は……二六
五六 歌の題は……二六
五七 草の花は……二六
五八 おぼつかなきもの……二八
五九 たとしへなきもの……二八
六〇 忍びたる處にては……二九
六一 懸想人にてきたるは……二九
六二 ありがたきもの……二〇
六三 うちの局は……二一
六四 職の御曹司に……二二
六五 あぢきなきもの……二四
六六 いとほしげなるもの……二四
六七 こゝろよげなるもの……二五
六八 とりもてるもの……二五
六九 御佛名のあした……二五
七〇 頭中將の……二六
七一 かへる年の……二〇
七二 里にまかでたるに……二四
七三 物の哀知らせ顏なるもの……二六

七四　さてその左衛門の陣に……八六
七五　職の御曹司に……八七
七六　めでたきもの……九七
七七　なまめかしきもの……九九
七八　宮の五節出させ給ふに……一〇〇
七九　無名といふ琵琶の……一〇四
八〇　うへの御局のみすの前……一〇五
八一　御めのとの大輔の……一〇六
八二　ねたきもの……一〇六
八三　かたはらいたきもの……一〇九
八四　あさましきもの……一一〇
八五　くちをしきもの……一一〇
八六　五月の御さうじの程……一一一
八七　御かたく……一一八
八八　中納言殿参らせ給ひて……一一九
八九　雨のうちはへ降る頃……一二〇
九〇　淑景舎春宮にまゐり給ふ……一二一
九一　殿上より……一二七
九二　はるかなるもの……一二八
九三　方弘は……一二九
九四　關は……一三〇
九五　森は……一三〇
九六　卯月のつごもりに……一三二
九七　湯は……一三二
九八　常よりも殊に聞ゆるもの……一三二
九九　絵にかきて劣るもの……一三三
一〇〇　かきまさりするもの……一三三
一〇一　あばれなるもの……一三三
一〇二　正月に寺に籠りたるは……一三四
一〇三　こゝろづきなきもの……一三八
一〇四　わびしげに見ゆるもの……一三九
一〇五　あつげなるもの……一三九
一〇六　はづかしきもの……一四〇
一〇七　むとくなるもの……一四一
一〇八　修法は……一四一
一〇九　はしたなきもの……一四二
一一〇　關白殿の黒戸より……一四三
一一一　九月ばかり……一四四
一一二　七日の若菜を……一四五
一一三　二月宮のつかさに……一四五
一一四　頭の辨の御許よりとて……一四六
一一五　などてつかさ得始めたる……一四七
一一六　故殿の御ために……一四八
一一七　頭の辨の……一四九
一一八　五月ばかりに……一五一
一一九　圓融院の御はての年……一五三
一二〇　つれ〴〵なるもの……一五五
一二一　つれ〴〵慰むるもの……一五五
一二二　取りどころなきもの……一五五
一二三　なほ世にめでたき……一五六
一二四　故殿などおはしまさで……一五九
一二五　正月十日……一六三
一二六　清げなるものこの……一六四
一二七　おそろしきもの……一六五
一二八　きよしと見ゆるもの……一六五
一二九　きたなげなるもの……一六五
一三〇　いやしげなるもの……一六五
一三一　むねつぶるゝもの……一六六
一三二　うつくしきもの……一六六
一三三　人ばへするもの……一六七
一三四　名おそろしきもの……一六八
一三五　見るに殊なる事なきもの……一六九
一三六　むつかしげなるもの……一六九
一三七　えせものゝ所うるなり……一六九
一三八　苦しげなるもの……一七〇
一三九　うらやましきもの……一七〇
一四〇　とくゆかしきもの……一七二
一四一　こゝろもとなきもの……一七二
一四二　故殿の御服の頃……一七四
一四三　宰相中將齊信……一七五
一四四　この三月晦日……一七六
一四五　弘徽殿とは……一八〇
一四六　昔覺えてふようなるもの……一八一
一四七　たのもしげなきもの……一八一
一四八　近くてとほきもの……一八二

一四九　遠くてちかきもの……一八二
一五〇　井は……一八二
一五一　受領は……一八二
一五二　やどりの司の權の守は……一八二
一五三　大夫は……一八二
一五四　女のひとり住む家などは……一八三
一五五　宮づかへ人の里なども……一八三
一五六　雪のいと高くはあらで……一八五
一五七　村上の御時……一八六
一五八　御形の宣旨……一八七
一五九　宮に始めて參りたる頃……一八七
一六〇　したり顔なるもの……一九二
一六一　風は……一九四
一六二　野分の又の日こそ……一九五
一六三　こゝろにくきもの……一九六
一六四　島は……一九七
一六五　濱は……一九七
一六六　浦は……一九七
一六七　寺は……一九七
一六八　經は……一九七
一六九　文は……一九八
一七〇　佛は……一九八
一七一　物語は……一九八
一七二　野は……一九八
一七三　陀羅尼は……一九八
一七四　讀經は……一九九
一七五　あそびは……一九九
一七六　あそびわざは……一九九
一七七　舞は……一九九
一七八　ひきものは……一九九
一七九　しらべは……一九九
一八〇　笛は……二〇〇
一八一　見るものは……二〇一
一八二　五月ばかり……二〇二
一八三　いみじう暑きころ……二〇三
一八四　五日の菖蒲の……二〇四
一八五　よくたきしめたる薰物の……二〇五
一八六　月のいとあかきに……二〇五
一八七　おほきにてよきもの……二〇五
一八八　短くてありぬべきもの……二〇五
一八九　人の家につき〴〵しき物……二〇六
一九〇　ものへ行く道に……二〇六
一九一　行幸はめでたきものの……二〇六
一九二　よろづの事よりも……二〇六
一九三　細殿に便なき人……二〇八
一九四　三條の宮におはします頃……二〇九
一九五　十月十餘日の月……二〇九
一九六　成信の中將こそ……二一〇
一九七　大藏卿ばかり……二一〇
一九八　硯きたなげに……二一一
一九九　珍しといふべき事には……二一三
二〇〇　うまやは……二一三
二〇一　岡は……二一三
二〇二　社は……二一三
二〇三　ふるものは……二一六
二〇四　日は……二一六
二〇五　月は……二一七
二〇六　星は……二一七
二〇七　雲は……二一七
二〇八　さわがしきもの……二一七
二〇九　ないがしろなるもの……二一八
二一〇　詞なめげなるもの……二一八
二一一　さかしきもの……二一八
二一二　上達部は……二一九
二一三　君達は……二一九
二一四　法師は……二一九
二一五　女は……二一九
二一六　宮仕所は……二一九
二一七　身をかへたらむ人などは……二二〇
二一八　雪たかう降りて……二二〇
二一九　細殿の遣戸……二二一
二二〇　たゞすぎに過ぐるもの……二二一
二二一　殊に人にしられぬもの……二二一
二二二　五六月の夕かた……二二一
二二三　賀茂へ詣づる道に……二二一

二二四　八月晦日がたに……二三
二二五　いみじくきたなきもの……二三
二二六　せめて恐ろしきもの……二三
二二七　たのもしきもの……二三
二二八　いみじうしたてて……二三
二二九　世の中に……二四
二三〇　男こそ……二四
二三一　よろづの事よりも……二五
二三二　人のうへいふを……二六
二三三　人の顔に……二六
二三四　うれしきもの……二七
二三五　御前に人々あまた……二九
二三六　闕白殿……三一
二三七　たふときもの……二六
二三八　うたは……二六
二三九　指貫は……二六
二四〇　狩衣は……二七
二四一　單衣は……二七
二四二　わろきものは……二七
二四三　下襲は……二八
二四四　扇の骨は……二八
二四五　檜扇は……二八
二四六　神は……二八
二四七　崎は……二九
二四八　屋は……二九
二四九　時奏する……二九
二五〇　日のうら〳〵とあろ……二九
二五一　成信の中將は……二五〇
二五二　常に文おこする人の……二五四
二五三　きら〳〵しきもの……二五五
二五四　方違などして……二五五
二五五　雪いと高く降りたるを……二五六
二五六　陰陽師のもとなる童こそ……二五六
二五七　三月ばかり……二五七
二五八　清水に籠りたる頃……二五八
二五九　十二月廿四日……二五八
二六〇　宮仕する人々の……二五九
二六一　見習ひするもの……二六〇
二六二　うちとくまじきもの……二六〇
二六三　右衛門の尉なる者の……二六三
二六四　又小野殿の母上こそ……二六三
二六五　又業平が母の宮の……二六三
二六六　なかしと思ひし歌など……二六三
二六七　よろしき男を……二六四
二六八　大納言殿參り給ひて……二六四
二六九　侍都の君の御乳母の……二六五
二七〇　男は女親なくなりて……二六六
二七一　定澄僧都に……二六七
二七二　まことや下野に……二六七
二七三　ある女房の……二七七
二七四　便なき所にて……二六八
二七五　女のうは着は……二六八
二七六　唐衣は……二六八
二七七　裳は……二六八
二七八　汗衫は……二六八
二七九　織物は……二六八
二八〇　紋は……二六九
二八一　片つ方のゆだけ着たる人……二六九
二八二　かたちよき君達の……二六九
二八三　やまひは……二六九
二八四　心づきなきもの……二七〇
二八五　初瀬に詣でて……二七三
二八六　いひにくきもの……二七三
二八七　束帶は……二七三
二八八　品こそ男も女も……二七三
二八九　たくみの物くふこそ……二七三
二九〇　物がたりもせよ……二七三
二九一　ある所に……二七四
二九二　女房の參りまかでするに……二七四
二九三　すき〳〵しくて……二七五
二九四　清げなる若き人の……二七六
二九五　前の木だち高う……二七六
二九六　清げなる童の……二七八
二九七　見ぐるしきもの……二七八
二九八　物ぐらうなりて……二七九

○炭櫃＝圍爐裏。
○火桶＝火鉢の類。

校註

枕草子

一段

春は曙。やう〳〵しろくなりゆく山ぎは、すこしあかりて、紫だちたる雲のほそくたなびきたる。夏はよる。月の頃はさらなり、闇もなほ、螢飛びちがひたる。雨などのふるさへをかし。秋は夕ぐれ。夕日花やかにさして、山のはいと近くなりたるに、烏の寝どころへゆくとて、三つ四つ二つなど、飛びゆくさへあはれなり。まいて雁などのつらねたるが、いとちひさく見ゆる、いとをかし。日入りはて丶、風のおと蟲のねなど、いとあはれなり。冬はつとめて。雪のふりたるはいふべきにもあらず、霜などのいと白く、又さらでもいと寒きに、火などいそぎおこして、炭もて渡るも、いとつき〴〵し。晝になりて、ぬるくゆるびもてゆけば、炭櫃（すびつ）、火桶の火も、白き灰がちになりぬるはわろし。

○一月―元日の節會を行はる。

○七日―白馬の節會を行はる。

○中の御門―待賢門のこと。大内裏の東面の中門。

○左衛門の陣―内裏の東門の一なる建春門にあり。左衛門府の官人陣を立つ。

○立蔀―殿舎の側に立つる蔀造の屏。

○よろこびして―女叙位、給女王禄の奏慶をいふ。

○もち粥―望粥にて、十五日粥のこと。

○粥の木―粥杖また粥柱ともいふ。

○家の御達―その家に仕ふる老女達。

○あいぎやう―愛敬の字音。

二段

ころは、正月、三月、四五月、七月、八九月、十一月、十二月、すべて折につけつゝ、一年ながらをかし。

三段

正月一日は、まいて空のけしきうら〳〵と、めづらしく霞みこめたるに、世にありとある人は、姿かたち、心ことにつくろひ、君をもわが身をも祝ひなどしたるさま、ことにをかし。

七日は、雪間の若菜青やかにつみ出でつゝ、例はさしもさる物、目近からぬ所にもて騒ぐこそをかしけれ。白馬見むとて、里人は、車清げにしたてゝ見にゆく。中の御門のとじきみひき入るゝほど、かしらども一ところにまろびあひて、刺櫛も落ち、用意せねば折れなどして、笑ふも亦をかし。左衛門の陣などに、殿上人あまた立ちなどして、舎人の弓ども取りて、馬ども驚かして笑ふを、はつかに見入れたれば、立蔀などの見ゆるに、主殿司、女官などの行きちがひたるこそをかしけれ。いかばかりなる人、九重をかく立ちならすらむなど思ひやらるゝに、うちにも、見るはいとせばきほどにて、舎人が顔のきぬもあらはれ、白き物のゆきつかぬ所は、まことに黒き庭に雪のむら消えたるこゝちして、いと見ぐるし。馬のあがり騒ぎたるもおそろしく覺ゆれば、引き入られて、よくも見やられず。

八日、人々よろこびしてはしりさわぎ、車の音も、常よりは、ことに聞えてをかし。

十五日は、もち粥の節供まゐる。粥の木ひきかくして、家の御達、女房などのうかゞふを、打たれじと用意して、常にうしろを心づかひしたるけしきもをかしきに、いかにしてけるにかあらむ、打ちあてたるは、いみじう興ありとうち笑ひたるも、いとはえ〳〵し。ねたしと思ひたる、ことわりなり。こぞより、あたらしうかよふ壻の君などの、内へ參るほどを、心もとなく、ところにつけて、われはと思ひたる女房ののぞき、奥のかたにたゝずまふを、前に居たる人は心得て笑ふを、「あなかま、〳〵」と招きかくれど、君見知らず顔にて、おほどかにて居給へり。「こゝなる物とり侍らむ」などいひ寄り、はしり打ちて逃ぐれば、あるかぎり笑ふ。男君もにくからず、あいぎやうづきて笑みたる。ことに驚かず、顔すこし赤みて居たるもをかし。又、かたみに打ちて、男などさへ

ぞ打つめる。いかなる心にかあらむ、泣き腹だち、打ちつる人をのろひ、まがまがしくいふもをかし。内わたりなどやむごとなきも、今日はみな亂れて、かしこまりなし。

除目のほどなど、内わたりは、いとをかし。雪降りこほりなどしたるに、申文もてありく四位五位、若やかにこゝちよげなるは、いとたのもしげなり。老いて頭白きなどが、人にとかくあないいひ、女房の局によりて、おのが身のかしこきよしなど、心をやりて説き聞かするを、若き人々は、まねをし笑へど、いかでか知らむ。「よきに奏し給へ。啓し給へ」などいひても、得たるはよし、得ずなりぬるこそ、いとあはれなれ。

三月三日は、うら〳〵とのどかに照りたる。桃の花の今咲きはじむる。柳など、いとをかしきこそ更なれ。それもまだ、まゆに籠りたるこそをかしけれ。ひろごりたるはにくし。花も散りたるのちは、うたてぞ見ゆる。おもしろく咲きたる櫻を、長く折りて、大きなる花瓶にさしたるこそをかしけれ。櫻の直衣に、出袿して、まらうどにもあれ、御せうとの君達にもあれ、そこ近くゐて、物などうちいひたる、いとをかし。そのわたりに、鳥蟲のひたひつき、いとうつくしう

○除目—官に任ずるをいふ。目は名なり。前官の名を除き、當任を記す意とぞ。こゝの除目は縣召にて、地方官の敍任なり。正月九日より三日間行はる。

○申文—奏文なり。闕官位ある毎に、それを申請する文書。

○あない—案内の字音。

○三月三日—上巳の節とて、祓除なし、曲水の宴あり。

○櫻の直衣—直衣は男子の常服なり。櫻は表白、裏紫又は赤などの色を稱す。春三月の服。

○出袿—出衣とも いふ。晴の時下著の裾を、上衣の下より出すをいふ。

○御せうと—中宮の御兄道頼伊周等をさす。

○ひたひつき—顔付におなじ。

○祭—平安時代には、京都の賀茂祭を單に祭といへり。四月の第二の酉の日に行はる。

○青朽葉—表は經青、緯黄絲の織物にて、裏は青なるをいふ。

○二藍—藍と紅との間色。

○すそ濃—下の方を濃く、上の方を薄くぼかしに染めたる物。

○巻染—布帛を巻きたる上より絞りて染めたる物。

○けいし—履子の字音。

○ぢやうざ—定者の字音。法會の時の役僧。

て飛びありく、いとをかし。

祭の頃は、いみじうをかし。木々のこの葉、まだしげうはなうて、わかやかに青みたるに、霞も霧もへだてぬ空のけしきの、何となくそゞろにをかしきに、すこし曇りたる夕つかた、よるなど、忍びたる時鳥の、遠うそら耳かと覺ゆるまで、たど〳〵しきを聞きつけたらむ、何ごこちかはせむ。祭近くなりて、青朽葉、二藍などの物どもおしまきつゝ、細櫃の蓋に入れ、紙などにけしきばかり包みて、行きちがひもてありくこそをかしけれ。すそ濃、巻染など、常よりもをかしう見ゆ。わらはべの頭ばかり洗ひつくろひて、なりは皆なえ綻び、うち亂れかゝりたるもあるが、けいし、履などの「緒すげさせ。裏をさせ」などもて騒ぎ、いつしかその日にならむと、いそぎ走りありくもをかし。あやしう跳りてありく者どもの、さうぞきたてつれば、いみじく、ぢやうざといふ法師などのやうに、練りさまよふこそをかしけれ。ほど〳〵につけて、姉などの、供してつくろひありくもをかし。

四段

こと〳〵なるもの　法師の詞。男女の詞。

○さうじ物―精進物。
○験者―修験者に同じ。
○御嶽―金の御嶽の略。大和の吉野の金峯山のこと。藏王堂の奥の院。
○熊野―紀伊西牟婁郡なる熊野權現。
○物のけ―物の氣にて、鬼魅又は死靈生靈の祟るにいふ。
○てうずる―調ずる。
○こうじて―困じて。
○大進生昌が家―東宮大進平生昌の家にて、京の三條にありき。

り。

五段

思はむ子を法師になしたらむこそは、いと心苦しけ
業を、たゞ木のはしなどのやうに思ひたらむこそ、いとい
物のあしきを食ひ、いぬるをも。若きは物もゆかしからむ。女などの
も、などか忌みたるやうに、さしのぞかずもあらむ。それをも安からずいふ
まして験者などのかたは、いと苦しげなり。御嶽、熊野、かゝらぬ山なくあり
くほどに、おそろしき目も見、しるしあるきこえ出できぬれば、こゝかしこに
呼ばれ、時めくにつけて、安げもなし。いたく煩ふ人にかゝりて、物のけてう
ずるも、いと苦しければ、こうじてうちねぶれば、「ねぶりなどのみして」と咎
むるも、いと所せく、いかに思はむと。これは昔のことなり。今やうは安げな
り。

六段

大進生昌が家に、宮の出でさせ給ふに、東の門は四足になして、それより御輿は
入らせ給ふ。北の門より、女房の車ども、陣屋のもねば入りなむやと思ひて、

○宮―一條帝の中宮藤原定子。作者の主人なり。
○檳榔毛の車―蒲葵の葉にて車蓋を飾りたる牛車。
○地下―昇殿を聽されぬ官人の稱。
○于定國―前漢の人。于公の子なり。仕へて丞相に至る。但門を高く造りしは于公なり。
○進士―式部省の試驗に及第したる文章生をいふ。

頭つきわろき人も、いたくもつくろはず、寄せておるべきものと思ひあなづり
たるに、檳榔毛の車などは、門ちひさければ、さはりてえ入らねば、例の筵
道敷きておるゝに、いとにくゝ腹だたしけれど、いかゞはせむ。殿上人、地
下なるも、陣に立ちそひ見るもぬたし。御前にまゐりて、ありつるやう啓すれ
ば、「宮「こゝにも人は見るまじくやは。などかは、さしもうち解けつる」と笑はせ
給ふ。「清「されど、それは皆めなれて侍れば、よくしたてゝ侍らむにしこそ驚く人
も侍らめ。さてもかばかりなる家に、車入らぬ門やはあらむ。見えば笑はむ」
などいふ程にしも、「生昌「これまゐらせむ」とて、御硯などさし入る。「清「いで、いとわ
ろくこそおはしけれ。などてか、その門せばく造りて住み給ひけるぞ」といへ
ば、笑ひて、「生昌「家のほど身のほどに合はせて侍るなり」といらふ。「清「されど、門
のかぎりを、高く造りける人も聞ゆるは」といへば、あなおそろしと驚きて、
「生昌「それは于定國がことにこそ侍るなれ。ふるき進士などに侍らずば、承り知る
べくも侍らざりけり。たゞ〳〵この道にまかり入りにければ、かうだに辨へら
れ侍る」といふ。「清「この御道もかしこからざめり。筵道敷きたれば、皆おちいり
て騒ぎつるは」といへば、「生昌「雨のふり侍れば、げにさゝ侍らむ。よし〳〵、又仰

せかくべきこともぞ侍る。まかり立ち侍りなむ」とていぬ。「宮何事ぞ、生昌がいみじうおぢつるは」と問はせ給ふ。「清あらず。車の入らざりつることいひ侍る」と申しておりぬ。

おなじ局に住む若き人々などして、よろづの事も知らず、ねぶたければ皆寢ぬ。東の對の西の廂かけてある北の障子には、懸金もなかりけるを、それも尋ねず。家ぬしなれば、あないをよく知りてあけてけり。怪しう覆ればみたるものゝ聲にて、「生昌さぶらはむにはいかゞ」と、數多たびいふ聲に、驚きて見れば、几帳のうしろに立てたる燈臺の光もあらはなり。障子を五寸ばかりあけていふなりけり。いみじうをかし。更にかやうのすきゞしきわざ、ゆめにせぬ者の、家におはしましたりとて、むげに心にまかするなめりと思ふも、いとをかし。わが傍なる人を起して、「清かれ見給へ。かゝる見えぬものあめるを」といへば、頭をもたげて見やりて、いみじう笑ふ。「清あれは誰そ。けそうに」といへば、「生昌あらず。家あるじ、局あるじと定め申すべき事の侍るなり」といへば、「清門の事をこそ申しつれ、障子あけ給へとやはいふ」。「生昌なほその事申し侍らむ。そこにさぶらはむは、いかに〳〵」といへば、「女房達いと見苦しきこと。更にえおはせじ」とて

○東の對—寢殿造の東の對の屋。
○廂—廂の間にて、母屋のまはりの間。
○家ぬしなれば—生昌をいふ。
○すきゞしき事—好色めきたる事。
○けそう—顯證の字音。あらはなるをいふ。
○家あるじ—生昌をいふ。
○局あるじ—清少納言をさす。

笑ふめれば、「生昌若き人々おはしけり」とて、引きたてゝいぬるのちに、笑ふことといみじ。あけぬとならば、只まづ入りぬかし。消息をするに、「よかなり」とは、誰かはいはむと、げにをかしきに、つとめて、御前に參りて啓すれば、「宮さる事も聞えざりつるを、よべの事にめでて、入りにたりけるなめり。あはれ、あれをはしたなくいひけむこそいとほしけれ」と笑はせ給ふ。

姫宮の御かたのわらはべの裝束せさすべきよし仰せらるゝに、「生昌わらはの袙のうはおそひは、何色に仕うまつるべき」と申すを、又笑ふもことわりなり。「生昌姫宮の御前のものは、例のやうにては、にくげにさぶらはむ。ちうせい折敷、ちうせい高坏にてこそよくさぶらはめ」と申すを、「清さてこそは、うはおそひ着たるわらはべも參りよからめ」といふを、「宮なほ例の人のやうに、かくないひ笑ひそ。いときすぐなるものを、いとほしげに」と制し給ふもをかし。

中間なる折に、「生昌大進もの聞えむとあり」と、人の告ぐるを聞し召して、「宮またなでふことといひて、笑はれむとならむ」と仰せらるゝも、いとをかし。「宮ゆきて聞け」との給はすれば、わざと出でたれば、「生昌ひと夜の門のことを、中納言に語り侍りしかば、いみじう感じ申されて、『いかでさるべからむ折にたいめんして、

○姫宮—一條帝の皇女修子内親王。御母は中宮定子。
○袙のうはおそひ—汗衫（カザミ）の名あるを忘れたなり。袙は上衣の下に著るもの。
○ちうせい—ちひさきの轉訛。
○中間なる折—ハンパなる時。
○中納言—平惟仲。生昌の兄なり。
○たいめん—對面の字音。

○うへにさぶらふ―主上の御殿に飼はるゝをいふ。
○かうぶり賜はり―五位に叙せらるること。
○乳母の―介錯人をいふ。
○翁丸―宮中に飼へる犬の名。
○朝餉の間―清涼殿中の裏手にあり。主上の御食事又は燕居し給ふ間。
○忠隆―源氏。

申し承らむ』となむ申されつる」とて、又こともなし。ひと夜の事やいはむと、心ときめきしつれど、「今しづかに御局にさぶらはむ」と辭していぬれば、歸り參りたるに、「さて何事ぞ」との給はすれば、申しつる事を、さなむとまねび啓して、「わざと消息し、呼び出づべきことにもあらぬを、おのづから靜に局などにあらむにもいへかし」と笑へば、「おのがこゝちに賢しと思ふ人の譽めたるを、嬉しとや思ふとて、告げ知らするならむ」との給はする御けしきも、いとをかし。

七段

うへにさぶらふ御猫は、かうぶり賜はりて、命婦のおもととて、いとをかしければかしづかせ給ふが、はしに出でたるを、乳母の馬の命婦、「あなまさなや。入り給へ」とよぶに、きかで、日のさしあたりたるに、うちねぶりて居たるを、おどすとて、「馬命婦翁丸いづく。命婦のおもとくへ」といふに、まことかとて、しれ者はしりかゝりたれば、おびえまどひて、御簾の内に入りぬ。朝餉の間に、うへはおはします。御覽じて、いみじう驚かせ給ふ。猫は御ふところに入れさせ給ひて、をのこども召せば、藏人忠隆參りたるに、「この翁丸うちてうじて、犬

○瀧口―藏人所に屬せる武人。清涼殿南の御溝水の落口に、その陣あり。
○頭の辨―藏人頭にして辨官を兼ねる者の稱。こゝは藤原行成なり。
○おもの―中宮の御食膳なり。
○みかはやうと―御厠人。禁中の御厠を清むる下女。

島につかはせ。只今」と仰せらるれば、集まりて狩りさわぐ。馬の命婦もさいなみて、「上乳母かへてむ。いとうしろめたし」と仰せらるれば、かしこまりて、御前にも出でず。犬は狩り出でて、瀧口などして追ひつかはしつ。

あはれ、いみじくゆるぎありきつるものを、三月三日に、頭の辨、柳のかづらをせさせ、桃の花かざしにさゝせ、櫻、腰にさゝせなどして、ありかせ給ひしを、り、かゝる目見むとは思ひかけけむやと、あはれがる。「女房おものの折は、必ず向ひさぶらふに、さうゞしくこそあれ」などいひて、三四日になりぬる晝つかた、犬のいみじく啼く聲のすれば、何ぞの犬の、かく久しく啼くにかあらむと聞くに、よろづの犬どもはしり騷ぎとぶらひに行く。みかはやうとなるもの走りきて、「あないみじ。犬を藏人二人して打ち給ひ、死ぬべし。流させ給ひけるが歸り參りたるとて、てうじ給ふ」といふ。心うのことや、翁丸なり。「忠隆、實房なむ打つ」といへば、制しに遣るほどに、辛うじてなき止みぬ。「死にければ、門の外にひき棄てつ」といへば、あはれがりなどする夕つかた、いみじげに腫れ、あさましげなる犬のわびしげなるが、わなゝきありけば、「女房あはれ丸か。かゝる犬やはこの頃は見ゆる」などいふに、「女房翁丸」と呼べど、耳にも聞き

○右近―主上方の女房。

○さぶらふに―清少納言がなり。

入れず。「それぞ」といひ、「あらず」といひ、口々申せば、「宮右近ぞ見知りたる。呼べ」とて、下なるを、まづ、「とみのこと」とて召せば參りたり。「宮これは翁丸か」と見せ給ふに、「右近似て侍れども、これはゆゝしげにこそ侍るめれ。又『翁丸』と呼べば、よろこびてまうでくるものを、呼べど寄りこず。あらぬなめり。『それは打ち殺して、棄て侍りぬ』とこそ申しつれ。さる者どもの二人して打たむには、生きなむや」と申せば、心うがらせ給ふ。

暗うなりて、物くはせたれど食はねば、あらぬものにいひなして止みぬるつとめて、御梳櫛まゐり、御手水まゐりて、御鏡もたせて御覽ずれば、さぶらふに、犬の柱のもとについ居たるを、「清あはれ昨日、翁丸をいみじう打ちしかな。死にけむこそ悲しけれ。何の身にか、このたびはなりぬらむ。いかにわびしき心地しけむ」とうちいふほどに、この寢たる犬ふるひわなゝきて、涙をたゞ落しにおとす。いとあさまし。さはこれ、翁丸にこそありけれ。よべは隱れ忍びてあるなりけりとあはれにて、をかしきこと限なし。御鏡をもうちおきて、「清さは翁丸」といふに、ひれ伏していみじく啼く。御前にもうち笑はせ給ふ。人々參り集まりて、右近の内侍召して、「宮かく」など仰せらるれば、笑ひのゝしるを、うへ

○臺盤所―清涼殿中の一室。朝餉の間の南にあり。女房の詰所にて、食事用の臺盤のある故に、かく稱す。

○星―牽牛織女の二星。

にも聞し召して、渡らせおはしまして、「主上あさましう、犬なども、かゝる心あるものなりけり」と笑はせ給ふ。うへの女房たちなども聞きて、參り集まりて、呼ぶにも、今ぞ立ちうごく。なほ顔など腫れためり。「清物調ぜさせばや」といへば、「宮つひにいひあらはしつる」など笑はせ給ふに、忠隆聞きて、臺盤所のかたよりの、「忠隆まことにや侍らむ。かれ見侍らむ」といひたれば、「あなゆゝし。さる者なし」といはすれば、「忠隆さりとも、つひに見つくる折も侍らむ。さのみもえかくさせ給はじ」といふ。さて後、かしこまりゆるされて、もとのやうになりにき。なほあはれがられて、ふるひ啼き出でたりし程こそ、世に知らず、をかしくあはれなりしか。人々にもいはれて、啼きなどす。

八段

正月一日、三月三日は、いとうらゝかなる。五月五日は曇りくらしたる。七月七日は曇り、夕つかたは晴れたる空に、月いとあかく、星のすがた見えたる。九月九日は、曉がたより雨すこし降りて、菊の露もこちたくそぼち、おほひたる綿などもいたくぬれ、うつしの香ももてはやされたる。つとめては止みにたれど、なほ曇りて、やゝもすればふり落ちぬべく見えたるもをかし。

○よろこび奏する—任官の拜賀なり。○うしろをまかせて—束帶の時、下襲の裾を曳くをいふ。うしろは裾（キヨ）のこと。

○今内裏—小一條院のこと。長保元年六月十四日、内裏燒亡によりてこゝに遷る。○北の陣—朝平門なる縫殿の陣をいふ。○權中將—源成信。○山階寺—奈良の興福寺のこと。

○わが名もらすな—古今集に「大上のとこの山なるいさや川いさと答へてわが名もらすな」。左註に「此歌は或人あめの帝の近江の采女に賜へる」とあり。

九段

よろこび奏するこそをかしけれ。うしろをまかせて、笏とりて、御前の方に向ひてたてるを。拜し舞蹈しさわぐよ。

十段

今内裏の東をば、北の陣とぞいふ。檜の木のはるかに高きが立てるを、常に見て、「幾ひろかあらむ」などいふに、權中將の、「もとより打ちきりて、定澄僧都の枝扇にせさせばや」との給ひしを、山階寺の別當になりて、よろこび申の日、近衛づかさにて、この君の出で給へるに、高き履子をさへはきたれば、ゆゝしく高し。出でぬる後に、「など、その枝扇はもたせ給はぬ」といへば、「權中將もものわすれせず」と笑ひ給ふ。

十一段

山は　小倉山。三笠山。このくれ山。わすれずの山。いりたち山。鹿背山。ひはの山。かたさり山こそ、誰に所おきけるにかとをかしけれ。五幡山。後瀬山。笠取山。比良の山。鳥籠の山は、「わが名もらすな」と、みかどの詠ませ給ひけむ、いとをかし。伊吹山。朝倉山、よそに見るこそをかしけれ。いは田山。

○臨時の祭—石清水八幡宮の臨時祭。三月の第二の午の日に行はる。大比禮樂あり。

○長谷寺—大和初瀬にあり。眞言宗の大寺。十一面觀音を本尊とす。

大比禮山もをかし。臨時の祭の使などおもひ出でらるべし。手向山。三輪の山、いとをかし。音羽山。まちかね山。たまさか山。耳なし山。末の松山。葛城山。美濃のお山。柞山。位山。吉備の中山。嵐山。更級山。姨捨山。小鹽山。淺間山。かたゝめ山。かへる山。妹背山。

十二段

峯は　ゆづるはの峯。阿彌陀の峯。彌高の峯。

十三段

原は　たか原。みかの原。あしたの原。その原。萩原。粟津の原。なし原。うなゐこが原。安倍の原。篠原。

十四段

市は　辰の市。つば市は、大和にあまたある中に、長谷寺にまうづる人の、必ずそこにとゞまりければ、觀音の御緣あるにやと、心ことなるなり。おふさの市。餝摩の市。飛鳥の市。

十五段

淵は　かしこ淵、いかなる底の心を見えて、さる名をつけむと、いとをかし。

○藏人などの具―藏人は青色の服を聽さる。青色は麹塵とて、天皇者御の服色なり。

○うへの御局―弘徽殿の上の御局の略。清涼殿内東北隅にあり。

ないりその淵、誰にいかなる人の教へしならむ。青色の淵こそ、またをかしけれ、藏人などの具にしつべくて。いな淵。かくれの淵。のぞきの淵。玉淵。

十六段

海は　水うみ。興謝の海。かはぐちの海。伊勢の海。

十七段

わたりは　しかすがの渡。みづはしの渡。こりずまの渡。

十八段

みさゝぎは　うぐひすの陵。かしはばらの陵。あめの陵。

十九段

家は　近衞の御門。二條、一條もよし。染殿の宮。せかゐ。菅原の院。冷泉院。朱雀院。とう院。小野の宮。紅梅。あがたの井戸。東三條。小六條。小一條。

二十段

清涼殿のうしとらの隅の、北のへだてなるみさうじには、荒海のかた、いきたる物どものおそろしげなる、手長足長をぞかゝれたる。うへの御局の戸押しあけたれば、常に目に見ゆるを、にくみなどして笑ふほどに、勾欄のもとに、青

○大納言―藤原伊周。中宮の御兄。

○指貫―指貫の袴の略。裾に紐とて、くゝりあり。

○唐衣―婦人の禮服にて、上衣の上に着る。長け短し。唐制を模したる物といふ。

○藤―表は淺黄又薄紫、裏は萌黄。

○山吹―表は薄朽葉、裏は黄。

○晝の御座―清涼殿内の主上の御座所。

○おし〳〵―警蹕の聲なり。

○長押のもと―下長押のきは。

○三室の山の―萬葉集十三に「月は日は變りゆけども久にふる三室の山のとつ宮處」。

き瓶の大きなるすゑて、櫻のいみじく面白き枝の、五尺ばかりなるを、いと多くさしたれば、勾欄のもとまでこぼれ咲きたるに、ひるつかた、大納言殿、櫻の直衣の少しなよらかなるに、濃き紫の指貫、白き御衣ども、うへに濃き綾の、いとあざやかなるを出して、參り給へり。うへのこなたにおはしませば、戸口の前なるほそき板敷に居給ひて、ものなど奏し給ふ。御簾のうちに、女房、櫻の唐衣ども、くつろかにぬぎ垂れつゝ、藤、山吹など、いろ〳〵にこのもしく、あまた、小半蔀の御簾よりおし出でたるほど、晝の御座のかたに、おものまゐる足おと高し。けはひなど、「おし〳〵」といふ聲聞ゆ。うら〳〵とのどかなる日のけしき、いとをかしきに、はての御盤もたる藏人參りて、おもの奏すれば、中の戸より渡らせ給ふ。御供に大納言殿參らせ給ひて、ありつる花のもとに歸り居給へり。宮の御前の御几帳押しやりて、長押のもとに出でさせ給へるなど、たゞ何事もなく、よろづにめでたきを、さぶらふ人も、思ふことなき心ちするに、「月も日もかはりゆけどもひさにふる三室の山の」といふふる言を、ゆるらかにうち詠み出して居給へる、いとをかしと覺ゆる。げにぞ千歳もあらまほしげなる御ありさまなりや。

○陪膳云々―給事人。○をのこども―供膳の藏人をさす。

○難波津―古今集の序註に「難波津にさくやこの花冬ごもり今を春べとさくやこの花」。當時の人の習字の始に書き習ひしもの。

○年ふれば―古今集に出づ。歌政大臣藤原良房の作。詞書に「染殿の后（良房の女）の御前に、花瓶に櫻の花をさゝせ給へるを見てよめる」とあり。

○只今の關白殿―藤原道隆。中宮の御父。

陪膳つかうまつる人の、をのこどもなど召すほどもなく、渡らせ給ひぬ。「御硯の墨すれ」と仰せらるゝに、日はそらにのみにて、たゞおはしますをのみ見奉れば、ほど遠き日もはなちつべし。白き色紙おし畳みて、「これに、只今覺えむふる言、一つづつ書け」と仰せらるゝ。とに居給へるに、「これはいかに」と申せば、「とく書きて參らせ給へ。をのこは言加へ候ふべきにもあらず」とて、御硯取りおろして、「とく〳〵。たゞ思ひめぐらさで、難波津もなにも、ふと覺えむことを」と責めさせ給ふに、などさは聽せしにか。すべておもてさへ赤みてぞ思ひみだるゝや。春の歌、花の心など、さいふ〳〵も、上臈二つ三つ書きて、「これに」とあるに、

年經れば齡は老いぬしかはあれど花をし見れば物おもひもなし。

といふことを、「君をし見れば」と書きなしたるを御覽じて、「只この心ばへどものゆかしかりつるぞ」と仰せらるゝついでに、「圓融院の御時、御前にて、『草子に、歌一つ書け』と、殿上人に仰せられけるを、いみじう書きにくゝすまひ申す人々ありけるに、『更に手のあしさよさ、歌の折にあはざらむをも知らじ』と仰せられければ、わびて皆書きける中に、只今の關白殿の、三位の中將と聞えける時、

汐のみついつもの浦のいつも〳〵君をばふかく思ふはやわが。

といふ歌の末を、『頼むはやわが』と書き給へりけるをなむ、いみじくめでさせ給ひける」と仰せらるゝも、すゞろに汗あゆる心ちぞしける。若からむ人は、さも得書くまじき事のさまにやとぞ覺ゆる。例はいとよく書く人も、あいなく皆つゝまれて、書きけがしなどしたるもあり。

古今の草子を、御前に置かせ給ひて、歌どもの本を仰せられて、「これが末はいかに」と仰せらるゝに、すべて夜晝心にかゝりて覺ゆるもあるが、げによく覺えず、申し出でられぬことは、いかなることぞ。宰相の君ぞ十ばかり。それも覺ゆるかは。まいて五つ六つなどは、たゞ覺えぬよしをぞ啓すべけれど、「さやばけにくゝ、仰ごとを、はえなくもてなすべき」といひ、口をしがるもをかし。知ると申す人なきをば、やがて讀みつゞけさせ給ふを、「さてこれは、皆知りたる事ぞかし。などかくつたなくはあるぞ」といひ歎く。「中にも、古今あまた書き寫しなどする人は、皆覺えぬべきことぞかし。村上の御時、宣耀殿の女御と聞えけるは、小一條の左大臣殿の御むすめにおはしましければ、誰かは知り聞

○古今―古今和歌集。醍醐帝の代の勅撰歌集なり。廿卷。○宰相の君―左大臣藤原顯忠の孫女。

○宣耀殿女御―藤原芳子。○小一條左大臣―藤原師尹。

○きん―七絃の琴。

○物忌―星鬼遊行の際、災禍を避くる爲、家に籠りて慎むをいふ。この日禁中には政務なし。

○ふよう―不用の字音。

○けうさん―夾算の字音。竹にて作り、今の枝折の如く用ふ。

えざらむ。まだ姫君におはしける時、父おとゞの教へ聞えさせ給ひけるは、『一には御手を習ひ給へ。つぎにはきんの御琴を、いかで人に彈きまさむとおぼせ。さて古今の歌はたまきを、皆うかべさせ給はむを。御學問にはせさせ給へ』となむ聞えさせ給ひけると聞しめしおかせ給ひて、御物忌なりける日、古今をかくしてもてわたらせ給ひて、例ならず、御几帳をひきたてさせ給ひければ、女御あやしとおぼしけるに、御草子をひろげさせ給ひて、『その年その月、何のをり、その人の詠みたる歌はいかに』と問ひ聞えさせ給ふに、かうなりと心得させ給ふもをかしきものの、ひがおぼえもし、忘れたるなどもあらば、いみじかるべき事と、わりなくおぼし亂れぬべし。そのかたおぼめかしからぬ人、二三人ばかり召し出でて、碁石して數を置かせ給はむとて、しひ聞えさせ給ひけむ程、いかにめでたくをかしかりけむ。御前にさぶらひけむ人さへこそ羨ましけれ。せめて申させ給ひければ、さかしうやがて末までなどはあらねど、すべてつゆたがふ事なかりけり。いかでなほ少しおぼめかしく、ひが事見つけてをやまむと、ねたきまで思しける。十卷にもなりぬ。更にふようなりけりとて、御草子にけうさんして、みとのごもりぬるも、いとめでたしかし。いと久しうあ

○さう―左右。

○おほとなぶら―大殿油にて、燈臺をいふ。

○殿―師尹。

○えせざいはひ云云―夫をもちたるをいふ。

○内侍―内侍所に仕ふる掌侍の稱。

りて起きさせ給へるに、なほこの事、さうなくてやまむ、いとわろかるべしと、おほとなぶら近くまゐりて、夜ふくるまでなむ讀ませ給ひける。されど、つひに負け聞えさせ給はずなりにけり。うへ渡らせ給ひてのち、かゝる事なむと、人々、殿に申し奉りければ、いみじうおぼし騷ぎて、御誦經などあまたせさせ給ひて、そなたに向ひてなむ、念じくらさせ給ひけるも、すき〴〵しくあはれなる事なり」など語り出でさせ給ふ。うへも聞しめしてめでさせ給ひ、「いかでさ多く讀ませ給ひけむ。われは三卷四卷だにも、得讀みはてじ」と仰せらる。「昔はえせ者も、皆すきをかしうこそありけれ。この頃かやうなる事やは聞ゆる」など、御前にさぶらふ人々、うへの女房の、こなた許されたるなど參りて、口々いひ出でなどしたる程は、まことに思ふ事なくこそ覺ゆれ。おひさきなく、まめやかに、えせざいはひなど見て居たらむ人は、いぶせくあなづらはしく思ひやられて、なほさりぬべからむ人のむすめなどは、さしまじらはせ世の中の有樣も見せならはさまほしう、内侍などにても、しばしあらせばやとこそ覺ゆれ。宮仕する人をば、あは〳〵しうわろきことに思ひ居たる男

○上達部―三位以上の公卿を稱す。
○ずんざ―從者の字音便。
○をさめ―長女の義にて、下女の長。
○たびしかはら―瓦の義にて、身分卑き者をいふ。
○内侍のすけ―典侍、内侍所の次官。
○受領―國司をおもに稱す。
○五節などの舞姫などの略。五節は大嘗會新嘗會の時に行はるゝ童女の舞の名。
○すさまじ―興のなきこと。
○紅梅―表紅、裏紫。十一月より二月まで着る。
○方たがへ―他行するに、その方角、星まはりのわるき時は、前日他處に宿泊し、さてそこより目的地に行くを方違といふ。
○結びたる―細長く疊みて、結びたる文。
○立文―細長く疊みて、その端をひねりたる文。
○ほい―本意の字音便。
○あからさま―假初なるをいふ。
○げんざ―驗者。

こそ、いとにくけれ。げにそもまたさる事ぞかし。かけまくもかしこき御前を始め奉り、上達部、殿上人、四位、五位、六位、女房は更にもいはず、見ぬ人は少くこそはあらめ。女房のずんざども、その里よりくる者ども、をさめ、御厠人、たびしかはらといふまで、いつかはそれを恥ぢ隱れたりし。殿ばらなどは、いとさしもあらずやあらむ。それもある限はさぞあらむ。うへなどいひてかしづきするたるに、心にくからず覺えむことわりなれど、内侍のすけなどいひて、折々うちへ參り、祭の使などに出でたる、面たゞしからずやはある。さて籠り居たる人はいとよし。受領の五節などいだす折、さりともいたうひなび、見知らぬこと、人に問ひ聞きなどはせじと、心にくきものなり。

二十一段

すさまじきもの　晝ほゆる犬。春の網代。三四月の紅梅のきぬ。ちごのなくなりたるうぶ屋。火おこさぬ火桶、炭櫃。牛にくみたる牛飼。博士のうち續きにようこうませたる。方たがへにゆきたるに、あるじせぬ所。まして節分はすさまじ。ひとの國よりおこせたる文の物なき。京のをもさこそは思ふらめ。されどそれは、ゆかしき事をも書きあつめ、世にある事を聞けばよし。人の許に、わざときよげに書きたててやりつる文の、かへりごと見む、今はきぬらむかし、怪しく遲きと待つほどに、ありつる文の結びたるも、たて文も、いときたなげに持ちなしふくだめて、うへに引きたりつる墨さへ消えたるを、「おはしまざりけり」とも、もしは「物忌とて取り入れず」などいひて、もて歸りたる、いとわびしくすさまじ。又、必ずくべき人のもとに、車をやりて待つに、入りくる音すれば、さなりと、人々出でて見るに、車やどりに入りて、轅ほうとうちおろすを、「いかなるぞ」と問へば、「今日はおはしまさず」、「渡り給はず」とて、牛のかぎりひき出でいぬる。又、家ゆすりて取りたる壻のこずなりぬる、いとすさまじ。さるべき人の宮仕するがりやりて、いつしかと思ふも、いとほいなし。ちごの乳母の、只あからさまとていぬるを、もとむれば、とかくあそばし慰めて、「とくこ」といひやりたるに、「こよひはえ參るまじ」とて、返しおこせたる、すさまじきのみにもあらず、にくさわりなし。女などむかふる男、ましていかならむ。待つ人ある所に、夜すこし更けて、忍びやかに門を叩けば、胸すこしつぶれて、人いだして問はするに、あらぬよしなき者の、名のりしてきたるこそ、すさまじといふ中にも、かへすゞすさまじけれ。げんざの物の

○てうず―調す。祈り伏すること。
○持たせて―寄児（よりまし）に持たせて。
○せみ聲―迫聲。
○護法―護法童子の略。護法よりまし に憑けば、物のけ退散す。
○あれと―我と。
○と―外。
○前司―前國司の略。

けてうずとて、いみじうしたり顔に、獨鈷や珠數など持たせて、せみ聲にしぼりいだし讀みゐたれど、いさゝかさりげもなく、護法もつかねば、集まりて念じ居たる男も女もあやしと思ふに、時のかはるまで讀みこうじて、「更につかず。たちね」とて、珠數取り返して、あれと、「驗なしや」とうちいひて、額よりかみざまに、かしらさぐりあげて、欠伸をおのれうちして、よりふしぬる。

除目につかさ得ぬ人の家。今年はかならずと聞きて、はやうありし者どもの、ほか〳〵なりつる、片田舎にすむ者どもなど、皆集まりきて、出でいる車の轅もひまなく見え、物まうでする供にも、我も〳〵と參りつかうまつり、物くひ酒飲みのゝしりあへるに、はつる曉まで、門たゝく音もせず。怪しなど耳立てて聞けば、さきおふ聲して、上達部など、皆出で給ふ。物ぎきに、よひより寒がりわなゝき居りつる下衆をのこなど、いと物憂げにあゆみくるを、をる者どもは、問ひだにもえ問はず。とよりきたる者どもなどぞ、「殿は何にかならせ給へる」など問ふ。いらへには「何の前司にこそは」と、必ずいらふる。まことに頼みける者は、いみじうなげかしと思ひたり。つとめてになりて、ひまなく居りつる者も、やう〳〵一人二人づつすべり出でぬ。ふるき者の、さもえゆき離るま

○よろしう―可なりの義。
○産養―出産の時、七夜まで、毎日親戚より、食物を、その家に贈ること。
○薬玉―香料か錦袋に入れ、菖蒲艾を結び、五彩の絲を飾に下げたる物。五月五日に飾る。
○卯槌―桃の木を三寸程に切りたるに、五彩の絲を下げたる物。正月の卯の日の祝に用ふ。

じきは、來年の國々を、手を折りて數へなどして、ゆるぎありきたるも、いみじういとほしう、すさまじげなり。

よろしう詠みたりとおもふ歌を、人のもとに遣りたるに、返しせぬ。懸想文はいかゝはせむ。それだに、折をかしうなどある、返事せぬは心おとりす。又、さわがしう時めかしき處に、うちふるめきたる人の、おのがつれ〴〵といとまあるまゝに、昔おぼえて、ことなる事なき歌よみしておこせたる。物のをりの扇、いみじと思ひて、心ありと知りたる人にいひつけたるに、その日になりて、思はずなる繪などかきて得たる。產養、馬のはなむけなどの使に、祿など取らせぬ。はかなき薬玉、卯槌などもてありく者などにも、なほ必ず取らすべし。思ひかけぬことに得たるをば、いと興ありと思ふべし。これはさるべき使ぞと、心ときめきしてきたるに、たゞなるは、まことにすさまじきぞかし。壻とりて、四五年まで、うぶ屋のさわぎせぬ所。「大人なる子どもあまた、ようせずば、うまごなども這ひありきぬべき人の親どちの晝寢したる。傍なる子どもの心ちにも、親の晝寢したるは、よりどころなくすさまじくぞあるべき。寢起きてあぶる湯は、腹立たしくさへこそ覺ゆれ。」しはすのつごもりの長雨。「ひと日ばか

○げたい—懈怠の字音。○あへず—滲出せぬこと。

○加持—佛力の加護を祈る呪法。

りの精進のげたい」とやいふべからむ。八月の白がさね。乳あへずなりぬる乳母。

二十二段

たゆまるゝもの　さうじの日のおこなひ。日遠きいそぎ。寺に久しく籠りたる。

二十三段

人にあなづらるゝもの　家の北おもて。あまり心よきと、人に知られたる人。年老いたるおきな。又あは〳〵しき女。築土のくづれ。

二十四段（上）

にくきもの　いそぐ事ある折に、長言するまらうど。あなづらはしき人ならば、「のちに」などいひても追ひやりつべけれども、さすがに心はづかしき人、いとにくし。硯に髪の入りてすられたる。又墨の中に、石こもりて、きし〳〵ときしみたる。俄にわづらふ人のあるに、驗者もとむるに、例ある所にはあらで、ほかにある尋ねありくほどに、待遠に久しきを、辛うじて待ちつけて、喜びながら加持せさするに、この頃物のけにこうじにけるにや、居るまゝにすなはち、ねぶり聲になりたる、いとにくし。なんでふことなき人の、すゞろにえがち

○狩衣—もと狩猟の時の布衣なりしが、當時は、絹にて製し、六位以上の常服となれり。○式部大夫—五位の式部の大丞をいふ。○あめき—わめきに同じ。○こふどの—國府殿。

に物いたういひたる。火桶、炭櫃などに、手のうらうち返し、皺おしのべなどしてあぶり居る者。いつかは若やかなる人などの、さはしたりし。老いばみうたてあるものこそ、火桶のはたに、足をさへもたげて、物いふまゝにおしすりなどもすらめ。さやうの者は、人のもとに來て、居むとする所を、まづ扇して、塵拂ひすてて、居も定まらずひろめきて、狩衣の前、しもざまにまくり入れても居るかし。かゝることは、いひがひなき者のきはにやと思へど、少しよろしき者の式部の大夫、駿河の前司などいひしがさせしなり。また酒飲みてあめき、口をさぐり、髯あるものは、それを撫でて、盃人に取らするほどのけしき、いみじくにくしと見ゆ。「また飲め」などいふなるべし。身ぶるひをし、かしら振り、口わきをさへ引き垂れて、わらはべの、「こふどのに參りて」など謠ふやうにする。それはしも、まことによき人の、さし給ひしより、心づきなしと思ふなり。

物うらやみし、身のうへなげき、人のうへいひ、露ばかりの事もゆかしがり、聞かまほしがりて、いひ知らせぬをば怨じそしり、又、わづかに聞きわたる事をば、われもとより知りたる事のやうに、こと人にも語りしらべいふも、いと

○伊豫簾―細き竹のすだれ。その竹伊豫に産す。
○帽額の簾―上部に水引のある、縁取の精製の簾。
○遣戸―横にあくる引戸。

○さいまくろ―才がるをいふ。

にくし。物聞かむと思ふほどに泣くちご。烏の集まりて飛びちがひ鳴きたる。忍びてくる人見しりて吠ゆる犬は、うちも殺しつべし。さるまじうあながちなる所に、かくし伏せたる人のいびきしたる。また、ひそかに忍びてくる所に、長烏帽子して、さすがに人に見えじとまどひ出づるほどに、物に衝きさはりて、そよろといはせたる、いみじうにくし。伊豫簾など懸けたるをうちかづきて、さら〳〵と鳴したるも、いとにくし。帽額の簾は、ましてこはき物のうちおかるゝ、いとしるし。それもやをら引きあげていで入りするは、更に鳴らず。また、遣戸など荒くあくるも、いとにくし。少しもたぐるやうにてあくるは、鳴りやはする。あしうあくれば、障子などもたをめかし、こほめくこそしるけれ。

「ねぶたしと思ひて臥したるに、蚊の細聲に名のりて、顔のもとに飛びありく。羽風さへ身のほどにあるこそ、いとにくけれ。きじめく車に乗りてありく者、耳も聞かぬにやあらむと、いとにくし。わが乗りたるは、その車のぬしさへにくし。

物語などするに、さし出でて、われひとりさいまくる者、すべてさしいでは、わらはも大人も、いとにくし。昔物語などするに、わが知りたりけるは、ふと

○はなひ―鼻放る。
○誦文する―呪文を唱ふること。クサメは卽ち呪文なり。
○男しう―しうは主の字音。

出でていひくたしなどする、いとにくし。鼠のはしりありく、いとにくし。あからさまにきたる兒ども、わらはべをらうたがりて、をかしき物など取らするにならひて、常にきて居入りて、調度やうち散しぬるにくし。家にても、宮づかへ所にても、逢はでありなむと思ふ人のくるに、そら寝をしたるを、わが許にある者どもの、起しよりきては、いぎたなしと思ひ顔に引きゆるがしたる、いとにくし。「今まゐりのさし越えて、物知り顔に教へやうなる事いひ、うしろみたる、いとにくし。」わが知る人にてあるほど、はやう見し女のこと、譽めいひ出しなどするも、過ぎて程へにけれど、なほにくし。まして、さしあたりたらむこそ思ひやらるれ。されどそれは、さしもあらぬやうもありかし。はなひて誦文する人。おほかた家の男しうならでは、「高くはなひたる者、いとにくし。蚤もいとにくし。衣のしたにをどりありきて、もたぐるやうにするよ。また、犬のもろ聲に、長々と鳴きあげたる、まが〳〵しくにくし。めのとの男こそあれ。女はされど、近くも寄らねばよし。をのこ兒をば、たゞわが物にして、立ちそひ領じてうしろみ、いさゝかもこの御事にたがふ者をば讒し、人をば人とも思ひたらず、怪しけれど、これがとがを、心にまかせていふ人もなければ、

○この段、流布本には、次の小一條院の段の後にあり。今引上げて、前文に連續せしめたり。

○よき人―身分よき人。

○あいぎやう、てうろう―愛敬、嘲弄。

○宰相―參議の唐名。

○たゞ名のる名―實名なり。

○えんだち―艶だち。

所得（ところえ）いみじきおもゝちして、事を行ひなどするよ。

二十四段（下）

文ことばなめき人こそ、いとゞにくけれ。世をなのめに書きなしたる詞のにくきこそ。さるまじき人の許に、あまり畏りたるも、げにわろき事ぞ。されど、わが得たらむはことわり、人の許なるさへにくゝこそあれ。大方さし向ひても、なめきは、などかくいふらむと、かたはらいたし。ましてよき人などを、さ申す者は、さるはをこにて、いとにくし。男しうなどわろくいふ、いとわろし。わが使ふ者など、「おはする」、「の給ふ」などいひたる、いとにくし。こゝもとに、「侍る」といふ文字をあらせばやと、聞くことこそ多かめれ。あいぎやうなくと、詞しなめきなどいへば、いはるゝ人も、聞く人も笑ふ。かく覺ゆればにや、あまりてうろうするなどいはるゝまである人も、わろきなるべし。殿上人、宰相など、たゞ名のる名を、いさゝかつゝましげならずいふは、いとかたはなるを、げによくさいはず、女房の局なる人をさへ、「あのおもと」、「君」などいへば、めづらかに嬉しと思ひて、譽むることぞいみじき。殿上人、君達を、御前よりほかにては、つかさをいふ。また、御前にて物をいふとも、聞しめさむには、などてかは、「まろが」などいはむ。さいはむにくし。かくいはざらむにわろかるべき事かは。ことなることなき男の、ひきいれ聲して、えんだちたる。墨つかぬ硯。女房の物ゆかしうする。たゞなるだに、いとしも思はしからぬ人の、にくげ事したる。ひとり車に乘りて物見る男、いかなる者にかあらむ、やむごとなからずとも、わかき男どもの、物ゆかしう思ひたるなど、ひき乘せても見よかし。透影（すきかげ）に只一人かゞよひて、心一つにまもり居たらむよ。

曉に歸る人の、よべおきし扇、ふところ紙もとむとて、暗ければ、探（さぐ）りあてむあてむと叩きもわたし、「あやし」などうちいひ、求め出でて、そよ〳〵と懷にさし入れて、扇ひきひろげて、ふた〳〵とうち使ひて、まかり申（まうし）したる、にくしとはよのつね、いと愛敬（あいぎやう）なし。おなじごと夜深くいづる人の、烏帽子の緒强くゆひたる、さしも固めずともありぬべし。やをらさながらさし入れたりとも、人の咎むべきことかは。いみじうしどけなう、かたくなく、直衣（なほし）、狩衣（かりぎぬ）などゆがみたりとも、誰かは見知りて笑ひ謗りもせむ。人はなほ曉のありさまこそ、をかしくもあるべけれ。わりなくしぶしぶに起きがたげなるを、しひてそゝのかし、「あけ過ぎぬ。あな見ぐるし」などいはれて、うち歎くけしきも、げにあ

○格子―格子を打附けたる戸。上下二枚ありて、上のは釣上げ、下のは外すやうに造れり。又一枚戸のもあり。
○妻戸―家の端にある開き戸。こゝを出入口とす。

○小一條院―一條大宮の院なり。
○わたどの―渡殿。こゝは橋がゝりになれる廊なり。
○壺―中庭をいふ。

○高遠の大貳―大宰大貳藤原高遠。
○高砂―催馬樂の律の曲の歌。

かず、物うきにしもあらむかしと覺ゆ。指貫なども、居ながら着もやらず、まづさしよりて、夜ひと夜いひつることののこりを、女の耳にいひ入れ、何業すとなけれど、帶などをばゆふやうなりかし。格子あげ、妻戸ある處は、やがてもろ共に出でゆき、晝のほどのおぼつかならむ事なども、いひいでにすべり出でなむは、見送られて、名殘もをかしかりぬべし。名殘も出所あり。いときはやかに起きて、ひろめきたちて、指貫の腰強くひきゆひ、直衣、うへのきぬ、狩衣も袖かいまくり、よろづさし入れ、帶強くゆふにくし。明けて出でぬる所たてぬ人、いとにくし。

二十五段

小一條院をば、今内裏とぞいふ。おはします殿は清涼殿にて、その北なる殿におはします。西東はわたどのにて、渡らせ給ふ。常にまうのぼらせ給ふ。おまへは壺なれば、前栽などうゑ、ませゆひて、いとをかし。ささらぎ十日の日の、うら〳〵とのどかに照りわたるに、わたどのゝ西の廂にて、うへの御笛ふかせ給ふ。高遠の大貳、御笛の師にて物し給ふを、こと笛ふたつして、高砂をぞかへし吹かせ給へば、なほいみじうめでたしといふも、よのつねなり。御笛のことどもなど申し給ふ、いとめでたし。御簾のもとに集ひ出でて、見奉るぞ、なほ高う吹かせおはしませ。得聞きさぶらはじ」とて、みそかにのみ吹かせ給ふを、申せば、「いかでか、さりとも聞き知りなむ」とて、「この者なかりけり。只今こそ吹かめ」と仰せられて、吹かせ給ふ。いみじうをかし。

○芹つみし―綺語抄、童蒙抄などに見えたる故事。
○すけたゞ―藤原輔尹か。
○あらわに―荒鰐の義。
○さうなし―左右なし。荒々しき方に並なきをいふ。
○をはりうと―尾張人の音便。
○尾張の衆時―尾張の人安居衆時。

○あない―案内の字音。
○けさうじて―化粧じて。

二十六段

心ときめきするもの　雀のこがひ。ちご遊ばする所の前わたりたる。よきたき物たきて、ひとり臥したる。からの鏡の少しくらき見たる。よきをとこの車とどめて、物いひあないせさせたる。かしら洗ひけさうじて、香にしみたる衣着たる、ことに見る人なき所にても、心のうちはなほをかし。待つ人などある夜。雨のあし、風の吹きゆるがすも、ふとぞ驚かるゝ。

○葵―二葉葵にて賀茂の神事に用ふ。○ひゝな遊―人形遊。○さいで―小切。○かはほり―蝙蝠扇の略。今普通に用ふる紙張の扇。

○女繪―女の姿を主として書ける繪。つみちのく紙―陸奥より産せし紙にて、檀紙なり。○てうばみ―丁中の字音便。雙六に用ふる術語。○すそ―咒詛の字音便。

二十七段

すぎにしかた戀しきもの　枯れたる葵。ひゝな遊の調度。二藍、えび染などのさいでのおしへされて、草子のなかにありけるを見つけたる。又、折からあはれなりし人の文、雨などのふりてつれ〴〵なる日さがしいでたる。こぞのかはほり。月のあかき夜。

二十八段

こゝろゆくもの　よくかいたる女繪の、詞をかしうつゞけて多かる。物見のかへさに、乘りこばれて、をのこどもいと多く、牛よくやる者の、車はしらせたる。しろく清げなるみちのく紙に、いとほそう書くべくはあらぬ筆して、文かきたる。川舟のくだりざま。齒黑のよくつきたる。てうばみに、てう多くうちたる。うるはしき絲のねりあはせぐりしたる。物よくいふ陰陽師して、河原に出でて、すその祓へしたる。よる寢起きて飲む水。つれ〴〵なる折に、いとあまり陸しくはあらず、疎くもあらぬまらうどのきて、世の中の物がたり、この頃ある事のをかしきも、にくきも、怪しきも、これにかゝり、かれにかゝり、公私おぼつかなからず、聞きよきほどに語りたる、いと心ゆくこゝちす。社、寺など

○網代―網代車の略。檜皮又は竹を組合はせたる物にて、車蓋を葺く。

○ゆふ髮かみ木綿髮。馬の尾髮の白きをいふ。○雜色―こゝのは公卿の召仕なり。○隨身―官吏に給ふ護衛兵。○小舍人―身分ある人の召仕ふ小童。○らう〳〵じ―勞勞じ。

どにまうでて、物申するに、寺には法師、社には禰宜などやうの者の、思ふほどよりも過ぎて、とどこほりなく聞きよく申したる。

二十九段

檳榔毛はのどやかに遣りたる。いそぎたるはかろ〴〵しく見ゆ。網代は走らせたるを、ふと見るほどもなく過ぎて、供の人ばかりはしるを、たれならむと思ふこそをかしけれ。ゆる〳〵と久しくゆけば、いとわろし。牛は額いとちひさく、白みたるが、腹のした、足のしも、尾のすそ白き。馬は紫のまだらづきたる。蘆毛。いみじう黑きが、足肩のわたりなどに白きところある。うす紅梅の毛にて、髮尾などはいと白き。げにゆふかみともいひつべし。牛飼はおほきにて、髮あかしらがにて、顏の赤みて、かど〴〵しげなる。雜色隨身はほそやかなる。よきをのこも、なほ若きほどは、さる方なるぞよき。いたく肥えたるは、ねぶたからむ人と思はる。小舍人はちひさくて、髮のうるはしきが、すそさわらかに、聲をかしうて、かしこまりて物などいひたるぞらうらうじき。猫はうへのかぎり黑くて、ことは皆白からむ。

三十段

説經師は顔よき。つとさまもらへたるこそ、その説く事のたふとさも覺ゆれ。ほか目しつれば、ふと忘るゝに、にくげなるは罪や得らむと覺ゆ。この詞はとゞむべし。すこし年などのよろしきほどこそ、かやうの罪は得がたのことば書き出でけめ。今は罪いとおそろし。

たふとき事、道心おほかりとて、説經すといふ所に、さいそにゆきぬる人こそ、なほこの罪のこゝちには、さしもあらでと見ゆれ。藏人おりたる人、昔は御前などいふこともせず、その年ばかり、うちわたりには、まして影も見えざりける。今はさしもあらざめる。藏人の五位とて、それをしもいそがしう仕へど、なほ名殘つれ〴〵にて、心一つはいとまあるこゝちぞすべかめれば、さやうの所にて、一たび二たび聽きそめつれば、常にまうでまほしくなりて、夏などのいと暑きにも、かたびらいとあざやかに、薄二藍、青にびの指貫など、ふみちらして居ためり。烏帽子に物忌つけたるは、けふさるべき日なれど、功德の方にはさはらずと見えむとにや。いそぎ來て、その事するひじりと物語して、車立つるさへぞ見いれ、ことにつきたるけしきなる。久しくあはざりける人などのまうでであひたる、珍しがりて、近く居より、物語し、うなづき、をかしき事

○さいそ—最初の字音。
○おりたる—退官したるをいふ。
○御前—行幸の前驅。
○藏人の五位—藏人を謂めて、五位に敍せられたるを稱す。
○青にび—鼠色に青氣のある色。
○物忌つけ—物忌の札をつくる也。三分ばかりの柳の簡に、物忌と書く。

など語り出でて、扇ひろうひろげて、口にあてて笑ひ、裝束したる珠數かいまさぐり、手まさぐりにし、こなたかなたうち見やりなどして、車のよしあしほめそしり、なにがしにて、その人のせし八講、經供養などいひくらべ居たるほどに、この説經の事も聞き入れず。何かは、常に聞くことなれば、耳馴れて、めづらしう覺えぬにこそはあらめ。さはあらで、講師ゐてしばしあるほどに、ささすこし追はする車とゞめておる人、蟬の羽よりもかろげなる直衣、指貫、生絹のひとへなど着たるも、狩衣姿なるも、さやうにて若くほそやかなる三四人ばかり、さぶらひの者、又さばかりして入れば、もと居たりつる人も、すこしうち身じろぎくつろぎて、高座のもと近き、柱のもとなどにするたれば、さすがに珠數おしもみなどして、伏しをがみ居たるを、講師もはえ〴〵しう思ふなるべし。いかで語り傳ふばかりと説き出でたる、聽問すなど立ち騷ぎぬかづく程にもなくて、よき程にて立ち出づとて、車どものかたなど見おこせて、われどちいふ事も、何事ならむとおぼゆ。見知りたる人をばをかしと思ひ、見知らぬは、誰ならむ、それにやかれにやと、目をつけて思ひやらるゝこそをかしけれ。

○裝束したる—飾りしたる。
○八講—法華八講の略。法華經八卷を朝夕二座に分けて、講ずる法會。
○經供養—寫經して佛に回向する法會。
○講師—説經師。

○むげ―無下の字音。
○壺裝束―單衣を頭より被り、それを適宜の長けに腰にて結び、市女笠を着る。
○菩提といふ寺―山城愛宕郡雲林院の菩提講寺のこと。
○さうちう云々―未詳。
○小白河―小白河殿の略。
○小一條の大將―左大將藤原濟時。

「そこに説經しつ、八講しけり」など人いひ傳ふるに、「その人はありつや」、「いかゞは」など定まりていはれたる、あまりなり。などかはむげにさしのぞかではあらむ、あやしき女だに、いみじく聞くめるものをば。さればとて、はじめつ方は、かちありきする人はなかりき。たまさかには、壺裝束などばかりして、なまめき化粧じてこそありしか。それも物詣をぞせし。説經などは、ことに多くも聞かざりき。この頃、その折さし出でたる人の、命長くて見ましかば、いかばかりぞしり誹謗せまし。

三十一段

菩提といふ寺に、結縁の八講せしが、聽きにまうでたるに、人の許より、「とく歸り給へ。いとさうゞしし」といひたれば、蓮の花びらに、

もとめてもかゝる蓮の露をおきてうき世にまたは歸るものかは。

と書きてやりつ。まことにいと尊くあはれなれば、やがてとまりぬべくぞ覺ゆる。さうちうが家の人のもどかしさも忘れぬべし。

三十二段

小白河といふ所は、小一條の大將殿の御家ぞかし。それにて上達部、結縁の八講し給ふに、いみじくめでたき事にて、世の中の人の集まり行きて聞く。「遲からむ車は、よるべきやうもなし」といへば、露と共にいそぎ起きて、げにぞひまなかりける。轅のうへに又さしかさねて、三つばかりまでは、すこし物も聞ゆべし。六月十餘日にて、暑きこと、世に知らぬほどなり。池の蓮を見やるのみぞ、すこし涼しき心ちする。左右の大臣たちをおき奉りては、おはせぬ上達部なし。二藍の直衣、指貫、あさぎの帷子をぞすかし給へる。すこしおとなび給へるは、青にびの指貫、白き袴もすゞしげなり。佐理の宰相なども若やぎだちて、すべて尊きことの限にもあらず、をかしき物見なり。廂の御簾高くまき上げて、長押のうへに、上達部奥にむかひて、なが〳〵と居給へり。そのしもには殿上人、わかき君達・狩裝束、直衣などもいとをかしくて、居もさだまらず、こゝかしこに立ちさまよひ遊びたるも、いとをかし。實方の兵衛の佐、ながあきらの侍從など、家の子にて、今すこしいで入り馴れたり。まだわらはなる君達など、いとをかしうておはす。すこし日たけたるほどに、三位中將とは、關白殿をぞ聞えし。香のうす物、二藍の直衣、おなじ指貫、濃き蘇枋の御袴に、張りたる白きひとへの、いとあざやかなるを着給ひて、あゆみ入り

○佐理―藤原氏。書家。
○宰相―參議の唐名。
○狩裝束―狩衣のこと。
○實方―濟時の兄の子。歌人。
○ながあきら―濟時の子長命君。
○關白殿―只今の關白殿とおなじ。藤原道隆。
○香―丁子茶の色をいふ。

○懸盤―盤即ち折敷なる。奎にかけたるもの。膳の一種。
○義懐―藤原氏。摂政伊尹の子。

給へる、さばかりかろび涼しげなるなかに、あつかはしげなるべけれど、いみじうめでたしとぞ見え給ふ。細塗骨など、骨はかはれど、たゞ赤き紙を、おなじなみにうち使ひ持ち給へるは、瞿麥のいみじう咲きたるにぞ、いとよく似たる。まだ講師ものぼらぬほどに、懸盤どもして、何かはあらむ物まゐるべし。義懐の中納言の御ありさま、常よりもまさりて、清げにおはするさまぞ、限なきや。上達部の御名など書くべきにもあらぬを、誰なりけむと、少し程ふれば。色合はなゝといみじく、匂あざやかに、いづれともなきなかの帷子を、これはまことに、たゞ直衣一つを着たるやうにて、常に車のかたを見おこせつゝ、物などいひおこせ給ふ。をかしと見ぬ人なかりけむを。

のちにきたる車の、ひまもなかりければ、池にひき寄せて立てたるを見給ひて、實方の君に、「人の消息つきゝしくいひつべからむ者ひとり」と召せば、いかなる人にかあらむ、えりてゐておはしたるに、いかゞいひ遣るべきと、近く居給へるばかりいひ合はせて、やり給はむことは聞えず。いみじくよそひして、車のもとに歩みよるを、かつは笑ひ給ふ。あとの方によりていふめり。久しく立てれば、人々、「歌など詠むにやあらむ。兵衛の佐返し思ひまうけよ」など笑ひて、いつしか返事聞かむと、おとな上達部まで、皆そなたざまに見やり給へり。げに顕證の人々まで見やりしも、をかしうありしを、返事聞きたるにや、すこし歩みくるほどに、扇をさし出でて呼び返せば、歌などの文字をいひあやまちてばかりこそ呼び返さめ、久しかりつる程に、あるべきことかは、直すべきにもあらじものをなど覺えたる。近く參りつくも心もとなく、「いかにいかに」と、誰も問ひ給へどもいはず。權中納言見給へば、そこによりて、けしきばみ申す。三位の中將、「とくいへ。あまり有心すぎて、しそこなふな」との給ふに、「これもたゞおなじ事になむ侍る」といふは聞ゆ。藤大納言は、人よりもけにのぞきて、「いかゞいひつる」との給ふめれば、三位の中將、「いとなほき木をなむおし折りためる」と聞え給ふに、うち笑ひ給へば、皆何となく、さと笑ふ聲聞えやすらむ。中納言、「さて呼び返されつるさきには、いかゞいひつる。これや直したること」と問ひ給へば、「久しう立ちて侍りつれども、ともかくも侍らざりつれば、『さは參りなむ』とてかへり侍るを呼びて」とぞ申す。「だが車ならむ。見知りたりや」などの給ふほどに、講師のぼりぬれば、皆居しづまりて、そなたをのみ見るほどに、この車はかいけつやうにうせぬ。下簾など、

○藤大納言―藤原爲光。
○いとなほき木―後撰集に、いたく事好む由を時の人のいふと聞きて、高津内親王、直き木に曲れる枝もあるものを毛を吹きなさ。疵をいふがわりなさ。
○下簾―牛車内より地に曳くほどに垂るゝ、二筋の帷。

たゞ今日はじめたりと見えて、濃き單がさねに、二藍の織物、蘇枋のうす物のうは着などにて、しりに、摺りたる裳、やがてひろげながらうち懸けなどしたるは、何人ならむ。何かは、人のかたほならむことよりは、げにと聞えて、なか〳〵いとよしとぞ覺ゆる。

朝座の講師清範、高座のうへも光り滿ちたる心ちして、いみじくぞあるや。暑さのわびしきにそへて、しさすまじき事の、今日過ぐすまじきをうち置きて、たゞ少し聞きて歸りなむとしつるを、しきなみにつどひたる車の奥に居たれば、出づべきかたもなし。朝の講はてなば、いかで出でなむとて、前なる車どもに消息すれば、近く立たむうれしさにや、はや〳〵と引き出であけて出すを見給ひて、いとかしがましきまで人ごといふに、老上達部さへ笑ひにくむを、聞きも入れずいらへもせで、せばがり出づれば、權中納言、「やゝ。まかりぬるもよし」とて、うち笑ひ給へるぞめでたき。それも耳にもとまらず、暑きにまどひ出でて、人して、「諸五千人の中には入らせ給はぬやうもあらじ」と聞えかけて歸り出でにき。そのはじめより、やがて果つる日まで立てる車のありけるが、人寄りくとも見えず。すべてたゞあさましう、繪などのやうにてすぐしければ、

○朝座―八講は、日に朝夕の二座あり。
○清範―法相宗の僧。說法の名人。
○しきなみ―重波。また重波。
○まかりぬるもよし―法華經に、釋迦說法の時、五千の慢心者が退出したるを見て、釋迦「如是增上慢退亦佳矣」といへること見ゆ。

ありがたくめでたく心にくゝ、いかなる人ならむ、いかで知らむと問ひけるを聞き給ひて、藤大納言、「何かめでたからむ。いとにくし。ゆゝしき者にこそあなれ」との給ひけるこそをかしけれ。さて、その二十日あまりに、中納言の、法師になり給ひにしこそあはれなりしか。櫻などの散りぬるも、なほよのつねなりや。「おくを待つまの」とだにいふべくもあらぬ、御ありさまにこそ見え給ひしか。

○二十あまりに―寛和二年六月廿四日。
○おくを待つまの―新勅撰集に源宗于「白露のおくを待つまの朝顏はみずぞなかなかあるべかりける」。

三十三段

七月ばかり、いみじく暑ければ、よろづの所あけながら夜もあかすに、月の頃は、寢起きて見いだすも、いとをかし。闇もまたをかし。在明はたいふもおろかなり。いとつやゝかなる板のはし近う、あざやかなる疊ひとひら、かりそめにうち敷きて、三尺の几帳、奥のかたに押しやりたるぞあぢきなき。はしにこそ立つべけれ。奥のうしろめたからむよ。人は出でにけるなるべし。薄色の裏いと濃くて、うへは少しかへりたるならずば、濃き綾のつやゝかなるが、いたくは萎えぬを、かしら籠めて、ひき着てぞ寢ためる。香染の單、紅のこまやかなる生絹の袴の腰いとながく、衣のしたより曳かれたるも、まだ解けながらな

○薄色―紫のなり。

○うちぎぬ―砧にて光澤を出したるもの。單衣のうへに着る。

○をふの下草―六帖に「櫻麻のをふの下草露しあらばあかしてゆかむ親は知るとも」。

○にほひうつり―襲色したる。

めり。そばのかたに、髪のうちたゝなはりてゆらゝかなるほど、長さおしはかられたるに、又いづこよりにかあらむ、朝ぼらけのいみじうきり滿ちたるに、二藍の指貫、あるかなきかの香染の狩衣、白き生絹、紅のいとつやゝかなるうちぎぬの、霧にいたくしめりたるをぬぎ垂れて、鬢の少しふくだみたれば、烏帽子のおし入れられたるけしきも、しどけなく見ゆ。朝顔の露おちぬさきに、文書かむとて、道のほども心もとなく、「をふの下草」など口ずさびて、我が方へゆくに、格子のあがりたれば、御簾のそばを、いさゝかあけて見るに、おきていぬらむ人もをかし。露をあはれと思ふにや。しばし見たれば、枕がみのかたに、朴に紫の紙はりたる扇、ひろごりながらあり。みちのくに紙のたゝう紙のほそやかなるが、花か紅か、少しにほひうつりたるも、几帳のもとに散りぼひたる。人のけはひあれば、衣のなかより見るに、うち笑みて長押におしかゝり居たれば、恥ぢなどする人にはあらねど、うち解くべき心ばへにもあらぬに、ぬたうも見えぬるかなと思ふ。「こよなき名殘の御あさいかな」とて、簾のうちになからばかり入りたれば、「露より先なる人のもどかしさに」といらふ。をかしき事と取り立てて書くべきにあらねど、かくいひかはすけしきどもにくから

○いそぎつる文―後朝の文。

○時鳥の蔭に―新古今集に人丸「なく聲をえやはしのばぬ時鳥さくうの花の蔭にかくれて」。

○祭のかへさ―賀茂祭の儀仗の歸さにて、上賀茂社よりの歸途。

○紫野―京の一條以北の野。

す。枕がみなる扇を、わが持ちたるして、及びてかき寄するが、あまり近う寄りくるにやと心ときめきせられて、今すこし引きぞ入らるゝ。取りて見などして、「疎くおぼしたる事」など、うちかすめ怨みなどするに、あかうなりて、人の聲々し、日もさし出でぬべし。霧の絶間見えぬほどにといそぎつる文も、たゆみぬるこそうしろめたけれ。出でぬる人も、いつの程にかと見えて、萩の露ながらあるに付けてあれど、えさし出でず。香のかのいみじうしめたる匂、いとをかし。あまりはしたなき程になれば、立ち出でて、わがきつる所もかくやと、思ひやらるゝもをかしかりぬべし。

三十四段

木の花は　梅。濃くも薄くも紅梅。櫻の花びらおほきに、葉色こきが、枝ほそくて咲きたる。藤の花、しなひ長く、色よく咲きたる、いとめでたし。卯の花は、品おとりて何となけれど、咲く頃のをかしう、時鳥の蔭に隱るらむと思ふに、いとをかし。祭のかへさに、紫野のわたり近きあやしの家ども、おどろなる垣根などに、いとしろう咲きたるこそをかしけれ。青色のうへに、白き單がさねかづきたる、青朽葉などにかよひて、いとをかし。四月のつごもり、五月

○時鳥のよすがー奈良朝以來、時鳥に橘を詠合はせたる歌多し。

○文にもー詩賦にも。

○楊貴妃ー字は太眞。唐の玄宗の妃。

○梨花一枝云々ー白居易の長恨歌中の句。

○ことゞゝしき名云々ー鳳凰のこと。羽蟲の長といふ靈鳥。

ついたちなどの頃ほひ、橘の濃く青きに、花のいと白く咲きたるに、雨の降りたるつとめてなどは、世になく心あるさまにをかし。花の中より、實のこがねの玉と見えて、いみじくきはやかに見えたるなど、朝露にぬれたる櫻にもおとらず。時鳥のよすがとさへ思へばにや、なほ更にいふべきにもあらず。梨の花、世にすさまじくあやしき物にして、目に近く、はかなき文付けなどだにせず。愛敬おくれたる人の顔など見ては、たとひにいふも、げにその色よりしてあいなく見ゆるを、もろこしに限なき物にて、文にも作るなるを、さりともあるやうあらむとて、せめて見れば、花びらのはしに、をかしき匂こそ、心もとなくつきためれ。楊貴妃、みかどの御使にあひて、泣きける顔に似せて、「梨花一枝春の雨を帶びたり」などいひたるは、おぼろげならじと思ふに、なほいみじうめでたきことは、たぐひあらじと覺えたり。桐の花、紫に咲きたるは、なほをかしきを、葉のひろごりざまうたてあれど、またこと木どもと、ひとしういふべきにあらず。もろこしにことゞゝしき名つきたる鳥の、これにしも栖むらむ、心ことなり。まして琴につくりて、さまゞゝなる音の出でくるなど、をかしとはよのつねにいふべくやはある。いみじうこそはめでたけれ。木のさまぞにくげなれど、楝の花いとをかし。かれ花にさまことに咲きて、かならず五月五日にあふもをかし。

○かれ花ー乾花。

○寢くたれ髮をー拾遺集に、猿澤の池に采女の身を投げたるを見て、人麻呂子がわきもこの寢くたれ髮を猿澤の池の玉藻と見るぞ悲しき」。

○みくりといふ歌ー六帖に「戀すてふ狹山の池のみくりこそ引けはたえすれ我や根たゆる」。

○玉藻はなかりそ風俗にーをしたかべ、鴨さへきねるはらの池のやまのなかりそ玉藻はまねなかりそ、生ひもつぐがにや、生ひもつぐがにに」。

三十五段

池は　勝間田の池。盤余の池。にへ野の池、初瀬に參りしに、水鳥のひまなくたち騷ぎしが、いとをかしく見えしなり。水なしの池、「あやしうなどて附けけるならむ」といひしかば、「五月など、すべて雨いたく降なむとする年は、この池に、水といふものなくなむある。また日のいみじく照る年は、春のはじめに、水なむ多く出づる」といひしなり。「むげになく、乾きてあらばこそさも附けめ、出づる折もあるなるを、一すぢに附けけるかな」といらへまほしかりし。猿澤の池、采女の身を投げけるを聞しめして、みゆきなどありけむこそ、いみじうめでたけれ。「寢くたれ髮を」と、人麻呂が詠みけむほど、いふもおろかなり。御まへの池、また何のごゝろにつけけるならむとをかし。鏡の池。狹山の池、みくりといふ歌のをかしく覺ゆるにやあらむ。こひぬまの池。はらの池、「玉藻はなかりそ」といひけむもをかし。益田の池。

せちは　五月にしくはなし。菖蒲、蓬などの薫りあひたるも、いみじうをかし。九重のうちをはじめて、いひしらぬ民のすみかまで、いかでわが許にしげく葺かむと葺き渡したる、なほいと珍しく、いつかこと折はさはしたりし。空のけしきの曇り渡りたるに、ささいの宮などには、縫殿より御薬玉とて、いろいろの絲を組みさげて參らせれば、御帳たてまつる身屋の柱の左右につけたり。九月九日の菊を、あやしき生絹のきぬに包みて參らせたる、おなじ柱にゆひつけて、月ごろある薬玉に取り替へてすつめる。また薬玉は、菊の折までであるべきにやあらむ。されどそれは、みな絲をひき取りて、物ゆひなどして、しばしもなし。御節供まゐり、わかき人々は、菖蒲のさし櫛さし、物忌つけなどして、さま〳〵、唐衣、汗衫など、ながき根、をかしき折枝ども、むら濃の組して結びつけなどしたる、珍しういふべきことならねど、いとをかし。さて春ごとに咲くとて、櫻をよろしう思ふ人やはある。辻あり〳〵わらはべの、ほど〳〵につけては、いみじき業したると、常に袂をまもり、人に見くらべ、えもいはず興ありと思ひたるを、そばへたる小舎人童などにひき取られて、泣くもをかし。紫の紙に、楝の花、青き紙に菖蒲の葉、ほそう卷きてひきゆひ、又、白き紙を根に

○御帳たてまつる―御帳臺を置かるる。

○御節供まゐり―節日の祝儀のお膳をあぐるなり。

○菖蒲のさし櫛―菖蒲の飾れる櫛。

○そばへたる―俗のフザケタに當る。

○えん―艶の字音。

○臨時の祭―石清水、賀茂兩社とも、例祭の外に、例年臨時祭あり。

○御神樂―禁中内侍所の御神樂。

○神の御前の物と―神樂の榊の歌に「榊葉にゆふとりしでたが世にかいはひそめけむ」。

○千枝にわかれて―六帖に「和泉なるしのだの森の楠の木の千枝にわかれて物をこそ思へ」。

○みつばよつばの―饗馬樂に「ここの

三十七段

木は　かつら。五葉。柳。橘。そばの木、はしたなき心ちすれども、花の木ども散りはてて、おしなべたる緑になりたる中に、時もわかず、濃きもみぢのつやめきて、思ひかけぬ青葉の中よりさし出でたる、めづらし。檀、さらにもい、はず。その物ともなけれど、やどり木といふ名、いとあはれなり。榊、臨時の祭、御神樂の折など、いとをかし。世に木どもこそあれ、神の御前の物といひ始めけむも、取りわきをかし。楠の木は、木立おほかる所にも、殊にまじらひ立てらず。おどろ〳〵しき思ひやりなどうとましきを、千枝にわかれて、戀する人のためしにいはれたる、たれかは數を知りていひ始めけむと思ふにをかし。檜の木、人近からぬ物なれど、みつばよつばの殿づくりもをかし。五月に雨の

殿はむべも富みけりさき草の三つば四つばに殿造せり」。

○かへの木―兒の手柏のこと。

○あすはひの木―あすならう。

○かれごと―豫言。

○葉がへせぬ云々―拾遺集に「はしたかの巣のとがへる山の椎柴の葉がへはすとも君はかへせじ」。

○いつとなく云々―人麻呂に素盞嗚尊につきたる歌なし。文に誤脱あるべし。

聲まねぶらむもをかし。かへの木、さゝやかなるにも、もえ出でたる梢の赤みて、同じ方にさしひろごりたる葉のさま、花もいと物はかなげにて、蟲などの乾れたるやうにてをかし。あすは檜の木、この世近くも見えきこえず。御嵩にまうでて歸る人など、しかもてありくめる。枝さしなどの、いと手觸れにくげに、あら〳〵しけれど、何の心ありて、あすは檜の木とつけけむ。あぢきなきかねごとなりや。たれに憑めたるにかあらむと思ふに、知らまほしうをかし。ねずもちの木、人なみ〳〵なるべきさまにもあらねど、葉のいみじうこまかに、ちひさきがをかしきなり。楝の木。山梨の木。椎の木は、常磐木はいづれもあるを、それしも葉がへせぬためしにいはれたるもをかし。白樫などいふもの、まして深山木のなかにも、いとけどほくて、三位、二位のうへの衣染むる折ばかりぞ、葉をだに人の見るめる。めでたき事、をかしき事に取り出づべくもあらねど、いつとなく雪の降りたるに見まがへられて、素盞嗚尊の、出雲の國におはしける御事を思ひて、人麻呂が詠みたる歌などを見る、いみじうあはれなり。いふ事にても、折につけても、一ふしあはれともをかしとも聞きおきつる物は、草も木も鳥蟲も、おろかにこそ覺えね。ゆづり葉のいみじうふさやかにつやめ

○なき人の云々―昔は十二月晦日にも魂祭ること、七月の盂蘭盆會の如し。

○紅葉せむ世や―六帖に「旅人に宿かすが野のゆづり葉のもみぢせむ世や君を忘れむ」。

○すろ―樓閣

○鏡を見すれば―事文類聚、奥儀抄などに見えたる故事。

○鳴く聲雲ゐまで云々―詩經に「鶴鳴二九皐一、聲聞二于天一」。

○ゆるぎの森に云云―六帖に「高島やゆるぎの森の鷺すらも獨は寢じとあらそふものを」。

きたるは、いと青うきよげなるに、思ひかけず似るべくもあらず、莖の赤うきら〳〵しう見えたるこそ、卑しけれどもをかしけれ。なべての月頃は、つゆも見えぬ物の、しはすの晦日にしも時めきて、なき人のくひ物にも敷くにやと哀なるに、又よはひ延ぶる齒固の具にもして使ひためるは、いかなるにか。「紅葉せむ世や」といひたるもたのもし。かしは木、いとをかし。葉守の神のますらむも、いとかしこし。兵衛の佐、尉などをいふらむもをかし、姿なけれどすろの木、からめきて、わろき家の物とも見えず。

三十八段

鳥は　ことゞころの物なれど、鸚鵡いとあはれなり。人のいふらむことをまねぶらむよ。時鳥。水鶏。鴫。みこ鳥。ひわ。ひたき。山鳥は、友をこひて鳴くに、鏡を見すれば慰むらむ、いと哀なり。谷隔てたるほどなど、いと心ぐるし。鶴はこちたきさまなれど、鳴く聲雲居まで聞ゆらむ、いとめでたし。かしら赤き雀。班鳩の雄鳥。たくみ鳥。鷺は、いと見る目も見ぐるし。まなこ居なども うたて、よろづになつかしからねど、「ゆるぎの森にひとりは寢じ」と爭ふらむ そをかしけれ。はこ鳥。水鳥は、鴛鴦いとあはれなり。かたみに居がはりて、

○はねのうへの霜を云々―六帖に「羽のうへの霜うち拂ふ友をなみ鶯の獨寢するぞわびしき」。

○友まどはすらむ―六帖に友則「秋くれば佐保の川原の川霧に友まどはせる千鳥なくなり」。

○はねの霜うち拂ふらむ―萬葉集に「埼玉の小埼の沼に鴨ぞはねきる、おのが尾にふりおける霜を拂ふとならし」。

○年立ち返へる―拾遺集に素性「新玉の年たち返るあしたより待たるゝものは鶯の聲」。

はねのうへの霜を拂ふらむなど、いとをかし。都鳥。川千鳥は、友まどはすらむこそ。雁の聲は、遠く聞えたるあはれなり。鴨は、はねの霜うち拂ふらむと思ふにをかし。

鶯は、文などにもめでたきものに作り、聲よりはじめて、樣かたちも、さばかりあてに美しきほどよりは、九重のうちに鳴かぬぞ、いとわろき。人の「さなむある」といひしを、さしもあらじと思ひしに、十年ばかりさぶらひて聞きしに、まことに更に音もせざりき。さるは竹も近く、紅梅もいとよく通ひぬべきたよりなりかし。まかでて聞けば、あやしき家の、見どころもなき梅などには、花やかにぞ鳴く。よる鳴かぬもいぎたなき心ちすれども、今はいかゞせむ。夏秋の末まで、老聲に鳴きて、蟲喰など、ようもあらぬ者は、名をつけかへていふぞ、くち惜しくすごき心ちする。それも雀などのやうに、常にある鳥ならば、さも覺ゆまじ。春鳴くゆゑこそはあらめ。「年立ち返る」など、をかしきことに、歌にも文にも作るなるは。なほ春のうちならましかば、いかにをかしからまし。人をも人げなう、世のおぼえあなづらはしうなり初めにたるをば、謗りやはする。鳥、鳥などのうへは、見入れ聞き入れなどする人、世になしかし。

○雲林院、知足院―紫野にありき。

○ほたがくれ―端隱。

○らう〳〵じう―勞々しく。

○かりのこ―家鴨の卵。

○あまづら―甘葛。郡ち蔓甘茶の汁。

○かなまり―金椀。

○すゐさう―水晶の字音。

されば、いみじかるべきものとなりたればと思ふに、心ゆかぬ心ちするなり。祭のかへさ見るとて、雲林院、知足院などの前に、車をたてたれば、時鳥も忍ばぬにやあらむ鳴くに、いとようまねび似せて、木高き木どもの中に、もろ聲に鳴きたるこそ、さすがにをかしけれ。時鳥は、なほ更にいふべき方なし。いつしかしたり顔にも聞え、歌に、卯の花、花橘などにやどりをして、はたがくれたるも、ねたげなる心ばへなり。五月雨のみじか夜に寢覺をして、いかで人よりさきに聞かむと待たれて、夜深くうち出でたる聲の、らう〳〵じう愛敬づきたる、いみじう心あくがれ、せむ方なし。六月になりぬれば、音もせずなりぬる、すべていふもおろかなり。夜なくもの、すべていづれも〳〵めでたし。ちごどものみぞさしもなき。

三十九段

あてなるもの　薄色に白がさねの汗衫。かりのこ。削氷のあまづらに入りて、新しきかなまりに入りたる。すゐさうの數珠。藤の花。梅の花に雪のふりたる。いみじう美しきちごの覆盆子くひたる。

四十段

○われから―海藻につける小蟲の名。
○ひを蟲―朝生れ、夕死ぬる小蟲。

○かゝへたる―たもつをいふ。

蟲は　鈴蟲。松蟲。促織。蟋蟀。蝶。われから。ひを蟲。螢。蓑蟲、いとあはれなり。鬼のうみければ、親に似て、これもおそろしき心あらむとて、親のあしきぬひき着せて、「いま秋風吹かむ折にぞこむずる。待てよ」といひて、にげていにけるも知らず。風のおと聞き知りて、八月ばかりになれば、ちゝよちちよとはかなげに鳴く、いみじうあはれなり。鯛。ぬかづき蟲、またあはれなり。さる心に道心おこして、つきありくらむ。又、思ひかけず、暗き所などにほとめきたる、聞きつけたるこそをかしけれ。蠅こそにくきもののうちに入れつべけれ。愛敬なくにくきものは、人々しう書き出づべきもののやうにあらねど、よろづの物にゐ、顔などに濡れたる足して居たるなどよ。人の名につきたるは、いとうとまし。夏蟲、いとをかしく、らうたげなり。火近う取りよせて、物語など見るに、草子のうへなどに飛びありく、いとをかし。蟻はにくけれどかろびいみじうて、水のうへなどを、たゞ歩みありくこそをかしけれ。

四十一段

七月ばかりに、風のいたう吹き、雨などの騒がしき日、大かたいと涼しければ、扇もうち忘れたるに、汗の香すこしかゝへたるきぬの薄き引きかづきて、晝寢

○やかたなき車―荷車なり。
○腹高く―姙娠。

○げすの―下衆女の略。
○ゆげひのすけ―靱負佐なり。左右衛門の佐をいふ。
○おぢらるゝうへの衣―五位の常色なる赤袍をいふ。
○うへの判官―檢非違使の尉の、藏人になりて昇殿したる者の稱。

したるこそをかしけれ。

四十二段

にげなきもの　髪あしき人のしろき綾のきぬきたる。しゞかみたる髪に葵つけたる。あしき手を赤き紙に書きたる。げすの家に雪のふりたる。又、月のさし入りたるも、いとくちをし。月のいとあかきに、やかたなき車にあひたる。又、さる車にあめ牛かけたる。老いたる者の腹高くてあえぎありく。又、若き男もちたる、いと見ぐるしきに、ことと人の許にゆくとて妬みたる。老いたる男の寢まどひたる。又、さやうにひげがちなる男の椎つみたる。齒もなき女の梅くひてすがりたる。げすの紅の袴きたる。この頃はそれのみこそあめれ。ゆげひのすけの夜行。狩衣すがたも、いとあやしげなり。又、人におぢらるゝうへの衣、はたおどろ〳〵しく、立ちさまよふも、人見つけばあなづらはし。「嫌疑の者やある」とたはぶれにもとがむ。六位の藏人、うへの判官とうちいひて、世になくきら〳〵しきものに思ひたらず、目をだに見あはせでおぢわなゝく人の、うちわたりの細殿などに、忍びて入り臥したるこそ、いとつきなけれ。そらだき物したる几帳にうち

○わきあけ―闕腋（ケツテキ）の袍なり。袖下を縫付けず。武官の服。

○やさしがり―羞かしがり。

○月夜に云々は、前段にくきものゝ文の攙入ならん。

○主殿司―こゝは女官のにて、後宮に附屬して、男官と同じ職掌を司る。

○びゝしく―美々しく。

○辨―太政官の重職。大中少の辨各左右あり。

○職の御曹司―中宮職の曹司の義にて、職院ともいふ。内裏の東にあり。

○頭辨―藤原行成。

かけたる袴の、おもたげにいやしう、きら〳〵しからむもとおし量らるゝなどよ。さかしらにうへの衣わきあけにて、鼠の尾のやうにて結ねかけたらむほどぞ、似氣なき夜行の人々なる。このつかさのほどは、念じてとゞめてよかし。五位の藏人も。

四十三段

細殿に、人とあまた居て、ありく者ども、見やすからず呼び寄せて、物などいふに、清げなるをのこ、小舍人童などの、よきつゝみ、袋に、きぬどもつゝみて、指貫の腰などうち見えたる。袋に入りたる弓、矢、楯、鉾、太刀などもてありくを、「誰がぞ」と問ふに、つい居て、「なにがし殿の」といひて行くは、いとよし。けしきばみやさしがりて、「知らず」ともいひ、聞きも入れでいぬる者は、いみじうぞにくきかし。

月夜にむな車ありきたる。清げなる男のにくげなる妻もちたる。鬚黒ににくげなる人の年老いたるが、物がたりする人のちごもてあそびたる。

四十四段

主殿司こそ、なはをかしきものはあれ。下女のきはは、さばかり羨ましきものはなし。よき人にせさせまほしきわざなり。若くてかたちよく、なりなど、常によくてあらむは、ましてよからむかし。年老いて、物の例など知りて、面なきさましたるも、いとつき〴〵しうめやすし。主殿司の顔愛敬づきたらむをもたりて、裝束時にしたがひて、唐衣など今めかしうてありかせばやとこそ覺ゆれ。男はまた隨身こそあめれ。いみじくびゝしくをかしき君達も、隨身なきは、いとしら〴〵し。辨などをかしく、よきつかさと思ひたれども、下襲のしり短くて、隨身なきぞ、いとわろきや。

四十五段

職の御曹司の、西おもての立蔀のもとにて、頭の辨の、人と物をいと久しくいひたち給へれば、さし出でて、「それは誰ぞ」といへば、「辨の内侍なり」との給ふ。「何かはさもかたらひ給ふ。大辨見えばうちすて奉りていなむものを」といへば、いみじく笑ひて、「たれかかゝる事をさへいひ聞かせけむ。『それさなせそ』とかたらふなり」との給ふ。いみじく見えて、をかしき筋などたてたる事はなくて、たゞありなるやうなるを、皆人さのみ知りたるに、なほ奥ふかき御心ざまを見知りたれば、「おしなべたらず」など、御前にも啓し、又、さし

○女はおのれを云云―史記に「士爲ニ知レ己者一死、女爲ニ説レ己者一容」。
○とほたあふみの云々―萬葉集に「霰ふりとほつあふみのあど川柳、刈れゝどもまたもおふちふあど川柳」。
○いひそめし人―清少納言なり。
○あるに隨ひ云々―九條師輔の遺誡に「始レ自ニ衣冠一及ニ牛車馬一、隨レ有用レ之、勿レ求ニ美麗一」。

ろしめしたるを、常に、「頭辨『女は、おのれをよろこぶ者の爲に、顔づくりす、士は、おのれを知れる人の爲に死ぬ』といひたる」といひ合はせつゝ申し給ふ。「とほたあふみの濱やなぎ」などいひかはしてあるに、若き人々は只いひにくみ、見苦しき事どもなど、繕はずいふに、若女房「この君こそうたて見にくけれ。ことの人のやうに讀經し、歌うたひなどもせず。けすさまじ」など譏る。更にこれかれに物いひなどもせず。頭辨「女は目はたてざまにつき、眉は額におひかゝり、鼻は横ざまにありとも、たゞ口つき愛敬づき、おとがひのした、頸などをかしげにて、聲にくからざらむ人なむ思はしかるべき。とはいひながら、なほ顔のいとにくげなるは心憂し」との給へば、まいておとがひほそく、愛敬おくれたらむ人は、あいなうかたきにして、御前にさへあしう啓する。

物など啓せさせむとても、そのはじめいひそめし人を尋ね、下なるをも呼びのぼせ、局にも來ていひ、里なるには文書きても、みづからもおはして、頭辨「おそく參らば、『さなむ申したる』と申しに參らせよ」などの給ふ。清「その人のさぶらふ」などいひ出づれど、さしもうけひかずなどぞおはする。清「あるに隨ひ定めず、何事ももてなしたるをこそ、よき事にはすれ」とうしろみ聞ゆれど、頭辨「わが

○憚なし―論語に「過則勿レ憚レ改」。
○うへの衣がちー袍を着たるが多きないふ。
○殿上のとのゐ姿―袍に指貫をはきたるを稱す。とのゐは殿居の義。宿直。

もとの心の本性」とのみの給ひつゝ、頭辨「改らざるものは心なり」との給へば、さて、清「『憚りなし』とは、いかなる事をいふにか」と怪しがれば、笑ひつゝ、頭辨「中よしなど人々にもいはるゝ。かうかたらふとならば、何か恥づる。見えなどもせよかし」との給ふを、清「いみじくにくげなれば、『さあらむはえ思はじ』との給ひしによりて、え見え奉らぬ」といへば、頭辨「げににくゝもぞなる。さらばな見ええそ」とて、おのづから見つべき折も、顔をふたぎなどして、まことに見給はぬも、眞心に虚言し給はざりけりと思ふに、

三月つごもり頃、冬の直衣の着にくきにやあらむ、うへの衣がちにて、殿上の奥の遣戸をあけさせ給うて、うへの御前、宮の御前出でさせ給へれば、起きもとのゐ姿もあり。つとめて日さし出づるまで、式部のお許と、廂に寢たるに、あへずまどふを、いみじく笑はせ給ふ。唐衣を髪のうへにうち着て、宿直物も何も、うづもれながらあるうへにおはしまして、陣より出で入る者など御覽ず。殿上人のつゆ知らで、よりきて物いふなどもあるを、主上「けしきな見せそ」と笑はせ給ふ。さてたゝせ給ふに、主上「二人ながらいざ」と仰せらるれど、「今顔などつくろひてこそ」とて參らず。入らせ給ひてのちも、なほめでたき事どもいひ

○のりたか―藤原説孝。この時藏人。

○殿上の名對面―當直の侍臣を點呼するをいふ。毎夜午後十時に行ふ。

○となへ―一つに整ふること。

あはせて居たるに、南の遣戸のそばに、几帳の手のさし出でたるに障りて、簾の少しあきたるより、黒みたる物の見ゆれば、のりたかが居たるなめりと思ひて、見も入れで、なほ事どもをいふに、いとよく笑みたる顔のさし出でたるを、のりたかなめり、そはとて見やりたれば、あらぬ顔なり。あさましと笑ひさわぎて、几帳ひき直し隠るれど、頭の辨にこそおはしけれ。見え奉らじとしつるものをと、いとくちをし。もろ共に居たる人は、こなたに向きて居たれば、顔も見えず。立ち出でて、「(頭辨)いみじく名殘なくも見つるかな」との給へば、「(清)のりたかと思ひ侍れば、あなづりてぞかし。などかは『見じ』との給ひしに、さつく〳〵とは」といふに、「(頭辨)『女は寢起きたる顔なむ、いとよき』といへば、ある人の局に行きてかいばみして、又もし見えやするとて來りつるなり。まだうへのおはしつる折からあるを、え知らざりけるよ」とて、それより後は、局の簾うちかづきなどし給ふめり。

四十六段

殿上の名對面こそなほをかしけれ。御前に人さぶらふ折は、やがて問ふもをかし。足音どもしてくづれ出づるを、うへの御局の東面に、耳をとなへて聞くに、知る人の名のりには、ふと胸つぶるらむかし。又、ありともよく聞かぬ人をも、この折に聞きつけたらむは、いかゞ覺ゆらむ。名のりよしあし、聞きにくく定むるもをかし。はてぬなりと聞くほどに、瀧口の弓ならし、沓の音そゝめき出づるに、藏人のいと高くふみこほめかして、うしとらの隅の勾欄に、高ひざまづきとかやいふゐずまひに、御前のかたに向ひて、うしろざまに「たれだれか侍る」と問ふほどこそをかしけれ。ほそう高う名のり、又、人々さぶらはねばにや、名對面仕うまつらぬよし奏するも、「いかに」と問へば、さはる事ども申すに、さ聞きて歸るを、方弘は、きかずとて、君達の敎へければ、いみじう腹だち叱りてかんがへて、瀧口にさへ笑はる。

御厨子所のおもの棚といふものに、沓をおきて、秡いひのゝしるを、いとはしがりて、「誰が沓にかあらむ。え知らず」と、主殿司、人々のいひけるを、「やゝ。方弘がきたなき物ぞや」とて、取りに來ても、いとさわがし。

四十七段

わかくてよろしき男の、げすの女の名をいひなれて呼びたるこそ、いとにくけれ。知りながらも、何とかや、かた文字は覺えでいふはをかし。宮仕所の局など

○方弘―源氏。六位藏人。

○かんがへて―勘てんとするをいふ。

○御厨子所―後涼殿の西廂にありて、供御を調進す。

○おもの棚―御膳棚。

○藏人所―これは私人の家のなり。

○黒き袴―汚れたる袴をいふ。
○車のかた―車の脇。

○つかひ人―位職に隨ひて、諸臣に賜ふ賓人なるべし。

によりて、よるなどぞ、さおぼめかむはあしかりぬべけれど、うちわたりなどは主殿司、さらぬ所にてはさぶらひ、藏人所にある者をゐて行きて、呼ばせよかし。手づからは聲もしるきに。はした者、わらべなどは、されどよし。

四十八段

わかき人とちごは肥えたるよし。受領など大人だちたる人は、ふときいとよし。あまり痩せからめきたるは、心いられたらむとおしはからる。よろづよりは、牛飼童のなりあしくてもたるこそあれ。こと者どもは、されどしりに立ちてこそ行け、先につとまもられいく者、きたなげなるは心憂し。車のしりに、ことなることなきをのこ共の連れだちたる、いと見ぐるし。ほそらかなるをのこ、隨身など見えぬべきが、黒き袴のすそ濃なる、狩衣は何もうちなればみたる、はしる車のかたなどに、のどやかにてうち添ひたるこそ、わが物とは見えね。なほ大方なりあしくて、人使ふはわろかり。着やれなど時々うちしたれど、なればみて罪なきは、さるかたなりや。つかひ人などはありて、わらはべのきたなげなるこそはあるまじく見ゆれ。家に居たる人も、そこにある人とて、使にても、客人などのいきたるにも、をかしき童のあまた見ゆるは、いとをかし。

○土になる物―蓮などをいふ。

○はじ蘇枋―蘇枋色に黄櫨をさした色。
○さく―笏。
○榻―車の轅をくく机。
○壺胡簶―筒形の矢を盛りて負ふ器。
○くりやめ―厨女。

○法皇の御覽じ―事實不明。

四十九段

人の家の前をわたるに、さぶらひめきたるをのこ、土になる物などして、をのこ兒の十ばかりなるが、髪をかしげなる、引きはへても、さばきてたるも、又、五つ六つばかりなるが、髪をくびのもとにかいくゝみて、つらいと赤うふくらかなる、あやしき弓、しもとだちたる物などさゝげたるも、いとうつくし。車とゞめて、いだき入れまほしくこそあれ。又、さていくに、薫物の香のいみじくかゝへたる、いとをかし。よき家の中門あけて、檳榔毛の車のしろうきよげなる、はじ蘇枋の下簾のにほひいときよげなる、榻に立ちたるこそめでたけれ。五位、六位などの下襲のしりはさみて、さくのいとしろき、かたにうちおきなどして、とかくいきちがふに、又装束し、壺胡簶負ひたる隨身の出で入る、いとつきゞしし。くりやめのいと清げなるがさし出でて、「なにがし殿の人やさぶらふ」などいひたるをかし。

五十段

瀧は　音なしの瀧。布留の瀧は、法皇の御覽じにおはしけむこそめでたけれ。那智の瀧は、熊野にあるがあはれなるなり。轟の瀧は、いかにかしがましくお

○淵瀬さだめなく　云々―古今集に「世の中は何か常なる飛鳥川きのふの淵ぞけふは瀬になる」。

○催馬樂などの―催馬樂に「貫川の瀬々のやはら手枕、やはらかにぬる夜はなくて親さくる妻」。同「澤田川袖つくばかり淺けれど恭仁の宮人高橋わたす」。

○たなばたつめに　云々―古今集、伊勢物語等に「狩くらむ棚機つめに宿かす天の川原に我はきにけり」。

そろしからむ。

五十一段

川は　飛鳥川、淵瀬さだめなく、はかなからむと、いとあはれなり。大堰川。泉川。水無瀬川。耳敏川、またなに事を、さしもさかしく聞きけむとをかし。音無川、思はずなる名とをかしきなり。細谷川。玉星川。貫川、澤田川、催馬樂などのおもひはするなるべし。なのりその川。名取川も、いかなる名を取りたるにかと聞かまほし。吉野川。あまの川、このしたにもあるなり。「棚機つめに宿からむ」と業平が詠みけむも、ましてをかし。

五十二段

橋は　あさむつの橋。長柄の橋。あまびこの橋。濱名の橋。ひとつ橋。佐野の船橋。うたじめの橋。轟の橋。小川の橋。かけはし。勢多の橋。木曾路の橋。堀江の橋。鵲の橋。ゆきあひの橋。小野の浮橋。山菅の橋、名を聞きたるをかし。うたゝねの橋。

五十三段

里は　逢坂の里。ながめの里。いさめの里。人づまの里。たのめの里。あさ風の里。夕日の里。とほちの里。伏見の里。ながゐの里。つまとりの里。人に取られたるにやあらむ、わが取りたるにやあらむ、いづれもをかし。

五十四段

草は　さうぶ。こも。葵いとをかし。祭のをり、神代よりして、さるかざしとなりけむ、いみじうめでたし。物のさまも、いとをかし。おもだかも、名のをかしきなり、心あがりしけむと思ふに。みくり。ひるむしろ。苔。こだに。雪間のあを草。かたばみ、あやのもんにても、こと物よりはをかし。あやふ草は、岸の額に生ふらむも、げにたのもしげなくあはれなり。いつまで草は生ふる處、いとはかなくあはれなり。岸の額よりも、これは崩れやすげなり。まことの石灰などには、え生ひずやあらむと思ふぞわろき。ことなし草は、思ふ事なきにやあらむと思ふもをかし。また あしき事を失ふにやと、いづれもをかし。忍草、いとあはれなり。屋のつま、さし出でたる物のつまなどに、あながちに生ひ出でたるさま、いとをかし。蓬、いとをかし。茅花、いとをかし。濱茅の葉は、ましてをかし。まろ小菅。浮草。淺茅。青つゞら。木賊といふ物は、風に吹かれたらむ音こそ、いかならむと思ひやられてをかしけれ。薺。ならし

○もん―文。模様。

○岸の額に云々―明詠集に「覩レ身岸額離レ根草」。

○いつまで草―壁生草と書く。

○忍草―八つ目蘭のこと。今いふしのぶとは別なり。

○集―歌集の略。○古萬葉集―萬葉集のこと。古今集を、初め續萬葉集といひしに對して稱す。奈良時代の歌を中心にしたる歌集。廿卷。○後撰―村上帝時代の勅撰歌集。廿卷。

○きちかう―桔梗。

ば、いとをかし。はすの浮葉のらうたげにて、のどかに澄める池のおもてに、大きなると小きと、ひろごり漂ひてありく、いとをかし。取りあげて、物おしつけなどして見るも、よにいみじうをかし。八重葎。山菅。やまゐ。日蔭。濱木綿。葦。葛の風に吹きかへされて、裏のいとしろく見ゆるをかし。

五十五段

集は　古萬葉集。古今。後撰。

五十六段

歌の題は　都。葛。みくり。駒。霰。笹。壺菫。日蔭。こも。たかせ。鶯。淺茅。しば。青つゞら。梨。棗。朝顔。

五十七段

草の花は　なでしこ、からのは更なり、やまとのも、いとめでたし。女郎花。きちかう。菊のところ〴〵うつろひたる。刈萱。龍膽は、枝さしなどもむつかしげなれど、こと花みな霜枯れはてたるに、いと花やかなる色合にてさし出でたる、いとをかし。わざと取り立てて、人めかすべきにもあらぬさまなれど、かまつかの花らうたげなり。名ぞうたてげなる。かりのくる花と、文字には書き

○壺菫―圓葉の菫をいふ。

○ぬかづき―酸漿。

○みてぐらなど―典據未詳。

○もえしも―春萌出でし樣も。

○おほどれ―亂れ廣がりたるをいふ。

○かひろぎ―ひらめきたるをいふ。かは接頭語。

たる。かにひの花、色は濃からねど、藤の花にいとよく似て、春と秋と咲く、をかしげなり。壺菫、菫、おなじやうの物ぞかし。老いていけば同じなどうし。しもつけの花。夕顔は朝顔に似て、いひ續けたるもをかしかりぬべき花の姿にて、にくき實のありさまこそ、いとくちをしけれ。などてさはた生ひ出でけむ。ぬかづきなどいふ物のやうにだにあれかし。されどなほ、夕顔といふ名ばかりはをかし。葦の花、更に見どころなけれど、みてぐらなどいはれたる、心ばへあらむと思ふに、たゞならず。もえしも薄には劣らねど、水のつらにて、をかしうこそあらめと覺ゆ。「これに薄を入れぬ、いとあやし」と人いふめり。秋の野のおしなべたるをかしさは、薄にこそあれ。穂さきの蘇枋にいと濃きが、朝霧にぬれてうち靡きたるは、さばかりの物やはある。秋のはてぞ、いと見どころなき。いろ〴〵に亂れ咲きたりし花の、かたもなく散りたるのち、冬の末まで、頭いと白く、おほどれたるをも知らで、昔思ひいで顔に靡きてかひろぎ立てる、人にこそ、いみじう似ためれ。よそふる事ありて、それをしもこそ、あはれともよなよとひろごり伏したる。さを鹿の分きて立ちならすらむも、心ことなり。思ふべけれ。萩はいと色ふかく、枝たをやかに咲きたるが、朝露にぬれて、な

唐葵は取りわきて見えねど、日の影に隨ひてかたぶくらむぞ、なべての草木の心とも覺えでをかしき。花の色は濃からねど、咲く山吹には。岩躑躅もことなることなけれど、「折りもてぞ見る」と詠まれたる、さすがにをかし。さうびは、近くて、枝のさまなどはむつかしけれどをかし。雨など晴れゆきたる水のつら、黒木のはしなどのつらに亂れ咲きたる夕ばえ。

○折りもてぞ見る—後拾遺集に和泉式部「岩つゝじ折りもてぞみるせこが着しくれなゐ染の色に似たれば」。
○さうび—薔薇。
○黒木のはし—皮付の丸木の階。

五十八段

おぼつかなきもの　十二年の山ごもりの法師のめおや。知らぬ所に、闇なるに行きたるに、あらはにもぞあるとて、火もともさで、さすがに並みゐたる。今いできたる者の心も知らぬに、やむごとなき物もたせて、人のがりやりたるに遲く歸る。物いはぬちごのそりくつがへりて、人にもいだかれず泣きたる。暗きに覆盆子食ひたる。人の顔見しらぬ物見。

○十二年の山ごもり—比叡山延暦寺にて、出家受戒者に、十二年間の禁足を課す。

五十九段

たとしへなきもの　夏と冬と。よると晝と。雨ふると日てると。若きと老いたると。人の笑ふと腹立つと。黒きと白きと。思ふとにくむと。藍ときはだと。雨と霧と。おなじ人ながらも心ざし失せぬるは、まことにあらぬ人とぞおぼゆ

○きはだ—黄蘗。

るかし。常磐木おほかる處に、烏のねて、夜中ばかりに、いねさがなく落ちまろび、木づたひて、寢おびれたる聲に鳴きたることこそ、晝のみめにはたがひてをかしけれ。

六十段

忍びたる處にては、夏こそをかしけれ。いみじう短き夜の、いとはかなく明けぬるに、つゆ寢ずなりぬ。やがてよろづの所あけながらなれば、涼しう見渡されたり。なほ今少しいふべき事のあれば、かたみにいらへどもするほどに、たゞ居たる前より、烏の高く鳴きてゆくこそ、いと顯證なる心ちしてをかしけれ。冬のいみじく寒きに、思ふ人とうづもれ臥して聞くに、鐘の音の、たゞ物の底なるやうに聞ゆるもをかし。鷄の聲も、はじめははねのうちに、口を籠めながら鳴けば、いみじう物深く遠きが、つぎ〳〵になるまゝに、近く聞ゆるもをかし。

六十一段

懸想人にてきたるは、いふべきにもあらず。たゞうちかたらひ、又さしもあらねど、おのづからきなどする人の、簾のうちにて、あまた人々居て物などいふ

○斧の柄も云々―晉の王質が仙人の圍棋を見るうちに、斧の柄の朽ちはてたりといふ故事による。

○したゆく水の―六帖に「心には下ゆく水のわきかへりいはで思ふぞいふにまされる」。

に、入りて、とみに歸りげもなきを、供なるをのこ、わらはなど、斧の柄も朽ちぬべきなめりとむつかしければ、長やかにうちながめて、みそかにと思ひていふらめども、「あなわびし。煩惱苦惱かな。今は夜中にはなりぬらむ」などいひたる、いみじう心づきなく、かのいふ者は、とかくも覺えず。この居たる人こそ、をかしう見聞きつる事も失するやうに覺ゆれ。又、さは色に出でては得いはず。「あゝ」と高やかにうちいひうめきたるも、「したゆく水の」と、いとをかし。立蔀、透垣のもとにて、「雨降りぬべし」など聞えたるも、いとにくし。よき人、君達などの供なるこそ、さやうにはあらね。たゞ人などさぞある。あまたあらむ中にも、心ばへ見てぞありくべき。

○ずさ、ずんざ―從者の字音便。

○かたは―缺點。

六十二段

ありがたきもの　舅に譽められる壻。又、姑に思はるゝよめの君。物よく拔くるしろがねの毛拔。主そしらぬ人のずさ。つゆの癖かたはなくて、かたち心ざまもすぐれて、世にあるほど、いさゝかのきずなき人。おなじ處に住む人の、かたみにはぢかはし、いさゝかのひまなく用意したりと思ふが、遂に見えぬこそかたけれ。物語、集など書きうつす本に墨つけぬこと。よき草子などは、いみじく心して書けども、必ずこそきたなげになるめれ。男も、女も、法師も、契り深くかたらふ人の、末まで中よき事かたし。使ひよきずんざ。搔練打たせたるに、あなめでたと見えておこす。

○搔練―ねり絹。

六十三段

うちの局は、細殿、いみじうをかし。かみの小蔀あげたれば、風いみじう吹き入りて、夏もいと涼し。冬は雪、霰などの、風にたぐひて入りたるも、いとをかし。せばくて、わらはべなどののぼり居たるもあしければ、屏風のうしろなどに匿しするたれば、こと所のやうに、聲たかく笑ひなどもせで、いとよし。畫などもたゆまず心づかひせらる。よるはたまして、いさゝか打ち解くべくもなきが、いとをかしきなり。沓の音の、夜ひと夜聞ゆるがとまりて、只および一つして敲くが、その人ななりと、ふと知るこそをかしけれ。いと久しく敲くに、音もせねば、寢入りにけるとや思ふらむとねたく、少しうち身じろくおと、衣のけはひも、さなりと思ふらむかし。扇など使ふもしるし。冬は火桶に、やをら立つる火箸のおとも、忍びたれど聞ゆるを、いとゞ敲きまさり、聲にてもいふに、陰ながらすべりよりて聞く折もあり。又、あまたの聲にて、詩を誦し、

○細殿―これは弘徽殿、登華殿の西面にある部屋なり。

○および―指。

歌などうたふには、敲かねどまづあけたれば、こゝへとしも思はぬ人も立ちどまりぬ。入るべきやうもなくて、立ちあかすもをかし。御簾のいと青くをかしげなるに、几帳の帷いとあざやかに、裾のつま少しうちかさなりて見えたるに、直衣のうしろに、ほころび絶えず着たる君達、六位の藏人の青色など着て、うけばりて、遣戸の許などに、そば寄せてえ立てらず。へいの前などにうしろ押して、袖うち合はせて立ちたるこそをかしけれ。また、指貫いと濃う、直衣のあざやかにて、いろ〳〵の衣どもこぼし出でたる人の、簾をおし入れて、なかから入りたるやうなるも、とより見るは、いとをかしからむを、いときよげなる硯ひき寄せて、文書き、もしは鋭こひて、鬚など搔さなほしたるも、すべてをかし。三尺の几帳を立てたるに、帽額のしもは、只すこしぞある。とに立てる人、内に居たる人と物いふ顔のもとに、いとよくあたりたるこそをかしけれ。たけのいと高く、短からむ人などやいかゞあらむ。なほ世のつねのはさのみぞあらむ。まして、臨時の祭の調樂などは、いみじうをかし。とのもりの官人などの、長き松を高くともして、くびはひき入れて行けば、先はさしつけつばかりなるに、をかしう遊び笛吹きたてて通るに、心ことに思ひたるに、君達の

○へい—壁の字音便。

○臨時の祭の調樂—石清水賀茂の臨時祭の前に、歌舞を調習すること。

○遊—音樂をいふ。

○あら田に生ふる—風俗に「荒田におふる富草の花手につみれて宮へまゐらむ」。とみ草は稻のこと。

○又廂—孫廂。

○近衞の御門—陽明門をいふ。

○左衞門の陣—建春門。

○さき—前追ふ聲。

日の裝束して、立ちどまり物いひなどするに、ともの隨身ども、さきを忍びやかに短く、おのが君達の料に追ひたるも、遊にまじりて、常に似ずをかしう聞ゆ。夜更けぬれば、なほあけて歸るを待つに、君達の聲にて、「あら田に生ふるとみ草の花」と歌ひたるも、このたびは、今すこしをかしきに、いかなるまめ人にかあらむ、すく〳〵しうさし歩みて出でぬるもあれば、笑ふを、「しばしや。など、さ夜をすてて急ぎ給ふ。とありて」などいへど、心ちなどやあしからむ、倒れぬばかり、もし人や追ひてとらふると見ゆるまで、まどひ出づるもあめり。

六十四段

職の御曹司におはしますころ、木立などはるかに物ふり、屋のさまも、高うけどほけれど、すゞろにをかしう覺ゆ。身屋は鬼ありとて、皆へだて出して、南の廂に御几帳たてて、又廂に女房はさぶらふ。近衞の御門より、左衞門の陣に入り給ふ上達部のさきども、殿上人のは短ければ、おほさき、こさきと聞きつけて騷ぐ。あまたたびになれば、その聲どもも皆聞き知られて、「それぞ、かれぞ」といふに、又「あらず」などいへば、人して見せなどするに、いひあてた

○なにがし一聲の秋―朗詠集に、源英明「池冷水無二三伏夏一、松高風有二一聲秋一」。

○ことぐさ―言種。いひ草。

○とり子―姜子。

るは、「さればこそ」などいふもをかし。

有明のいみじうきり渡りたる庭に、おりてありくを聞し召して、御前にも起きさせ給へり。うへなる人は、皆おりなどして遊ぶに、やう〳〵明けもてゆく。左衛門の陣にまかりて見むとて行けば、我も〳〵と追ひつぎて行くに、殿上人あまた聲して、「なにがし一聲の秋」と誦んじて入る音すれば、にげ入りて物などいふ。「殿上人月を見給ひける」などめでて、歌よむもあり。夜も晝も、殿上人の絶ゆるをりなし。上達部まかで參り給ふに、おぼろげに急ぐことなきは、かならず參り給ふ。

六十五段

あぢきなきもの　わざと思ひたちて、宮仕に出で立ちたる人の、ものうがりて、うるさげに思ひたる。人にもいはれ、むつかしき事もあれば、「いかでまかでなむ」といふことぐさをして、出でて親をうらめしがりて、「また參りなむ」といふよ。とり子の顏にくさげなる。しぶ〳〵に思ひたる人を、しのびて壻に取りて、思ふさまならずとなげく人。

六十六段

○むとく―無德か。樣あしきにいふ。

○卯杖―正月初卯に諸衛府より、種種の木を五尺三寸に切り、束ねて之を上る。

○人長―神樂人を指揮する役。

○御靈會―京の祇園の靈祭。

○くゞつのこと、り―傀儡の事取。傀儡は遊行の藝人、事取はその座頭。

○佛名のあした―佛名會は十二月十九日より廿一日まで行はる。あしたは廿二日なり。

○うへ屋―上屋。清涼殿中の西北隅にあり。

○道方―源氏。

○濟政―源氏。

○行成―藤原氏。

○經房―源氏。

いとほしげなるもの　人に詠みて取らせたる歌の褒めらるゝ。されど、それはよし。遠きありきする人の、つぎ〳〵縁たづねて、文得むといはすれば、知らたる人のがり、なほざりに書きて遣りたるに、なまいたはりなりと腹立ちて、返事も取らせで、むとくにいひなしたる。

六十七段

こゝちよげなるもの　卯杖のことぶき。神樂の人長。池のはちすの村雨にあひたる。御靈會の馬長。また、御靈會の振幡。

六十八段

とりもてるもの　くゞつのことゝり。除目に第一の國得たる人。

六十九段

御佛名のあした、地獄繪の御屏風取りわたして、宮に御覽せさせ奉り給ふ。いみじうゆゝしき事かぎりなし。「宮これ見よかし」と仰せらるれど、「濟更に見侍らじ」とて、ゆゝしさに、うへ屋に隱れふしぬ。雨いたく降りてつれ〴〵なりとて、殿上人、うへの御局に召して、御あそびあり。道方の少納言琵琶、いとめでたし。濟政の君箏の琴、行成笛、經房の少將笙の笛など、いとおもしろうひ

○琵琶の聲は云々―唐の白居易の琵琶行中の句。

○頭中將―藤原齊信。

○殿上―殿上の間。清涼殿内の南面にあり。侍臣の詰所。

○黒戸―清涼殿の北廊にあり。

○扁をぞつく―漢字の扁旁を隠して當てさする遊戯。

とわたり遊びて、琵琶彈きやみたるほどに、大納言殿の、「琵琶の聲はやめて、物語せむとすること遅し」といふことを誦んじ給ひしに、隠れ伏したりしも起き出でて、「清罪はおそろしけれど、なほ物のめでたきは、えやむまじ」とて笑はる。御聲などのすぐれたるにはあらねど、折のことさらに作り出でたるやうなりしなり。

七十段

頭中將のそゞろなる虚言を聞きて、いみじういひおとし、「頭中將何しに人と思ひけむ」など、殿上にても、いみじくなむの給ふと聞くに、はづかしけれど、「清まことならばこそあらめ、おのづから聞きなほし給ひてむ」など笑ひてあるに、黒戸の方へなど渡るにも、聲などする折は、袖をふたぎて、つゆ見おこせず、いみじうにくみ給ふを、とかくもいはず、見も入れで過ぐす。二月つごもりがた、雨いみじう降りてつれ〴〵なるに、御物忌に籠りて、『頭中將』さすがにさうぞくしくこそあれ。物やいひにやらまし』となむの給ふ」と、人々語れど、「清よにあらじ」などいらへてあるに、一日しもに暮して參りたれば、よるのおとゞに入らせ給ひにけり。長押のしもに、火近く取り寄せて、さしつどひて、扁をぞつぐ。「なうれしや。とくおはせ」など見つけていへど、すさまじき心ちして、何しにのぼりつらむと覺えて、炭櫃のもとに居たれば、又そこにあつまり居て、物などいふに、「なにがしさぶらふ」と、いと花やかにいふ。「清あやしく、いつの間に何事のあるぞ」と問はすれば、主殿司なり。「殿司たゞこゝに、人傳ならで申すべき事なむ」といへば、さし出でて問ふに、「殿司これ頭中將殿の奉らせ給ふ。御返りとく」といふに、いみじくにくみ給ふを、いかなる御文ならむと思へど、只今いそぎ見るべきにあらねば、「清いね。今聞えむ」とて、ふところに引き入れて入りぬ。なほ人の物いふ聞きなどするに、すなはち立ち歸りて、「殿司頭中將」さらば、そのありつる文を賜はりて來』となむ仰せられつる。とく〳〵」といふに、あやしくいせの物語なりやとて見れば、青き薄様に、いと清げに書き給へるを。心ときめきしつるさまにもあらざりけり。「蘭省の花の時錦帳の下」と書きて、「末はいかに〳〵」とあるを、いかゞはすべからむ。御前のおはしまさば御覽せさすべきを、これが末しり顔に、たど〳〵しきまんなに書きたらむも見ぐるしなど思ひまはす程もなく、せめまどはせば、たゞその奥に、炭櫃の消えたる炭のあるして、「草のいほりをたれか尋ねむ」と書きつけて取らせつれど、返りごとも

○いせの物語―えせ物語の意にて、物の間違へるをいふか。

○蘭省の云々―白居易の詩にて、その對句は「廬山夜雨草庵中」とあり。

○まんな―眞字にて、即ち漢字。

○源少將—經房。

○東西をさせず—否やをいはせず。

○ぬす人かな—感激の語にて、極度によき也。

いはず。

みな寢てつとめて、いとと〳〵局におりたれば、源少將の聲して、「草のいほりやある。〳〵」と、おどろ〳〵しう問へば、「清などてか、さ人げなき者はあらむ。玉の臺もとめ給はましかばいらへてまし」といふ。「源少將あな嬉し。しもにありけるよ。うへまで尋ねむとしつるものを」とて、よべありしやう、頭中將の宿居所にて、少し人々しきかぎり、六位まで集まりて、よろづの人のうへ、昔今と語り出でいひしついでに、「頭中將なほこの者、むげに絶えはててのちこそ、さすがにえあらぬ。もしいひ出づる事もやと待てど、いさゝか何とも思ひたらず、つれなきがいとねたきを、こよひ惡しとも善しとも、定めきりて止みなむかし」とて、皆いひあはせたりし事を、「清『只今は見るまじき』とて入り給ひぬ」とて、主殿司來りしを、又追ひかへして、「たゞ袖をとらへて、東西をさせず、乞ひ取りもてこずは、文を返し取れ」といましめて、さばかり降る雨のさかりに遣りたるに、いととく歸りきたり。「主殿司これ」とてさし出でたるが、ありつる文なれば、返してけるかとうち見るにあはせてをめけば、「頭中將あやし。いかなる事ぞ」とて、皆寄りて見るに、「いみじきぬす人かな。なほえこそ棄つまじけれ」と見

○則光—橘氏。

○司召—京官の叙任を稱す。

○めいぼく—面目の字音便。

○せうと—兄人の音便。

○なのめ—普通なる意。

○せうとこそ—こそは人名につけて用ふる語。

さわぎて、「人々これが本附けてやらむ。源少將附けよ」などいふ。夜更くるまで附け煩ひてなむやみにし。この事、かならず語り傳ふべき事なりとなむ定めし」と、いみじくかたはらいたきまで言ひきかせて、「源少將御名は、今は草のいほりとなむ附けたる」とて、急ぎたち給ひぬれば、「清いとわろき名の、末まであらむこそくちをしかるべけれ」といふほどに、修理の亮則光、「いみじきよろこび申しに、うへにやとて參りたりつる」といへば、「清なぞ。司召ありとも聞えぬに、何になり給へるぞ」といへば、「則光いで、まことに嬉しき事のよべ侍りしを、心もとなく思ひ明してなむ。かばかりめいぼくある事なかりき」とて、はじめありける事ども、少將の語りつるおなじ事どもをいひて、「則光このかへりごとに隨ひて、さる者ありとだに思はじ」と、頭中將の給ひしに、たゞに來りしはなか〳〵よかりき。もて來りしたびは、いかならむと胸つぶれて、まことにわろからむは、せうとの爲もわろかるべしと思ひしに、なのめにだにあらず。そこらの人のほめ感じて、「せうとこそ聞け」との給ひしかば、下心にはいと嬉しけれど、「則光さやうの方には、更にえさぶらふまじき身になむ侍る」と申ししかば、「こと加へ聞き知れとにはあらず。たゞ人に語れとて聞かするぞ」との給ひしなむ、少し

○せう〳〵―少々の字音。

○梅壺―凝華舎を稱す。内裏五舎の一。

○鞍馬―京の鞍馬寺。毘沙門を祀る。

くちをしきせうとの覺に侍りしかど、『これが本つけ試みるに、いふべきやうなし。ことに又、これが返しをやすべき』などいひあはせ、わろき事いひては、なか〳〵ねたかるべしとて、夜中までなむおはせし。これ身の爲にも、人の爲にも、さていみじきよろこびには侍らずや。司召にせう〳〵のつかさ得て侍らむは、何とも思ふまじくなむ」といへば、げに數多して、さる事あらむとも知らで、ねたくもありけるかな。これになむ胸つぶれて覺ゆる。このいもうと、せうとといふことをば、うへまで皆しろしめし、殿上にも、つかさ名をばいはで、せうととぞ附けたる。

物語などして居たるほどに、「まづ」と召したれば、參りたるに、この事仰せられむとてなりけり。「うへの渡らせ給ひて、語り聞えさせ給ひて、をのこども、皆、扇に書きてもたる」と仰せらるゝにこそ、あさましう、何のいはせける事にかと覺えしか。さてのちに、袖几帳など取りのけて、思ひなほり給ふめりし。

七十一段

かへる年の二月二十五日に、宮、職の御曹司に出でさせ給ひし御供にまゐらで、梅壺に殘り居たりし又の日、頭中將の消息とて、「きのふの夜、鞍馬にまう

○方のふたがる―方たがへを見よ。

○御匣殿―中宮定子の御妹。御匣殿の別當たる故にいふ。

○見るべき事―始末すべき事。

でたりしに、こよひ方のふたがれば、たがへになむ行く。まだ明けざらむに歸りぬべし。必ずいふべき事あり。いたく敲かせで待て」との給へりしかど、「局に一人はなどてあるぞ。こゝに寢よ」とて、御匣殿召したれば、參りぬ。久しく寢おきておりたれば、「よべいみじう人の敲かせ給ひし。辛うじて起きて侍りしかば、『うへに語らば、かくなむ』との給ひしかども、『よも聞かせ給はじ』とて、臥し侍りにき」と語る。心もとなの事やとて聞くほどに、主殿司きて、「頭の殿の聞えさせ給ふなり。『只今まかり出づるを、聞ゆべき事なむある』」といへば、「見るべき事ありて、うへになむのぼり侍る。そこにて」といひて、局は引きもやあけ給はむと、心ときめきして頻はしければ、梅壺の東おもての半蔀あげて、「こゝに」といへば、めでたくてぞあゆみ出で給へる。櫻の直衣いみじくはなゞゝと、裏の色つやなど、えもいはずけうらに、蒲萄染のいと濃き指貫に、藤の折枝、ことゞゝしくぬりみだりて、紅の色、打目など、かゞやくばかりぞ見ゆる。次第にしろき薄色など、あまたかさなりたる。せばきまゝに、片つ方はしもながら、すこし簾のもと近く寄り居給へるぞ、まことに繪にかき、物語のめでたきことにいひたる、これにこそはと見えたる。

○さだ過ぎ―程を過したるといふ。
○色ことなる頃―忌服のかゝりて、衣色の平時と異なる頃。
○薄鈍―薄鼠色。
○袿姿―小袿と稱する打掛を着たる姿。唐衣及び裳をつけず。
○うんじ―爵しの字音便。

御前の梅は、西は白く、東は紅梅にて、少し落ちがたになりたれど、なほをかしきに、うらうらと日のけしきのどかにて、人に見せまほし。簾のうちに、まして若やかなる女房などの、髪うるはしく長く、こぼれかゝりなどそひ居ためる、今すこし見所あり、をかしかりぬべきに、いとさだ過ぎ、ふるぶるしき人の、髪などもわがにはあらねばや、處々わなゝき散りぼひて、大かた色ことなる頃なれば、あるかなきかなる薄鈍ども、あはひも見えぬ衣どもなどなれば、つゆのはえも見えぬに、おはしまさねば、裳も着ず、袿姿にて居たるこそ、物ぞこなひにくちをしけれ。「職へなむ參る。言づけやある。いつか參る」などの給ふ。「さてよべ、あかしもはてで、さりともかねてさいひてしかば、待つらむとて、月のいみじうあかきに、西の京よりくるまゝに、局を敲きしほど、辛うじて寢おびれて起き出でたりしけしき、いらへのはしたなさ」など語りて、笑ひ給ふ。「むげにこそ思ひうんじにしか。などさる者をばおきたる」などの給ふ。げにさぞありけむと、いとほしくもをかしくもあり。しばしありて出で給ひぬ。とより見む人はをかしう、内にいかなる人のあらむと思ひぬべし。奥の方より見いだされたらむうしろこそ、とにさる人やともえ思ふまじけれ。

○すさし、仲忠―源涼、藤原仲忠。ともに空穂物語中の主要人物。
○あやしさ―仲忠の幼時貧賤なりしをいふ。
○せち―切の字音便。
○天人降るばかり云々―涼のことをいへり。
○帝の御女やは云云―仲忠は琴を彈じて、雷電降雪の奇特を現し、内親王を賜はる。

●瓦の松は云々―白居易の驪宮高に「墻有レ衣兮瓦有レ松、西去三都門一幾多地」。
○西の方都門を云云―驪宮高の中の句。

暮れぬれば參りぬ。御前に、人々多くつどひ居て、物語のよきあしき、にくきところなどをぞ定めいひしろひ、すゞし、仲忠がことなど、御前にも、おとりまさりたる事など仰せられける。「まづこれはいかに、とことわれ。仲忠が童おひのあやしさを、せちに仰せらるゝぞ」などいへば、「何かは。琴なども、天人おるばかり彈きて、いとわろき人なり。みかどの御むすめやは得たる」といへば、仲忠が方人と心を得て、「さればよ」などいふに、「この事どもよりは、ひる齊信が參りたりつるを見ましかば、いかにめで惑はましとこそ覺ゆれ」と仰せらるるに、「さてまことに、常よりもあらまほしう」などいふ。「まづその事こそ啓せめと思ひて、參り侍りつるに、物語の事にまぎれて」とて、ありつる事を語り聞えさすれば、「誰も〳〵見つれど、いとかく縫ひたる絲、針目までやは見とほしつる」とて笑ふ。「西の京といふ所の荒れたりつる事、もろ共に見る人あらましかばとなむ覺えつる。垣ども皆やぶれて、苔生ひて」など語りつれば、宰相の君の、『かはらの松はありつや』といらへたりつるを、いみじうめでて、「西の方都門を去れること、いくばくの地ぞ」と口ずさびにしつる事」など、かしがましきまでいひしこそをかしかりしか。

七十二段

里にまかでたるに、殿上人などのくるも、安からずぞ人々いひなすなる。いとあまり、心に引き入りたる覺はたなければ、さいはむ人もにくからず。又、よるも晝もくる人をば、何かは「なし」なども、かゞやきかへさむ。まことに陸ましくなどあらぬも、さこそはくめれ、あまりうるさくもげにあれば、このたび出でたる所をば、いづくともなべてには知らせず。經房、濟政の君などばかりぞ知り給へる。左衞門尉則光がきて、物語などするついでに、昨日も宰相中將殿の、「妹のあり處、さりとも知らぬやうあらじ」と、いみじう問ひ給ひしに、更に知らぬよし申ししに、あやにくに強ひ給ひし事などいひて、「ある事あらがふは、いとわびしうこそありけれ。ほと〳〵笑みぬべかりしに、左中將の、いとつれなく、知らず顔にて居給へりしを、かの君に見だにあはせば、笑みぬべかりしにわびて、臺盤のうへに、あやしき布のありしを、只取りに取りて食ひまぎらはししかば、中間に、あやしのくひ物やと、人も見けむかし。されど、かしこう、それにてなむ申さずなりにし。笑ひなましかばふえうぞかし。まことに知らぬなめりと覺したりしも、をかしうこそ」など語れば、「更に

○なし—不在。

○宰相中將—齊信のこと。

○布—昆布などの海藻の稱。

○ふえう—不益の字音便。

な聞え給ひそ」など、いとといひて、日頃久しくなりぬ。

夜いたく更けて、門おどろ〳〵しく敲けば、何のかく、心もとなく遠からぬほどを敲くらむと聞きて、問はすれば瀧口なりけり。左衞門の文とて、文をもてきたり。皆ねたるに、火近く取りよせて見れば、「あす御讀經の結願にて、宰相中將の御物忌にこもり給へるに、『妹のあり處申せ』と責めらるゝに、すぢなし。更にえ隱し申すまじ。そこなりとゆめいふなとやめをくはせけむ。とぞいひたる。返事も書かで、布を一寸ばかり、紙に包みてやりつ。さて後にきて、「ひと夜せめて問はれて、すゞろなる所にゐてありき奉りし。まめやかにさいなむに、いと辛し。さてとかくも御返りのなくて、そゞろなる布のはしを包みて賜へりしかば、取りたがへたるにや」といふに、あやしのたがへ物や。人の許に、さる物包みて贈る人やはある。いさゝかも心得ざりけると見るがにくければ、物もいはで、硯のある紙のはしに、

かづきする海士のすみかはそこなりとゆめいふなとやめをくはせけむ。

と書きて出したれば、「歌よませ給ひつるか。更に見侍らじ」とて、あふぎ返してにげていぬ。

○御讀經—季御讀經の略。毎年二月八月の春秋二季に、宮中に僧を請じて、大般若經を讀ましむるをいふ。

○めをくはせ—布を食はせに、目くはせをかく。

○びん―便。

○妹脊―こゝは義兄妹のことにいへり。
○かはと―川に彼者をかく。
○とほたあふみの介云々―遠江介に任官したるをいふ。

かうかたみにうしろ見かたらひなどする中に、何事ともなくて、少し中あしくなりたる頃、文おこせたり。「明光びんなき事侍りとも、ちぎり聞えし事はすて給はで、よそにても、さぞなどは見給へ」といひたり。常にいふ事は、「明光おのれをおぼさむ人は、歌などよみて得さすまじき。すべてあたかたきとなむ思ふべき。今はかぎりありて絶えなむと思はむ時、さる事はいへ」といひしかば、この返しに、

くづれよる妹脊の山の中なればさらによし野のかはとだに見じ。

といひ遣りたりしも、まことに見ずやなりけむ、返事もせず。さてかうぶり得て、とほたあふみの介などいひしかば、にくゝしてこそやみにしか。

七十三段

物のあはれ知らせ顔なるもの　鼻垂るまもなくかみて物いふ聲。眉ぬく。

七十四段

さてその左衞門の陣にいきてのち、里に出でて、しばしあるに、「宮とく參れ」など仰言のはしに、「左衞門の陣へいきし朝ぼらけなむ、常におぼし出でらるゝ。いかでさつれなく、うち舊りてあるならむ。いみじくめでたからむとこそ思ひたりしか」など仰せられたる御返事に、かしこまりのよし申して、私には、「いかでかめでたしと思ひ侍らざらむ。御前にも、さりとも、『中なるをとめ』とはおぼしめし御覽じけむ、となむ思ひ給へし」と聞えさせたれば、立ち返り、「使中宮『いみじく思ふべかなる仲忠がおもてぶせなる事をば、いかでか啓したるぞ。たゞ今宵のうちに、よろづの事をすてて參れ。さらずば、いみじくにくませ給はむ』となむ、仰言ある」とあれば、「清よろしからむにてだにゆゝし。まして『いみじく』とある文字には、命もさながら棄ててなむ」とて參りにき。

七十五段

職の御曹司におはしますころ、西の廂に、不斷の御讀經あるに、佛などかけ奉り、法師の居たるこそ更なる事なれ。二日ばかりありて、緣のもとにあやしき者の聲にて、「なぼその佛供のおろし侍りなむ」といへば、「法師いかでまだきには」といらふるを、何のいふにかあらむと、立ち出でて見れば、老いたる女の法師の、いみじく煤けたる狩袴の、筒とかやのやうにほそく短きを、帶より下五寸ばかりなる、衣とかやいふべからむ、同じやうに煤けたるを着て、猿のさまにていふなりけり。「清あれは何事いふぞ」といへば、聲ひき繕ひて、「佛の御弟子

○中なるをとめ―空穗物語に、源涼涼天琴を彈すに、人降り舞ひぬ。涼これを見て、朝ぼらけ、ほのかに見れば、あかぬかなの中なれば、るをとめしばしをとめむ」とよめり。
○仲忠が面ぶせ―涼は仲忠の競爭者なれば、涼の神技を稱ふるは、卽ち仲忠の不面目となる也。

○不斷の御讀經―晝夜を十二時として、十二人の僧に、輪番に誦經せしむ。經は大般若、最勝王、法華經等なり。
○佛など―佛の畫像など。
○狩袴―布の指貫。

○くんじ―屈しの字音便。

○ひろきもちひ―熨斗餅。

○そへ言―當てつけたる冗談口。

○よるはたれとか云々、男山の峯のもみぢ葉云々―いづれも當時の俗謡なり。

にさぶらへば、佛のおろしたべと申すを、この御坊達のをしみ給ふ」といふ、花やかにみやびかなり。かゝる者は、うちくんじたるこそあはれなれ。うたても花やかなるかなとて、「ことの物は食はで、佛の御おろしをのみ食ふか。いと尊きことかな」といふけしきを見て、「などかこと物もたべざらむ。それがさぶらはねばこそ、取り申し侍れ」といへば、くだ物、ひろきもちひなどを、物に取り入れて取らせたるに、むげに中よくなりて、よろづの事をかたる。若き人々出できて、「男やある」、「いづこにか住む」など、口々に問ふに、をかしきこと、そへごとなどすれば、「歌はうたふや。舞などするか」と問ひもはてぬに、「よるはたれとかねむ。常陸の介とねむ。寝たるはだもよし」。これが末いと多かり。又、「男山の峯のもみぢ葉、さぞ名はたつ〳〵」と、かしらをまろがしふる。いみじくにくければ、笑ひにくみて、「いね〳〵」といふもいとをかし。「これに、何取らせむ」といふを聞かせ給ひて、「いみじう、などかくかたはら痛き事はせさせつる。えこそ聞かで、耳をふたぎてありつれ。その衣一つ取らせて、とくやりてよ」と仰言あれば、取りて、「それ賜はするぞ。衣煤けたり。しろくて着よ」とて投げ取らせたれば、伏し拜みて、肩にうちかけて舞ふものか。ま

○宮づかさ―中宮職の役人。

○所の衆―藏人所の衆。殿中の雜役を勤む。

ことににくゝて皆入りにし。後にはならひたるにや、常に見えしらがひてありく。やがて常陸の介とつけたり。衣もしろめず、同じ煤けにてあれば、いづちやりにけむなどにくむに、右近の内侍の參りたるに、「かゝる者なむ語ひつけて置きためる。かうして常にくること」と、ありしやうなど、小兵衛といふ人して、まねばせて聞かせ給へば、「あれいかで見侍らむ。かならず見せさせ給へ。御得意ななり。更によも語らひ取らじ」など笑ふ。そののちまた、尼なるかたはの、いとあてやかなるが出できたるを、また呼び出でて物など問ふに、これははづかしげに思ひてあはれなれば、衣ひとつ賜はせたるを、伏しをがむはされどよし。さてうち泣き喜びて出でぬるを、はやこの常陸の介、いきあひて見てけり。その後いと久しく見えねど、誰かは思ひ出でむ。

さてしはすの十餘日のほどに、雪いと高うふりたるを、女房どもなどして、物の蓋に入れつゝ、いと多くおくを、「おなじくは、庭にまことの山を作らせ侍らむ」とて、侍召して、「仰言にて」といへば、集まりてつくるに、主殿司の人にて、御きよめに參りたるなども、皆よりて、いと高くつくりなす。宮づかさなど參り集まりて、言加へことにつくれば、所の衆三四人參りたる。主殿司の人も、

○かたへ―半分は。

○白山の觀音―加賀の白山なる十一面觀世音。

二十人ばかりになりにけり。里なる侍召しにつかはしなどす。「今日この山つくる人には、祿賜はすべし。雪山に參らざらむ人には、同じからずとゞめむ」などいへば、聞きつけたるは惑ひ參るもあり。里遠きはえ告げやらず。作りはてつれば、宮づかさ召して、衣二ゆひとらせて、緣に投げ出づるを、一つづつ取りに寄りて、をがみつゝ腰にさして、皆まかでぬ。袍など着たるは、かたへさらで、狩衣にてぞある。「これいつまでありなむ」と、人々にの給はするに、「十日はありなむ」、「十餘日はありなむ」など、たゞこの頃のほどを、あるかぎり申せば、「いかに」と問はせ給へば、「正月の十五日までさぶらひなむ」と申すを、御前にも、えさはあらじと思すめり。女房などはすべて、「年の内、晦日までもあらじ」とのみ申すに、あまり遠くも申してけるかな、げにえしもさはあらざらむ、朔日などぞ申すべかりけると、下には思へど、さばれさまでなくと、いひ初めてむことはとて、かたうあらがひつ。

二十日のほどに、雨など降れど、消ゆべくもなし。たけぞ少し劣りもてゆく。

「白山の觀音、これきやさせ給ふな」と祈るも物ぐるほし。さてその山つくりたる日、式部の丞忠隆、御使にて參りたれば、しとねさしいだし、物などいふに、

○お前の―主上の。

○壺―中庭。

○春宮―東宮御所。當時の東宮は居貞親王。後に卽位して三條天皇と申す。

○弘徽殿―女御藤原義子住み給へり。

○京極殿―藤原道長の家。

○ふり―降りに舊りをいひかく。

○あされたる御簾の前―風流なる女房の居る處にてといはんが如し。

○あま―海人に尼をいひかく。

「けふ雪山作らせ給はぬ所なむなき。御前の壺にも作らせ給へり。春宮、弘徽殿にも作らせ給へり。京極殿にも作らせ給へり」などいへば、

こゝにのみ珍しと見る雪の山ところ〴〵にふりにけるかな。

と傍なる人していはすれば、たび〳〵かたぶきて、「忠隆返しはえ仕うまつりけがさじ。あされたる御簾の前にて、人にを語り侍らむ」とてたちにき。歌はいみじく好むと聞きしに、あやし。御前にきこしめして、「いみじくよくとぞ思ひつらむ」とぞの給はする。晦日がたに、少し小くなるやうなれど、なほいと高くてあるに、晝つかた、緣に人々出で居などしたるに、常陸の介出できたり。「などいと久しく見えざりつる」といへば、「なにか。いと心うき事の侍りしかば」といふに、「いかに。何事ぞ」と問ふに、「なほかく思ひ侍りしなり」とて、長やかによみ出づ。

「うらやまし足もひかれずわたつうみのいかなるあまに物賜ふらむ。

となむ思ひ侍りし」といふを、にくみ笑ひて、人の目も見入れねば、雪の山にのぼり、かゝづらひありきていぬる後に、右近の内侍に、「かくなむ」といひやりたれば、「などか人添へて、こゝには賜はせざりし。彼がはしたなくて、雪の

○うへにて—當直にて。

○齋院—賀茂の齋王にて、選子内親王をいふ。村上帝の皇女。

○おどろかせ給ひて—お目覺になりて。

○いはひの杖—卯杖をいふ。

山までかゝり傳ひけむこそ、いと悲しけれ」とあるを、又笑ふ。雪山はつれなくて、年もかへりぬ。

ついたちの日、又雪多くふりたるを、うれしくも降り積みたるかなと思ふに、宮「これはあひなし。はじめのをばおきて、今のをばかき棄てよ」と仰せらる。うへにて、局へいと疾うおるれば、侍の長なるもの、柚の葉の如くなる宿直衣の袖のうへに、青き紙の松につけたるをおきて、わなゝき出でたり。「そはいづこのぞ」と問へば、侍「齋院より」といふに、ふとめでたく覺えて、取りて參りぬ。まだおほとのごもりたれば、身屋にあたりたる御格子を、恭盤などかき寄せて、一人念じてあぐる、いとおもし。片つ方なればひしめくに、おどろかせ給ひて、宮「などさはする」との給はすれば、「齋院より御文のさぶらはむには、いかでか急ぎあげ侍らざらむ」と申すに、宮「げにいと疾かりけり」とて起きさせ給へり。御文あけさせ給へれば、五寸ばかりなる卯槌二つを、卯杖のさまに、かしら包みなどして、山橘、日陰、山菅などうつくしげに飾りて、御文はなし。ただなるやうあらむやはとて御覽ずれば、卯槌の頭包みたる小き紙に、

山とよむ斧のひゞきをたづぬればいはひの杖の音にぞありける。

○梅—梅がされの略。表裏とも蘇枋色の服。

○うちへ—職御曹司より禁中へ。

○木守—庭木の世話などする者。

○よろこび—謝禮なり。

御返し書かせ給ふほども、いとめでたし。齋院には、これより聞えさせ給ふ。御返しも、なほ心ことに書きけがし、多く御用意見えたり。御使に、白き織物の單衣、蘇枋なるに梅なめりかし。雪の降りしきたるに、かづきて參るもをかしう見ゆ。このたびの御返事を、知らずなりにしこそくちをしかりしか。

雪の山は、まことに越のにやあらむと見えて、消えげもなし。黑くなりて、見るかひもなきさまぞしたる。勝ちぬる心ちして、いかで十五日待ちつけさせむと念ずれど、「七日をだにえ過ぐさじ」となほいへば、いかでこれ見はてむと、皆人おもふほどに、俄に三日うちへ入らせ給ふべし。いみじうくちをしく、この山のはてを知らずなりなむことと、まめやかに思ふほどに、人も「げにゆかしかりつるものを」などいふ。御前にも仰せらる。同じくはいひあてて、御覽ぜさせむと思へるかひなければ、御物の具はこび、いみじう騷がしきにあはせて、木守といふ者の、築土のほどに廂さして居たるを、緣のもと近く呼びよせて、「この雪の山いみじく守りて、わらはべなどに踏み散させこぼたせで、十五日までさぶらはせ。よく〳〵守りて、その日にあたらば、めでたき祿たまはせむとす。私にも、いみじきよろこびいはむ」など語ひて、當に臺盤所の人、下

○七日の御節供―七種粥など上る祝日なり。

○わらふだ―藁蓋にて、圓座なり。

○折櫃―檜のへぎ板にて作る。今の菓子折の如き物。

衆などにくるゝを乞ひて、くだ物や何やと、いと多く取らせたれば、うち笑みて、「木守いとやすきこと、たしかに守り侍らむ。わらはべなどぞのぼり侍らむ」といへば、「清それを制して聞かざらむ者は、事のよしを申せ」などいひ聞かせて、入らせ給ひぬれば、七日までさぶらひて出でぬ。そのほども、これがうしろめたきまゝに、おはやけ人、すまし、をさめなどして、絶えずいましめにやり、七日の御節供のおろしなどを遣りたれば、拜みつることなど、かへりては笑ひあへり。

里にても、あくるすなはち、これを大事にして見せにやる。十日のほどには、「使五日待つばかりあり」といへば、嬉しく思ふに、十三日の夜、雨いみじく降れば、これにぞ消えぬらむと、いみじうくちをし。今ひと日二日も待ちつけでと、よるも起き居てなげけば、聞く人も物ぐるほしと笑ふ。人の起きて行くに、やがて起きいで、下衆起さするに、更に起きねば、にくみ腹だたれて、起きいでたるを遣りて見すれば、「使わらふだばかりになりて侍る。木守いとかしこう、わらはべも寄せで守りて、明日あさてまでもさぶらひぬべし。『木守祿賜はらむ』と申す」といへば、いみじく嬉しく、いつしか明日にならば、いととう歌よみて、物に入れて參らせむと思ふも、いと心もとなうわびしう、まだ暗きに、大きなる折櫃などもたせて、「清これに白からむ所、ひたもの入れてもてこ。きたなげならむはかき捨てて」など、いひくゝめて遣りたれば、いと疾く、もたせてやりつる物ひきさげて、「使はやう失せ侍りにけり」といふに、いとあさまし。をかしう詠み出でて、人にも語り傳へさせむと、うめき誦んじつる歌も、いとあさましくかひなく、「清いかにしつるならむ。昨日さばかりありけむものを、夜のほどに消えぬらむこと」といひくんずれば、「使木守が申しつるは、『昨日いと暗うなるまで侍りき。祿を賜はらむと思ひつるものを、賜はらずなりぬる事』と、手をうちて申し侍りつる」といひ騒ぐに、うちより仰言ありて、「宮さて雪は今日までありつや」との給はせたれば、いとねたくくちをしけれど、「清年のうち剏日までだにあらじ』と、人々啓し給へし、昨日の夕暮まで侍りしを、いとかしこしとなむ思ひ給ふる。今日まではあまりの事になむ。夜のほどに、人のにくがりて、取り棄て侍るにやとなむ推しはかり侍る』と啓せさせ給へ」と聞えさせつ。

さて二十日に參りたるにも、まづこの事を、御前にてもいふ。皆消えつとて、

○帽子のやうにて―折櫃の蓋を頭にかぶりたるさまなり。

○左近のつかさ―左近衛府。職御曹司の東南にあり。

蓋のかぎりひきさげてもて來りつる、帽子のやうにて、すなはちもて來りつるが、あさましかりし事、物の蓋に、小山うつくしう作りて、白き紙に歌いみじく書きて參らせむとせし事など啓すれば、いみじく笑はせ給ふ。御前なる人々も笑ふに、「宮かう心に入れて思ひける事を、たがへたれば罪得らむ。まことには、四日の夕さり、侍どもやりて取り棄てさせしぞ。返りごとにいひあてたりしこそをかしかりしか。その翁出できて、いみじう手をすりていひけれど、『仰言ぞ。かの寄りきたらむ人に、かう聞かすな。さらば屋うちこぼたせむ』といひて、左近のつかさの南の築土のとに、皆取り棄ててけり。『いと高くて、多くなむありつる』といふなりしかば、げに二十日までも待ちつけて、ようせずは、今年の初雪も降り添ひなまし。うへにも聞し召して、『いと思ひ寄りがたくあらがひたり』と、殿上人などにも仰せられけり。さてもかの歌を語れ。今はかくいひあらはしつれば、同じごと勝ちたり。語れ」など、御前にもの給はせ、人々もの給へど、「何せむにか、さばかりの事を承りながら啓し侍らむ」など、まめやかに心うがれば、うへも渡らせ給ひて、「まことに年頃は、多くの人なめりと見つるを、これにぞあやしく思ひし」など仰せられるゝに、いとゝ

○飾太刀―束帯の時佩用す。

○もく―木目。

○青色姿―麴塵の袍にて、主上の服色なり。

○雜色―藏人所の雜色。

○大饗―中宮東宮は正月二日に、大臣は任大臣の時、王卿以下を饗應するをいふ。

○甘栗の使―天皇より甘栗を、大饗の館賜ふ使。

○きやうよう―饗應の字音。

○衛府なるは―藏人にて、兵衛衛門

つらく、うちも泣きぬべき心ちぞする。「いであはれ、いみじき世の中ぞかし。のちに降り積みたりし雪を、うれしと思ひしを、それはあひなしとて、『かき捨てよ』と仰ごと侍りし」と申せば、「げに勝たせじと思しけるならむ」と、うへも笑はせおはします。

七十六段

めでたきもの　唐錦。飾太刀。つくり佛のもく。色あひよく、花ぶさ長くさきたる藤の松にかゝりたる。六位の藏人こそなほめでたけれ。いみじき君達なれども、えしも着給はぬ綾織物を、心にまかせて着たる青色姿など、いとめでたきなり。所の衆、雜色、たゞの人の子どもなどにて、殿ばらの四位五位六位も、つかさあるが下にうち居て、何と見えざりしも、藏人になりぬれば、えもいはずぞあさましくめでたきや。宣旨もて參り、大饗の甘栗の使などに參りたるを、もてなしきやうようし給ふさま、いづこなりし天くだり人ならむとこそおぼゆれ。御むすめの女御、后におはします、まだ姫君など聞ゆるに、御使にて參りたれば、御文とり入るゝよりうちはじめ、しとねさし出づる袖口など、あけくれ見し者ともおぼえず。下襲のしりひき散して、衛府なるは、今すこしをかし

の尉など兼れたるをいふ。○みづから―姫君の親なる大臣がなり。○べち―別の字音便、

○かうぶり得て云云―六位の藏人の五位に敍爵して、地下となり、退官するをいふ。○御給ばり―在職中の功勞に對して、官を望むをいふ。○博士―文章博士。○下臈なれども―文章博士は地下の官なり。○御文の師―御侍讀。○願文―佛神に祈誓立願する文。○持經者―法華經不斷の行者。

う見ゆ。みづから盃さしなどし給ふを、わが心にも覺ゆらむ。いみじう畏まり、べちに居し家の君達をも、けしきばかりこそ畏まりたれ、同じやうにうち連れありく。うへの近く使はせ給ふさまなど見るは、ねたくさへこそ覺ゆれ。御文書かせ給へば、御硯の墨すり、御うちはなど參り給へば、われ仕うまつるに、三とせ四とせばかりの程を、なりあしく、物の色よろしうてまじろはむは、いふかひなきものなり。かうぶり得て、おりむこと近くならむだに、命よりはまさりて惜しかるべき事を、その御たまはりなど申して、惑ひけるこそくちをしけれ。昔の藏人は、今年の春よりこそ泣きたちけれ。今の世には、はしりくらべをなむする。

博士のざえあるは、いとめでたしといふもおろかなり。顏もいとにくげに、下臈なれども、世にやむごとなき者に思はれ、かしこき御前に近づき參り、さるべき事など問はせ給ふ御文の師にてさぶらふは、めでたくこそおぼゆれ。願文、さるべきものの序作りいだして譽めらるゝ、いとめでたし。法師のざえある、すべていふべきにあらず。持經者の一人して讀むよりも、あまたが中にて、時など定まりたる御讀經などに、なほいとめでたきなり。暗うなりて、「いづ

○御讀經油―みあかし。○宮はじめの作法―立后の儀式。○獅子狛犬―御帳の帷の裾におく鎭子。○内膳云々―内膳司より竈神を、后の御方の竈神屋に分祀するをいふ。○一の人―攝政關白を稱す。○六位の云々―六位の藏人の青色に、紫の指貫をはくをいふ。○一の宮―一條帝の第一皇子敦康親王。御母は定子の中宮。○綻びがちなる―汗衫の製は縫合せたる所すくなし。○几帳のしたぎ―したは裾。

ら、御讀經油おそし」などいひて讀みやみたるほど、忍びやかに續け居たるよ。后の畫の行啓。御産屋。宮はじめの作法、獅子、狛犬、大床子などもて參りて、御帳の前にしつらひするゑ、内膳、御へつひ渡し奉りなどしたる、姫君など聞えしたゞ人とこそ、つゆ見えさせ給はね。一の人の御ありき。春日まうで。蒲萄染の織物。すべて紫なるは、何も〳〵めでたくこそあれ。花も、絲も、紙も。紫の花のなかには、杜若ぞすこしにくき。色はめでたし。六位のとのゐ姿のをかしきも、紫のゆゑなめり。ひろき庭に雪のふりしきたる。今上一の宮。まだ童にておはしますが、御をぢに上達部などの、わかやかに清げなるにいだかれさせ給ひて、殿上人など召しつかひ、御馬引かせて御覽じ遊ばせ給へる。思ふ事おはせじとおぼゆる。

七十七段

なまめかしきもの　ほそやかに清げなる君達の直衣すがた。をかしげなるわらはめの、うへの袴などわざとにはあらで、綻びがちなる汗衫ばかり着て、藥玉など長くつけて、勾欄のもとに、扇さしかくして居たる。若き人のをかしげなる、夏の几帳のしたうち懸けて、白き綾、二藍引きかさねて、手習したる。薄様

○髪籠―竹の籠にて、編みあまりを髪の如く立てたる物。○三重がさね―親骨を三枚重ねの板にしたるをいふ。○朽木形―几帳の帷の模様にて、板目形なり。○あやめの藏人―端午の節句に、菖蒲などあつかふ女房。○ひれ―領巾と書く。手巾の如くにて、婦人正裝の時領に掛く。○くたい―くんたい。裙帶の字音。婦人正裝の時、裝飾に引く紐。○ひとりの童―五節に、舞妓の參る時、火取を持つ童女。○小忌の君達―五節の時、小忌衣を著て、事務をみる役人。

の草子、むら濃の絲してをかしくとぢたる。柳の萌えたるに、青き薄様に書きたる文つけたる。髪籠のをかしう染めたる、五葉の枝につけたる。三重がさねの扇、五重はあまり厚くなりて、もとなどにくげなり。よくしたる檜割籠。白き組のほそき。新しくもなくて、いたく舊りてもなき檜皮屋に、菖蒲うるはしく葺きわたしたる。青やかなる御簾のしたより、朽木形のあざやかに、いとつややかにてかゝりたる、紐の吹き靡かされたるもをかし。夏の帽額のあざやかなる、簾のとの匂欄のわたりに、いとをかしげなる猫の、赤き首綱に白き札つきて、いかりの緒くひつきて、引きありくもなまめいたり。五月の節のあやめの藏人、菖蒲のかづら、赤紐の色にはあらぬ、ひれ、くたいなどして、藥玉を皇子たち、上達部などの立ちなみ給へるに奉るも、いみじうなまめかし。取りて腰にひきつけて、舞蹈し拜し給ふも、いとをかし。ひとりのわらは。小忌の君達も、いとなまめかし。六位の青色のとのゐ姿。臨時の祭の舞人。五節のわらはなまめかし。

七十八段

宮の五節いださせ給ふに、かしづき十二人、こと所には、御息所の人いだすを

○宮の五節云々―宮の、五節の舞姫を出さるゝに。○御息所―こゝには東宮（三條）の妃たる淑景舍の女御藤原原子をさす。中宮の御妹。○女院―當一條帝の御母藤原詮子。東三條院と號す。○辰の日―五節の當夜なり。○えうしたる―瑩したるにて、磨りて光澤を出すこと。○かた木―形木。○五節の局―常寧殿内の四隅に、舞姫の部屋を置く。○こぼちすかして―當日の儀まだはてぬうちに、取急ぎて取片付くるをいふ。○几帳どもの―几帳の帷の下部の縫付けざる所を綻びといふ。○やまぬひも―山藍に山井をかけ、氷もに紐をかく。

ば、わろき事にぞすると聞くに、いかに思すにか、宮の女房を十人いださせ給ふ。いま二人は女院、淑景舍の人、やがてはらからなりけり。辰の日の夜、青摺の唐衣、汗衫を着せ給へり。女房にだにかねてさしも知らせず、殿上人にはましていみじう隱して、皆裝束したちて、暗うなりたる程にもてきて着す。赤紐いみじう結び下げて、いみじくえうしたる白き衣に、かた木のかた繪にかきたる、織物の唐衣のうへに着たるは、まことにめづらしき中に、童は今少しなまめきたり。下仕までつゞき立ちて居たる、上達部、殿上人おどろき興じて、小忌の女房とつけたり。小忌の君達は、とに居て物いひなどす。「五節の局を皆こぼちすかして、いとあやしくてあらする、いとことやうなり。その夜までは、なほうるはしくこそあらめ」との給はせて、さもまどはさず、几帳どものほころびゆひつゝ、こぼれ出でたり。小兵衛といふが、赤紐の解けたるを、「これを結ばばや」といへば、實方の中將寄りてつくろふに、たゞならず。

あし引のやまゐの水はこほれるをいかなるひものとくるなるらむ。

といひかく。年若き人の、さるけそうの程なれば、いひにくきにやあらむ、返しもせず。その傍なるおとな人たちも打ち捨てつゝ、ともかくもいはぬを、宮

○歌よむと云々―實方をさす。

○あわに結べる、日かげ―泡のたつに、あわび結をかけ、日影に日蔭鬘をかく。

○の給はせし―しひて出仕せよと宣はせし。

○すけまさ―藤原相尹。

○染殿の式部卿の宮―爲平親王。村上帝の皇子。

○おひかづき―多人數にて被ひかぶさる。

づかさなどは、耳とゞめて聽きけるに、久しくなりにけるかたはら痛さに、ことの方より入りて、女房の許に寄りて、「宮司などかうはおはする」などぞさゝめくなるに、四人ばかりを隔てて居たれば、よく思ひ得たらむにもいひにくし、まして歌よむと知りたらむ人のおぼろげならざらむは、いかでかとつゝましきこそはわろけれ。「宮司よむ人はさやはある。いとめでたからねど、ふとこそはいへ」と、爪はじきをしてありくも、いとをかしければ、

うす氷あわにむすべる紐なればかざす日かげにゆるぶばかりを。

と、辨のお許といふに傳へさすればどか」と、耳をかたぶけて問ふに、少し言どもりする人の、いみじうつくろひめでたしと聞かせむと思ひければ、えもいひ續けずなりぬるこそ、なか〳〵恥かくす心ちしてよかりしか。おりのぼる送などに、なやましといひ入れぬる人をも、の給はせしかば、あるかぎり群れ立ちて、ことにも似ず、あさりこそうるさげなめれ。舞姫は、すけまさの馬の頭の女、染殿の式部卿の宮のうへの御おとうとの四の君の御はら、十二にていとをかしげなり。はての夜も、おひかづきいくも騒がず。やがて仁壽殿より通りて、清涼殿の前の東の簀子より、舞

○平緒―束帯にて太刀を帶ぶる時、前にさぐる飾帶。

○ふんじ―封じ。

○物忌のやう―物忌の札のやう。

○釵子―笄の類。

○反橋―五節の爲、臨時に清涼殿より承香殿へかけたる假橋。

○上雜仕、わらはべ―殿上なる雜仕と童とにて、臨時の役なり。

○色ふし―晴れなる事をいふ。

○やない筥―柳筥。柳の木を三角に削りたるを、絲にて編めるを筥。

○しきなみ云々―官位昇進の御使の、頻にくるを也。しきなみは重波の義。

○帳臺の夜―常寧殿なる帳臺にて、主上の五節の舞を試みを給ふ夜。十一月中の丑日なり。

姫をさきにて、うへの御局へ參りしほどをかしかりき。

細太刀の平緒つけて、清げなるをのこのもて渡るも、いとなまめかし。紫の紙を包みてふんじて、房ながき藤につけたるも、いとをかし。

内裏は、五節の程こそすゞろにたゞならで、見る人もをかしうおぼゆれ。主殿司などの、いろ〳〵のさいでを、物忌のやうにて、釵子につけたるなども、めづらしく見ゆ。清涼殿の反橋に、元ゆひのむら濃、いとけざやかにて出で居れるも、さまざまにつけてをかしうのみぞある。上雜仕、わらはべども、いみじき色ふしと思ひたる、いとことわりなり。山藍、日蔭など、やない筥に入れて、かうぶりしたるをのこもてありく、いとをかしう見ゆ。殿上人の直衣ぬぎたれて、扇や何やと拍子にして「つかさまされとしきなみぞたつ」といふ歌をうたひて、局どもの前わたる程はいみじく、そひたちたらむ人の心騒ぎぬべしかし。ましてさと一度に笑ひなどしたる、いとおそろし。行事の藏人の搔練がさね、物よりことにきよらに見ゆ。褥など敷きたれど、なか〳〵えものぼり居ず。女房の出でたるさま譽めそしり、この頃はこと事はなかめり。帳臺の夜、行事の藏人、いときびしうもてなして、「かいつくろひ二人、童より外は入るまじ」と

○童舞の夜―卯の日の童御覽の夜。
○といへば―と人のいへば來て見たるにと解すべし。
○故殿―道隆。
○僧都の君―中宮及び淑景舍の御弟。

おさへて、おもにくきまでいへば、殿上人など、「なほこれ一人ばかりは」などの給ふ。「(殿上人)うらやみあり。いかでか」などかたくいふに、宮の御かたの女房二十人ばかりおし凝りて、ことゝくしういひたる藏人何ともせず、戸をおし開けてさゝめき入れば、あきれて、「(殿上人)いとこは、すぢなき世かな」とて立てるもをかし。それにつきてぞ、かしづきどもも皆入る。けしきいとねたげなり。うへもおはしまして、いとをかしと御覽じおはすらむかし。童舞の夜は、いとをかし。燈臺に向ひたる顏ども、いとらうたげにをかしかりき。

七十九段

「無名といふ琵琶の御琴を。うへのもてわたらせ給へるを、見などして、かき鳴しなどす」といへば、彈くにはあらず、緒などを手まさぐりにして、「(女房)これが名よ。いかにとかや」など聞えさするに、「(宮)たゞいとはかなく、名もなし」との給はせたるは、なほいとめでたくこそ覺えしか。淑景舍などわたり給ひて、御物語のついでに「まろがもとに、いとをかしげなる笙の笛こそあれ。故殿の得させ給へり」との給ふを、僧都の君の、「それは隆圓にたうべ。おのれが許にめでたき琴侍り。それに換へさせ給へ」と申し給ふを」聞きも入れ給はで、なほこと事をの給ふに、いらへさせ奉らむと、あまたたび聞え給ふに、なほ物の給はねば、宮の御前の、「いな換へじとおぼいたるものを」との給はせけるが、いみじうをかしき事ぞ限なき。この御笛の名を、僧都の君もえ知り給はざりければ、只うらめしとぞ思しためる。これは職の御曹司におはしましし時の事なり。うへの御前に、いなかへじといふ御笛のさぶらふなり。御前にさぶらふものども は、琴も笛も、皆珍しき名つきてこそあれ。琵琶は玄上、牧馬、井手、渭橋、無名など、又和琴なども、朽目、鹽竈、二貫などぞ聞ゆる。水龍、小水龍、宇多の法師、釘打、葉二、なにくれと多く聞えしかど忘れにけり。「宜陽殿の一の棚に」といふことぐさは、頭中將こそし給ひしか。

○宜陽殿―樂器や書籍など置かるゝ處。
○頭中將―齊信なり。
○たゝざま―縱樣。

八十段

うへの御局のみすの前にて、殿上人日ひと日、琴、笛吹き遊びくらして、まかんで別るゝほど、まだ格子をまゐらぬに、おほとなぶらをさし出でたれば、外のあきたるがあらはなれば、琵琶の御琴を、たゝざまに持たせ給へり。紅の御衣のいふもよのつねなる、打ちも又張りたるも、あまた奉りて、いと黑くつややかなる御琵琶に、御衣の袖をうちかけて、とらへさせ給へるめでたきに、そ

●なかば隠したりけむ―白居易の琵琶行に、千呼萬喚始出來、猶抱琵琶半遮面。
○それはたゞうと云々―琵琶行に見えたるは、平人なりしならんと也。

○御めのと―中宮のなり。
○井手の中將―物語中の人物なるべし。不明。

ばより、御額のほど白くけざやかにて、僅に見えさせ給へるは、譬ふべき方なくめでたし。近く居給へる人にさし寄りて、「なかば隠したりけむも、えかうはあらざりけむかし。それはたゞ人にこそありけめ」といふを聞きて、みちもなきを、わりなく分け入りて啓すれば、笑はせ給ひて、『我は知りたりや』となむ仰せらるゝ」と傳ふるもをかし。

八十一段

御めのとの大輔の、けふ日向へくだるに、賜はする扇どものなかに、片つ方には、旅人のある所、井手の中將の館などいふさま、いとをかしうかきて、いま片つ方には、京のかた雨いみじう降りたるに、ながめたる人などかきたるに、

あかねさす日に向ひても思ひいでよ都は晴れぬながめすらむと。

ことばに御手づから書かせ給ひし、あはれなりき。さる君をおき奉りて、遠くこそえいくまじけれ。

八十二段

ねたきもの　これより遣るも、人のいひたる返しも、書きてやりつるのち、文字一つ二つなど思ひなほしたる。とみの物縫ふに、縫ひはてつと思ひて、針をひき抜きたれば、はやうしりを結ばざりけり。又、かへさまに縫ひたるも、いとねたし。

○南の院―東三條の南院にて、道隆の第なり。
○殿―道隆。

南の院におはす頃、西の對に殿のおはす方に、宮もおはせば、寝殿にあつまり居て、さう〳〵しければ、たはぶれ遊をし、渡殿にあつまり居などしてあるに、「これ只今、とみの物なり。誰も〳〵集まりて、時かはさず縫ひて參らせよ」とて、平ぬきの御衣を給はせたれば、南面にあつまり居て、御衣かたみづつ、誰かとく縫ひ出づるといどみつゝ、近くも向はず縫ふさまも、いと物ぐるほし。命婦の乳母、いと疾く縫ひはててうち置きつる、ゆだけの方の御身を縫ひつるが、そむきざまなるを見つけず、とぢめもしあへずまどひ置きて立ちぬるに、御背合はせむとすれば、早うたがひにけり。笑ひのゝしりて、「これ縫ひなほせ」といふを、「たれがあしう縫ひたりと知りてかなほさむ。綾などならばこそ、裏を見ざらむ縫ひたがへの人のげになほさめ。無文の御衣なり。何をしるしにてか。なほす人誰かあらむ。只まだ縫ひ給はざらむ人になほさせよ」とて聞きも入れねば、「さいひてあらむや」とて、源少納言、新中納言など縫ひな

○ゆだけ―衣のゆきの廣き方をいふ。

○のぼらせ―參內なり。

ほし給ひし顏、見やりて居たりしこそをかしかりしか。これは夜さりのぼらせ給はむとて、「宮とく縫ひたらむ人を、思ふと知らむ」と仰せられしかばとぞ。見すまじき人に、ほかへ遣りたる文、取りたがへてもて行きたるねたし。「げにあやまちてけり」とはいはで、口がたうあらがひたる、人目をだに思はずば、走りも打ちつべし。おもしろき萩、薄などを植ゑて見るほどに、長櫃もたるもの、鋤などひきさげて、たゞ掘りに掘りていぬるこそ、わびしうねたかりけれ。よろしき人などのある折は、さもせぬものを、いみじう制すれど、「たゞすこし」などいひていぬる、いふかひなくねたし。受領などの家に、さるべき所の下部などのきて、なめげに物いひ、さりとて我をばいかゞと思ひたるけはひに、いひ出でたる、いとねたげなり。見すまじき人の、文をひき取りて、庭におりて見たてる、いとわびしうねたく、追ひて行けど、簾のもとにとまりて見るこそ、飛びも出でぬべき心ちすれ。

すゞろなる事腹だちて、同じ所にも寢ず、身じくり出づるを、しのびて引きよすれど、わりなく心ことなれば、あまりになりて、人も、「さばよかなり」と怨じて、かいくゝみて臥しぬる後、いと寒き折などに、只ひとへぎぬばかりにて、

○オ―學問。

○人の名―古人の名なるべし。

あやにくがりて、大かた皆人も寢たるに、さすがに起き居らむあやしくて、夜の更くるまゝに、ねたく起きてぞいぬべかりけるなど思ひ臥したるに、奥にも外にも、物うち鳴りなどして恐ろしければ、やをらまろび寄りて、きぬ引きあぐるに、そら寐したるこそいとねたけれ。「なほこそこはがり給はめ」などうちいひたるよ。

八十三段

かたはらいたきもの　客人などにあひて物いふに、奥の方にうち解けごと人のいふを、制せで聞くこゝち。思ふ人のいたく酔ひて、おなじことしたる。聞き居たるをも知らで、人のうへいひたる。それは何ばかりならぬつかひ人なれど、かたはらいたし。旅だちたる所、近き所などにて、下衆どものされかはしたる。にくげなるちごを、おのれが心ちに、かなしと思ふまゝに、うつくしみ遊ばし、これが聲のまねにて、いひける事など語りたる。才ある人の前にて、才なき人の、物おぼえ顏に、人の名などいひたる。殊によしとも覺えぬわが歌を、人に語りきかせて、人の譽めし事などいふも、かたはらいたし。人の起きて物語などするかたはらに、あさましう打ちとけて寐たる人。まだねも彈きとゝ

○住まぬ堺―娘の許にこぬ壻。
○おほのか―大やう。
○どう取られたる―相手によき目を出されて、續けて筒を取られたるをいふ。筒は雙六の賽を入れて振る具。
○のり弓―賭弓。正月十八日に天皇弓場殿にて、左右近衛の かけ弓を覽給ふ。又臨時に殿上人の行ふもあり。

のへぬ琴を、心一つやりて、さやうの方知りたる人の前にて彈く。いととう住まぬ壻の、さるべき所にて舅に逢ひたる。

八十四段

あさましきもの　さし櫛みがくほどに、物にさへて折れたる。車のうちかへされたる。さるおほのかなる物は、ところせく久しくなどやあらむとこそ思ひしか。たゞ夢の心ちして、あさましうあやなし。人の爲にはづかしき事、つゝみもなく、ちごも大人もいひたる。必ずきなむと思ふ人を待ちあかして、曉がたに、只いさゝか忘れて寢入りたるに、烏のいと近く、かうと鳴くに、うち見あげたれば、晝になりたる、いとあさまし。てうばみに、どう取られたる。むげに知らず見ず聞かぬ事を、人のさし向ひて、あらがはすべくもなくいひたる。物うちこぼしたるもあさまし。のり弓に、わなゝく〳〵久しうありて、はづしたる矢のもて離れて、こと方へ行きたる。

八十五段

くちをしきもの　五節、佛名に雪ふらで、雨のかきくらし降りたる。節會、さるべき折の、御物忌にあたりたる。いとなみいつしかと思ひたる事の、さはる事

○いみじうする人―甚だ寵愛する人。
○こぼれ出でて―衣裳など、車外にはみ出して。
○すきゞし―好事なるをいふ。
○五月の御さうじ―五月は精進月なり。
○二間―多く神佛の臨時の祭祀などに用ゐる間。
○賀茂の奥―京都の上賀茂の附近。

いで來て俄にとまりたる。いみじうする人の、子うまで年頃具したる。遊をもし、見すべき事もあるに、必ずきなむと思ひて、呼びに遣りつる人の「さはる事ありて」などいひてこぬくちをし。男も女も宮仕所より、おなじやうなる人もろ共に、寺へまうで物へも行くに、好もしうこぼれ出でて、用意はげしからず、あまり見苦しとも見つべくはあらぬに、さるべき人の、馬にても車にても、行きあひ見ずなりぬる、いとくちをし。わびては、すきゞしからむ下衆などにても、人に語りつべからむにてもがなと思ふも、けしからぬなめりかし。

八十六段

五月の御さうじのほど、職におはしますに、塗籠の前、二間なる所を、殊にしつらひしたれば、例ざまならぬもをかし。朔日より雨がちにて曇りくらす。「つれ〴〵なるを、時鳥の聲尋ねありかばや」といふを聞きて、われも〳〵と出でたつ。賀茂の奥に、なにがしとかや、棚機の渡る橋にはあらで、にくき名ぞ聞えし。「そのあたりになむ、日ごとに鳴く」と人のいへば、「それは蜩なり」といらふる人もあり。そこへとて、五日のあした、宮づかさに、車の事いひて、北の陣より、さみだれはとがめなきものぞとて、さし寄せて、四人ばかりぞ乘り

て行く。羨ましがりて、「今一つして同じくは」などいへど、「いな」と仰せらるれば、聞きも入れず、なさけなきさまにて行くに、馬場といふ所にて、人多くさわぐ。「何事するぞ」と問へば、「手つがひにて眞弓射るなり。しばし御覽じておはしませ」とて、車とゞめたり。「左近の中少將、皆着き給へる」といへど、さる人も見えず。六位などの立ちさまよへば、「ゆかしからぬことぞ。はやく過ぎよ」とて、行きもて行けば、道も祭のころ思ひ出でられてをかし。

かういく所には、明順の朝臣の家あり。「そこもやがて見む」といひて、車寄せておりぬ。田舍だち事そぎて、馬のかた書きたる障子、網代屏風、みくりのすだれなど、ことさらに昔の事をうつし出でたり。屋のさまもはかなだちて、はし近くあさはかなれどをかしきに、げにぞかしがましと思ふばかりに、鳴きあひたる時鳥の聲を、くちをしう御前に聞し召させず、さばかり慕ひつる人々にもなど思ふ。「所につけては、かゝる事をなむ見るべき」とて、稻といふもの多く取り出でて、若き女どものきたなげならぬ、そのあたりの家の下衆女などひきゐて來て、五六人してこかせ、見も知らぬくるべきもの、二人してひかせて。歌うたはせなどするを、珍しくて笑ふに、時鳥の歌詠まむなどしつる、忘れ

○馬場―左近の馬場にて、京の一條西洞院にありき。
○手つがひにて云云―射手を左右に番はせて、競射せしむるなり。
○左近の中少將云云―左近の手つがひは、五月三日となり。同五日とあり。
○明順―高階氏。中宮の御叔父。
○みくりの簾―三稜草の莖にて編める簾。
○くるべき物―くるゝ廻る物。こは引白をいへる也。

ぬべし。唐繪にあるやうなる懸盤などして、物くはせたるを、見入るゝ人なければ、家あるじ、「いとわろくひなびたり。かゝる所に來ぬる人は、ようせずは、あるじなど責めいだしてこそ參るべけれ。むげにかくては、その人ならず」などいひて取りはやし、「この下蕨は、手づから摘みつる」などいへば、「いかで、女官などのやうに、つき並みてはあらむ」などいへば、「取りおろして。例のはひぶしにならはせ給へる御前達なれば」とて、取りおろしまかなひ騷ぐほどに、「雨降りぬべし」といへば、いそぎて車に乘るに、「さてこの歌は、こゝにてこそ詠まめ」といへば、「さばれ道にても」などいひて、卯の花いみじく咲きたるを折りつゝ、車のすだれそばなどに、長き枝を葺き挿したれば、たゞ卯の花がさねを、こしに懸けたるやうにぞ見えける。供なるをのこども、いみじう笑ひつゝ、網代をさへつき穿ちつゝ、こゝまだしまだしと插し集むなり。「人も逢はなむ」と思ふに、更にあやしき法師、あやしのいふかひなき者のみ、たまさかに見ゆる、いとくちをし。

近う來ぬれば、さりともいとかうてやまむやは、この車のさまをだに、人に語らせてこそやまめとて、一條殿の許にとゞめて、「侍從殿やおはす。時鳥の聲聞

○その人―都より來れる人。
○女官―下臈の女官吏。
○ひぶし―這伏。女房の主人の前に出でたる時の居ずまひなり。
○この歌―時鳥の歌をさす。
○こし―輿。車體をいふ。
○人も逢はなむ―拾遺集に伊勢「ちりちらず聞かまほしきを古里の花見てかへる人もあはなむ」。
○近う―御所近く。
○一條殿―太政大臣藤原爲光の遺族の住める家。
○侍從殿―藤原公信。爲光の末子にて、齊信の弟。

○さぶらひ―侍の間。

○土御門―上東門のこと。土屏の切れたる處に門柱を立て、屋根なし。

きて、今なむ歸り侍る」といはせたる。「侍從『只今まゐる。あが君〳〵』となむの給へる。さぶらひにまひろげて、指貫奉りつ」といふに、待つべきにもあらずとて、走らせて、土御門ざまへやらするに、いつのまにか、裝束しつらむ、帶は道のまゝにゆひて、「侍從しばし〳〵」と追ひくる。供に、侍、雜色、物はかで走るめる。「とくやれ」と、いとゞ急がして、土御門にきつきぬるにぞ、あへぎ惑ひておはして、まづこの車のさまを、いみじく笑ひ給ふ。「侍從うつゝの人の乘りたるとなむ更に見えぬ。なほおりて見よ」など笑ひ給へば、供なりつる人どもも興じ笑ふ。「侍從歌はいかにか。それ聞かむ」との給へば、「濟今御前に御覽ぜさせてこそは」などいふ程に、雨まことに降りぬ。「侍從などか、こと御門のやうにあらで、この土御門しも、うへもなく造りそめけむと、今日こそいとにくけれ」などいひて、「侍從いかで歸らむずらむ。こなたざまは、たゞ後れじと思ひつるに、人目も知らず走られつるを、あゝ、いかむこそいとすさまじけれ」との給へば、「濟いざ給へかし、うちへ」などいふ。「侍從それも烏帽子にてはいかでか」、「濟取りに遣り給へ」などいふに、まめやかに降れば、笠なきをのこども、只ひきにひき入れつ。一條よりかさをもてきたるをさゝせて、うち見返りうち見返り、この度はゆる〳〵と物う

○ゐじ―怨じの字音便。

○うへ人―殿上人。

○ぎしき―儀式だつをいふ。

○卯の花の薄樣―表白裏青の薄樣紙。

○かみの事申しに―雷鳴の御見舞に。

げにて、卯の花ばかりを取りおはするもをかし。

さて參りたれば、ありさまなど問はせ給ふ。うらみつる人々、ゐじ心うがりながら、藤侍從、一條の大路走りつるほど語るにぞ、皆笑ひぬる。「宮さていづら、歌は」と問はせ給ふ。かう〳〵と啓すれば、「宮くちをしの事や。うへ人などの聞かむに、いかでかをかしきなくてあらむ。その聞きつらむ所にて、ふとこそ詠ましか。あまりぎしき、事醒めつらむぞあやしきや。こゝにても詠め。いふかひなし」などの給はすれば、げにと思ふに、いとわびしきを、いひ合はせなどする程に、藤侍從の、ありつる卯の花につけて、卯の花の薄樣に、

ほとゝぎすなく音たづねに君ゆくと聞かば心をそへもしてまし。

返し待つらむなど、局へ硯とりに遣れば、「宮只これしてとくいへ」とて、御硯の蓋に、紙など入れて賜はせたれば、「濟宰相の君書き給へ」といふを、「宰相なほそこに」などいふほどに、かきくらし雨降りて、かみもおどろ〳〵しく鳴りたれば、物も覺えず、只おそろしきに、御格子まゐり渡しまどひし程に、歌のかへりごとも忘れぬ。いと久しく鳴りて、少しやむ程は暗くなりぬ。只今なほその御かへりごと奉らむとて、取りかゝる程に、人々、上達部など、かみの事申しに參

○知らめ―返歌の事は處置すべしと也。
○すくせ―宿世の字音。
○うじて―戯して音字便。
○物しげ氣に―不機嫌に。

り給ひつれば、西おもてに出でて、物など聞ゆる程にまぎれぬ。人はた、さして得たらむ人こそ知らめとて止みぬ。大方この事にすくせなき日なりとうじて、「清今はいかで、さなむいきたりしとだに、人に聞かせじ」などぞ笑ふを、「宮今もなど、それいきたりし人どものいはざらむ。されども、させじと思ふにこそあらめ」と、物しげに思し召したるも、いとをかし。「清されど、今はすさまじくなりにて侍るなり」と申す。「清すさまじかるべき事かは」などの給はせしかど、さてやみにき。

二日ばかりありて、その日の事などいひ出づるに、宰相の君、「いかにぞ、手づから折りたるといひし下蕨は」との給ふを聞かせ給ひて、「宮思ひ出づることのさまよ」と笑はせ給ひて、紙の散りたるに、

したわらびこそ戀しかりけれ。

と書かせ給ひて、「本いへ」と仰せらるゝもをかし。

ほとゝぎすたづねて聞きし聲よりも。

と書きて參らせたれば、「宮いみじううけばりたりや。かうまでだに、いかで時鳥の事をかけつらむ」と笑はせ給ふも恥かしながら、「清何か。この歌すべて詠み侍らじとなむ思ひ侍るものを。物の折など人の詠み侍るにも、『詠め』など仰せらるれば、えさぶらふまじき心ちなむし侍る。いかでかは、文字の數知らず。春は冬の歌をよみ、秋は春のをよみ、梅の折は菊などをよむ事は侍らむ。されど、歌詠むといはれ侍りし末々は、すこし人にまさりて、『その折の歌はこれこそありけれ。さはいへど、それが子なれば』などいはれたらむこそ、かひあるこゝちし侍らめ。つゆ取り分きたる方もなくて、さすがに歌がましく、我はと思へるさまに、さいそに詠み出で侍らむなむ、なき人の爲いとほしく侍る」などまめやかに啓すれば、笑はせ給ひて、「宮さらば、たゞ心にまかす。我は詠めともいはじ」との給はすれば、いと心やすくなりぬ。

「今は歌の事、思ひかけ侍らじ」などいひてある頃、庚申せさせ給ひて、内の大臣殿、いみじう心まうけせさせ給へり。夜うち更くるほどに、題いだして、女房に歌詠ませ給へば、皆けしきだちゆるがしいだすに、宮の御前に近くさぶらひて、物啓しなど、こと事をのみいふを、大臣御覽じて、「などか歌は詠まで離れ居たる。題取れ」との給ふを、「清さる事承りて、歌詠むまじくなりて侍れば、思ひかけ侍らず」、「大臣ことやうなる事。まことにさる事やはある。などかは許させ

○歌詠むと云々―清少納言の父元輔、曾祖父深養父、ともに歌人なり。
○さいそ―最初の字音。
○庚申せさせ―庚申待をし給ふ。
○内大臣―伊周。

給ふ。いとあるまじき事なり。よしこと時は知らず、今宵は詠め」など責めさせ給へど、けぎよう聞きも入れでさぶらふに、こと人ども詠みいだして、よしあしなど定めらるゝ程に、いさゝかなる御文を書きて賜はせたり。あけて見れば、

「宮元輔がのちといはるゝ君しもやこよひの歌にはづれてはをる。

とあるを見るに、をかしき事ぞたぐひなきや。いみじく笑へば、「何事ぞ〳〵」と、大臣もの給ふ。

「清その人の後といはれぬ身なりせばこよひの歌はまづぞよまましし。

つゝむ事さぶらはずば、千歌なりとも、これよりぞ出でまうで來まし」と啓しつ。

八十七段

御かたぐ、君達、うへ人など、御前に人多くさぶらへば、廂の柱に寄りかゝりて、女房と物語して居たるに、物を投げ賜はせたる、あけて見れば、「宮思ふべしやいなや。第一ならずばいかゞ」と書かせ給へり。御前にて物語などするついでにも、「清すべて人には、一に思はれずば、さらに何にかせむ。只いみじう憎まれ、あしうせられてあらむ。二三にては、死ぬともあらじ。一にてをあらむ」などいへば、「一乘の法なり」と、人々笑ふことのすぢなめり。筆紙賜はりたれば、「九品蓮臺の中には、下品といふとも」と書きて參らせたれば、「宮むげに思ひくんじにけり。いとわろし。いひそめつる事は、さてこそあらめ」との給はすれば、「清人に隨ひてこそ」と申す。「宮それがわろきぞかし。第一の人に、又一に思はれむとこそ思はめ」と仰せらるゝも、いとをかし。

八十八段

中納言殿參らせ給ひて、御扇たてまつらせ給ふに、「隆家こそいみじき骨を得て侍れ。それを張らせて參らせむとするを、おぼろげの紙は張るまじければ、もとめ侍るなり」と申し給ふ。「宮いかやうなるにかある」と問ひ聞えさせ給へば、「隆家すべていみじく侍り。『更にまだ見ぬ骨のさまなり』となむ人々申す。まことにかばかりのは侍らざりつ」と、言高く申し給へば、「清さては扇のにはあらで、海月のなり」と聞ゆれば、「隆家これは隆家が言にしてむ」とて笑ひ給ふ。かやうの事こそ、かたはらいたき物のうちに入れつべけれど、「ひと事な落しそ」といへば、いかゞはせむ。

○一乘の法なり―法華經方便品に「十方佛土中、唯有二一乘法一、無二二亦無三」。
○九品蓮臺の中には―朗詠集に保胤「十方佛土之中、以二西方一爲望、九品蓮臺之間、雖二下品一應レ足」。
○くんじ―風しの音便。
○中納言殿―藤原隆家。中宮の御弟。
○おぼろげの―並一とほりの。

○信經―藤原氏。
○ふびん―不便の字音。
○せんぞく料―褥は卽ち餞寮なり。それに洗足たいひかけたり。
○おほぎさいの宮―皇太后にて、村上の皇后藤原安子をさす。
○かたき―敵手。

八十九段

雨のうちはへ降るころ、今日も降るに、御使にて、式部のぞう信經參りたり。例の褥さし出したるを、常よりも遠くおし遣りて居たれば、「清あれは誰が料ぞ」といへば、笑ひて、「信經かゝる雨にのぼり侍らば、足がたつきて、いとふびんに、きたなげになり侍りなむ」といへば、「清など。せんぞく料にこそはならめ」といふを、「信經これは御前に、かしこう仰せらるゝにはあらず。信經が足がたの事を申さざらましかば、えの給はざらまし」とて、返す〴〵いひしこそをかしかりしか。あまりなる御身ぼめかなとかたはらいたく、「清はやうおほぎさいの宮に、ゑぬたぎといひて、名高き下仕なむありける。美濃の守にてうせにける藤原のときから、藏人なりける時、下仕どもある所に立ち寄りて、『これやこの高名のゑぬたぎ。などさも見えぬ』といひける返事に、『それは時柄に、さも見ゆる名なり』といひたりけるなむ、かたきにえりても、いかでかさる事はあらむと、殿上人、上達部までも、興ある事にの給ひける。又、さりけるなめり、今までかくいひ傳ふるは」と聞えたり。「信經それまた、時柄がいはせたるなり。すべて題出しがらなむ、ふみも歌もかしこき」といへば、「清げにさる事あることなり。さらば題いださむ、歌よみ給へ」といふに、「信經いとよき事。一つはなにせむ。同じうはあまたを仕うまつらむ」などいふほどに、御題は出でぬれば、「信經あなおそろし。まかりいでぬ」とて立ちぬ。「人々手もいみじう、まなもかんなもあしう書くを、人も笑ひなどすれば、かくしてなむある」といふもをかし。

○まなもかんなも―眞名卽ち漢字も、假名もとなり。
○作物所―禁中の調度をつくり、諸細工をなす。
○別當―信經がなり。
○淑景舍―女御藤原原子。春宮は居貞親王、のちに卽位ありて、三條天皇と申す。
○正月―長德元年のなり。
○登華殿―後宮の一殿にして、弘徽殿の北にあり。

作物所の別當するころ、誰が許にやりけるにかあらむ。物の繪樣やるとて、「これがやうに仕るべし」と書きたるまんなのやう、世にしらず、文字のあやしきを見つけて、それがかたはらに、「これがまゝに仕うまつらば、ことやうにこそあるべけれ」とて、殿上にやりたれば、人々取りて見て、いみじう笑ひけるに、大腹だちてこそ怨みしか。

九十段

淑景舍春宮にまゐり給ふほどの事など、いかゞは、めでたからぬ事なし。正月十日にまゐり給ひて、宮の御方に、御文などはしげう通へど、御對面などはなきを、二月十日、宮の御方に渡り給ふべき御消息あれば、常よりも御しつらひ心ことにみがきつくろひ、女房なども、皆用意したり。夜中ばかりに渡らせ給ひしかば、いくばくもなくて明けぬ。登華殿のひんがしの二間に、御しつらひ

○殿―道隆公。うへ―高階貴子。中宮及び淑景舎の父母。

○積善寺供養の日―正暦五年二月二十日なり。積善寺は、二條の法興院中にあり。

○固紋、浮紋―綾の文をしづめて固くく織りたるが固紋、絲を浮めて織りたるが浮紋。

○ことよさ人―他のよき人。

はしたり。つとめて、いととく御格子まゐりわたして、あかつき、殿、うへ、ひとつ御車にて參り給ひにけり。宮は御曹司の南に、四尺の屏風西東に隔てて、北向に立てて、御畳、褥うち置きて、御火桶ばかり參りたり。御屏風の南、御帳の前に、女房いと多くさぶらふ。

こなたにて御髪などまゐる程など、「宮淑景舎は見奉りしや」と問はせ給へば、「濟まだいかでか。積善寺供養の日、御うしろをわづかに」と聞ゆれば、「宮その柱と屏風とのもとによりて、我がうしろより見よ。いとうつくしき君ぞ」との給はすれば、うれしくゆかしさまさりて、いつしかと思ふ。紅梅の固紋、浮紋の御衣ども、紅の打ちたる御衣一重がうへに、たゞ引き重ねて奉りたるに、「宮紅梅には濃ききぬこそをかしけれ。今は紅梅は着でもありぬべし。されど萌黄などのにくければ。紅にはあはぬなり」との給はすれど、只いとめでたく見えさせ給ふ。

奉りたる御衣に、やがて御かたちのにほひ合はせ給ふぞ、尙ことよき人も、かくやおはしますらむとぞゆかしき。さてゐざり出でさせ給ひぬれば、やがて御屏風に添ひつきてのぞくを、「惡しかめり。うしろめたきわざ」と、聞えごつ人々も、いとをかし。御障子の廣うあきたれば、いとよく見ゆ。うへは白き御衣ど

○薄色―薄紫色。

○御紐さして―直衣の入紐をさすなり。

○かの御かた―淑景舎の女御の御手水をさす。

○宣耀殿貞觀殿を―淑景舎より、登華殿までの間に、この二殿あり。

○かう庇―唐風の庇にて、屋根を反らせたる造。

○こなたの廊―貞觀殿に通ずる反渡殿。

○萌黄紅梅―下著の色なり。

○北野の三位―菅原輔正。道眞の曾孫にて參議に至る。

も、紅の張りたる二つばかり、女房の裳なめり、引きかけて、奥によりて、東面におはすれば、たゞ御衣などぞ見ゆる。淑景舎は北にすこしよりて、南向におはす。紅梅どもあまた濃く薄くて、濃きあやの御衣、すこしあかき蘇枋の織物の袿、萌黄の固紋の、わかやかなる御衣奉りて、扇をつとさし隱し給へり。いとい みじく、げにめでたく美しと見え給ふ。殿は薄色の直衣、萌黄の織物の御指貫、紅の御衣ども、御紐さして、廂の柱にうしろをあてて、こなたざまに向きておはします。めでたき御有様どもをうちゑみて、例のたはぶれ言をせさせ給ふ。淑景舎の、繪にかきたるやうに美しげにて居させ給へるに、宮いとやすらかに、今すこしおとなびさせ給へる御けしきの、紅の御衣ににほひ合はせ給ひて、なほたぐひはいかでかと見えさせ給ふ。

御手水まゐる。かの御かたは、宣耀殿、貞觀殿を通りて、童二人、下仕四人してもてまゐるめり。から庇のこなたの廊にぞ、女房六人ばかりさぶらふ。せばしとて、かたへは御おくりして、皆歸りにけり。櫻の汗衫、萌黄、紅梅などいみじく、汗衫長くしり引きて、取り次ぎまゐらす、いとなまめかし。織物の唐衣どもこぼれ出でて、すけまさの馬頭のむすめ少將の君、北野の三位のむすめ宰相の

○番の采女―番は當番、采女はもひ取の采女。

○藏人(ニヨ)藏人ども―女ども。

○かすみのまより―古今集「山櫻霞のまよりほのかにも見てし人こそこひしかりけれ」。一本「かのすみのまより」とあり。

○あなたにも―淑景舍の方にも。

○さるがう言―散樂言。冗談口のこと。

○大納言殿―伊周。

○三位中將―隆家。

○松君―伊周の子。のちに道雅といふ。

○日の御裝束―束帯。禮服なり。

○下襲など云々―裾を曳きたるをいふ。

君などぞ近くはある。あなをかしと見るほどに、この御かたの御手水、番の采女、青摺の唐衣、裙帶、領巾などして、おもてなどいと白くて、下仕など取り次ぎて參るほど、これはたおほやけしう、唐めきてをかし。御膳のをりになりて、みぐしあげまゐりて、藏人ども、まかなひの髪ゆげて參らするほどに、隔てたりつる屏風も押しあけつれば、かいま見の人、かくれ蓑取られたる心ちして、飽かずわびしければ、御簾と几帳との中にて、柱のもとよりぞ見奉る。衣の裾裳などは、皆御簾のそとに押し出されたれば、殿のはしのかたより御覽じ出して、「誰ぞや、かすみの間より見ゆるは」と咎めさせ給ふに、「少納言が、物ゆかしがりて侍るならむ」と申させ給へば、「あなはづかし。彼はふるき得意を。いとにくげなるむすめども持ちたりともこそ見侍れ」などの給ふ御けしき、いとしたり顔なり。あなたにも御膳まゐる。「羨ましく、かたがたのは、皆參りぬめり。とくきこしめして、おきな、をんなにおろしをだに給へ」など、只日ひと日、さるがう言をし給ふほどに、大納言殿、三位中將、松君もゐて參り給へり。殿いつしかといだき取り給ひて、膝にする給へる、いとうつくし。せばき緣に、所せき日の御裝束の下襲など引きちらされたり。大納言殿はもの〳〵しう清げに、中將殿はらう〳〵じう、いづれもめでたきを見奉るに、殿をばさるものにて、うへの御すくせこそめでたけれ。御圓座など聞え給へど、「陣につき侍らむ」とて、いそぎ立ち給ひぬ。

しばしありて、式部の丞なにがしとかや、御使に參りたれば、御膳宿の北によりたる間に、褥さし出でてするたり。御かへりは、今日はとく出させ給ひつ。まだ褥も取り入れぬほどに、東宮の御使に、周頼の少將まゐりたり。御文とり入れて、殿、うへ、宮など御覽じわたす。「御返ごとはや」などあれど、とみにも聞え給はぬを、「なにがしが見侍れば書き給はぬなめり。さらぬをりは間もなく、これよりぞ聞え給ふなる」など申し給へば、御おもてはすこし赤みながら、少しうちほゝゑみ給へる、いとめでたし。「とく」など、うへも聞え給へば、奥ざまに向きて書かせ給ふ。うへ近く寄り給ひて、もろ共に書かせ奉り給へば、いとゞつゝましげなり。宮の御かたより、萌黄の織物の小褂、袴押し出されたれば、三位中將かづけ給ふ。くるしげに思ひて立ちぬ。松君のをかしう物の給ふを、誰も〳〵うつくしがり聞え給ふ。「宮の御子たちとて引き出でたらむに、わ

○すくせ―宿世の字音。

○いそぎたち給ひぬ―伊周隆家等がなり。

○周頼―道隆の子、伊周等の弟。

○今までさる事の―中宮の當時いまだ御懐孕の事なき故にいふ。
○入らせ給へば―主上がなり。
○山の井の大納言―道隆の長子。道頼。
○御うちぎ參らせ―裝束をとゝのふるをいふ。
○この大納言―伊周。
○内藏頭―頼親。道隆の子。周頼の兄。

ろくは侍らじかし」などの給はするを、げになどか、今までさる事のとぞ心もとなき。

未の時ばかりに、「莚道まゐる」といふほどもなく、うちそよめき入らせ給へば、宮もこなたに寄らせ給ひぬ。やがて御帳に入らせ給ひぬれば、女房南おもてにそよめき出でぬめり。廊に殿上人、いと多かり。殿の御前に宮司召して、菓子肴めさす。「殿人々醉はせ」などおほせらる。まことに皆ゑひて、女房と物いひかはすほど、かたみにをかしと思ひたり。日の入るほどに起きさせ給ひて、山の井の大納言召し入れて、御うちぎまゐらせ給ひて、歸らせ給ふ。櫻の御直衣に、紅の御衣のゆふばえなども、かしこければとゞめつ。山の井の大納言は、入りたゝぬ御せうとにても、いとよくおはすかし。匂ひやかなる方は、この大納言にもまさり給へるものを、世の人は、せちにいひおとし聞ゆるこそいとほしけれ。殿、大納言、山の井の大納言、三位中將、内藏の頭など、皆さぶらひ給ふ。宮のぼらせ給ふべき御使にて、馬の内侍のすけ參り給へり。「宮こよひはえ」などしぶらせ給ふを、殿聞かせ給ひて、「いとあるまじき事、はやのぼらせ給へ」と申させ給ふに、又、春宮の御使しきりにあるほど、いとさわがし。御むかへに、女房、春宮のなども參りて、「とく」とそゝのかし聞ゆ。「さづさば、かの君わたし聞え給ひて」との給はすれば、「淑景舍さりともいかでか」とあるを、「宮なほみおくり聞えむ」などの給はするほど、いとをかしうめでたし。「さらば遠きをさきに」とて、まづ淑景舍わたり給ひて、殿など歸らせ給ひてぞのぼらせ給ふ。道のほども、殿の御さるがう言に、いみじく笑ひて、ほと〳〵うち橋よりも落ちぬべし。

○ほと〳〵―危く。
●只はやく落ちにけり―紀長谷雄の詩に「大瘦嶺之梅早落、誰問ニ粉粧一」。
○公任―藤原氏。關白頼忠の子。官大納言に至る。詩歌管絃に長ぜし才人。

九十一段

殿上より、梅の花の、皆散りたる枝を、「これはいかに」といひたるに、「清只はやく落ちにけり」といらへたれば、その詩を誦して、黒戸に殿上人、いと多く居たるを、うへの御前聞かせおはしまして、「よろしき歌など詠みたらむよりも、かゝる事はまさりたりかし。よういらへたり」と仰せらる。

二月のつごもり、風いたく吹きて、空いみじく黒きに、雪すこしうち降りたるほど、黒戸に主殿司きて、「かうしてさぶらふ」といへば、よりたるに、「公任の宰相殿の」とあるを見れば、ふところ紙に、たゞ、

すこし春あるこゝちこそすれ。

○事なしびに―事もなげになほさりに、

○俊賢―源氏。左大臣高明の子。

○左兵衛督―藤原實成。

○半臂―束帯の時、袍と下襲との間に着る袖無しの胴著。その附紐長さ一丈二尺に及ぶ。

○大般若經―大般若波羅蜜多經の略。

とあるは、げに今日のけしきに、いとよくあひたるを、これが本は、いかゞつくべからむと思ひ煩ひぬ。「誰々か」と問へば、「それ〳〵」といふに、皆はづかしき中に、宰相の御いらへをば、いかゞことなしびにいひ出でむと、心ひとつに苦しきを、御前に御覽せさせむとすれども、うへのおはしましておほとのごもりたり。主殿司は、「とく〳〵」といふ。げに遲くさへあらむは、取りどころなければ、さればとて、

そらさむみ花にまがへてちる雪に。

と、わなゝく〳〵書きて取らせて、いかゞ見給ふらむと思ふもわびし。これが事を聞かばやと思ふに、そしられたらば聞かじと覺ゆるを、「俊賢の宰相など、『なほ内侍に申してなさむ』と定め給ひし」とばかりぞ、左兵衛督の中將にておはせしが語り給ひし。

九十二段

はるかなるもの　千日の精進はじむる日、半臂の緒ひねりはじむる日。みちの國へゆく人の、逢坂の關こゆるほど。うまれたるちごの、大人になるほど。大般若經御讀經、一人して讀み始むる。十二年の山ごもりの、始めてのぼる日。

一切空の深義を說けるものにて、六百卷あり。般若は聖智と譯す。

○方弘―前出。

○あたり―方弘の妻をさす。

○女院―東三條の院藤原詮子。

○院の殿上人―女院の殿上ゆるされたる人。

九十三段

方弘は、いみじく人に笑はるゝものかな。親などいかに聞くらむ。供にありくものども、いと人々しきを呼びよせて、「何しにかゝる者に使はるゝぞ。いかゞ覺ゆる」など笑ふ。物いとよくするあたりにて、下襲の色、うへのきぬなども、人よりはよくて着たるを、「女房これはこと人に着せばや」などいふに、げにぞ詞づかひなどのあやしき。里に宿直物取りにやるに、「方弘をのこ二人まかれ」といふに、「男一人して取りにまかりなむものを」といふに、「方弘あやしの男や。一人して二人の物をば、いかでもつべきぞ。一升瓶に、二升は入るや」といふを、なでふ事と知る人はなけれど、いみじう笑ふ。人の使のきて、「御返ごととく」といふを、「方弘あなにくの男や。竈に豆やくべたる」、「この殿上の墨筆は、何者の盗みかくしたるぞ。飯、酒ならばこそほしうして、人の盗まめ」といふを、又わらふ。女院なやませ給ふとて、御使にまゐりて歸りたるに、「院の殿上人は、誰々かありつる」と人の問へば、「方弘それかれ」など四五人ばかりいふに、「又は」と問へば、「さてはいぬる人どもぞありつる」といふを、また笑ふも、亦あやしき事にこそはあらめ。人間に寄りきて、「方弘わが君こそ。まづ物きこえむ。まづ〳〵人のの給へる

○除目の中の夜―縣召の除目の中の夜ならば、正月十二日なり。
○うちしき―打鋪。油のこぼれに汚さぬ爲の敷物。
○油單―布に油をひきたる物。
○襪―足衣。たび。
○頭―藏人頭。

事ぞ」といへば、「何事にか」とて、几帳のもとによりたれば、「むくろごめにより給へといふを、五體ごめにとなむいひつる」といひて、また笑ふ。除目の中の夜さし油するに、燈臺のうちしきを踏みて立てるに、新しき油單なれば、つようとらへられにけり。さし歩みて歸れば、やがて燈臺はたふれぬ。襪はうちしきにつきてゆくに、まことに道こそ震動したりしか。頭つき給はぬほどは、殿上の臺盤に人もつかず。それに方弘は、豆一盛を取りて、小障子のうしろにて、やをら食ひければ、ひきあらはして笑ふことぞ限なきや。

九十四段

關は　逢坂の關。須磨の關。鈴鹿の關。くきだの關。白川の關。衣の關。たゞこえの關は、はゞかりの關とたとしへなくこそ覺ゆれ。横ばしりの關。清見が關。みるめの關。よしなゝの關こそ、いかに思ひ返したるならむと、いと知らまほしけれ。それを勿來の關とはいふにやあらむ。逢坂などをまで思ひ返したらば、わびしからむかし。足柄の關。

九十五段

森は　大荒木の森。しのびの森。こゞゑの森。木枯の森。信太の森。生田の森。

○かうたて―神館か。
○淀のわたり―山城久世郡淀町邊の渡船。
○高瀬の淀―河内芦田郡。
○これを詠みける―六帖に「こも枕高瀬の淀にかるこものかるとも我はしらで頼まむ」。
○元三―正月元日をいふ。年のはじめ、月のはじめ、日のはじめなれば也。

うつきの森。きくたの森。岩瀬の森。立聞の森。常磐の森。くろつきの森。神南備の森。うたゝねの森。浮田の森。うゑつきの森。石田の森。かうたての森といふが、耳とゞまるこそあやしけれ。森などいふべくもあらず、たゞ一木あるを、何につけたるぞ。こひの森。木幡の森。

九十六段

卯月のつごもりに、長谷寺にまうづとて、淀のわたりといふを物せしかば、船に車をかき居ゑてゆくに、菖蒲、菰などの末みじかく見えしを、取らせたれば、いと長かりけり。菰積みたる船のありきしこそ、いみじうをかしかりしか。高瀬の淀には、これを詠みけるなめりと見えし。三日といふに歸るに、雨のいみじう降りしかば、菖蒲かるとて、笠のいとちひさきを着て、脛いとたかき男、童などのあるも、屏風の繪に、いとよく似たり。

九十七段

湯は　七久里の湯。有馬の湯。玉造の湯。

九十八段

常よりもことにきこゆるもの　元三の車のおと、鳥のこゑ。曉のしはぶき。物

の音はさらなり。

九十九段

繪にかきておとるもの　なでしこ。さくら。山吹。物語にめでたしといひたる男女のかたち。

百　段

かきまさりするもの　松の木。秋の野。山里。山路。鶴。鹿。冬はいみじくさむき。夏は世にしらずあつき。

百一段

あはれなるもの　孝ある人の子。鹿の音。よき男のわかきが御嶽精進したる、へだて居てうち行ひたる曉のぬかなど、いみじうあはれなり。むつましき人などの、目さまして聞くらむ思ひやり、まうづる程のありさま、いかならむとつゝしみたるに、平にまうで著きたるこそ、いとめでたけれ。烏帽子のさまなどぞ、すこし人わろき。なほいみじき人と聞ゆれど、こよなくやつれて詣づとこそは知りたるに、右衞門の佐宣方は、「あぢきなきことなり。たゞ清ききぬを着てまうでむに、なでふ事かあらむ。必ずよも『あしくてよ』と、御嶽の給はじ」とて、

○ぬか—禮拜。

○人わろき—體裁わるき。

○宣方—左大臣源重信の子。

○御嶽—御嶽の本尊藏王菩薩をさす。

三月晦日に、紫のいと濃き指貫、しろき襖、山吹のいみじくおどろ〳〵しきなどにて、隆光が主殿の亮なるは、青色の襖、摺りもどろかしたる水干袴にて、うち績き詣でたりけるに、歸る人も詣づる人も、珍しくあやしき事に、すべてこの山道に、かゝる姿の人見えざりつとあさましがりしを、四月晦日に歸りて、六月十餘日のほどに、筑前の守失せにし代になりにしこそ、げにいひけむにたがはずもと聞えしか。これはあはれなる事にはあらねど、御嶽のついでなり。

九月三十日、十月一日のほどに、只あるかなきかに聞きつけたるきり〴〵すの聲。鷄の子いだきて伏したる。秋ふかき庭の淺茅に、露のいろ〳〵玉のやうにて光りたる。川竹の風に吹かれたる夕ぐれ。曉に目醒したる。夜などもすべて。思ひかはしたる若き人の中に、せくかたありて、心にしもまかせぬ。山里の雪。男も女も清げなるが、黑ききぬ着たる。二十六七日ばかりの曉に、物語して居明して見れば、あるかなきかに心ぼそげなる月の、山の端ちかく見えたるこそ、いとあはれなれ。秋の野。年うちすぐしたる僧たちの行したる。荒れたる家に葎生ひかゝり、蓬など高く生ひたる庭に、日の隈なくあかき。いとあらうはあらぬ風の吹きたる。

○襖—狩襖にて、狩衣におなじ。

○山吹—表は黃を主とし、裏は黃青紅などを用ゐる。

○隆光—藤原宣孝の長男。宣孝は紫式部の夫。

○摺りもどろかし—山藍にて、模樣を摺りつけたるをいふ。

○水干袴—水干を著る時にはく袴。水干は狩衣の一種。

○きりゝす—今のこほろぎなり。

○轉階―荒木の階段。

○倶舎の頌―世親菩薩作の倶舎論中に、四句一偈にて、六百頌あり。

○内外などゆるされ―内外共に立入ることを許され。

○家の子―一門の者にて、宗家に隨從する者の稱。

百二段

正月に寺に籠りたるは、いみじく寒く、雪がちに氷りたるこそをかしけれ。雨などの降りぬべき氣色なるは、いとわろし。初瀬などにまうでて、局などするほどは、轉階のもとに、車引きよせて立てたるに、帶ばかりしたる若き法師ばらの、あしだといふ物をはきて、いさゝかつゝみもなく下り上るとて、何ともなき經のはしうち讀み、倶舎の頌を、少しいひつゞけありくこそ、所につけてをかしけれ。わが上るはいとあやふく、傍によりて、高欄おさへてゆくものを、只板敷などのやうに思ひたるもをかし。

「局したり」などいひて、履どももてきておろす。きぬかへさまに引きかへしなどしたるもあり。裳、唐衣など、こはゝ〳〵しくさうぞきたるもあり。深履、半靴などはきて、廊のほどなど履ずり入るは、うちわたりめきて、又をかし。内外など許されたる若き男ども、家の子など、又立ちつゞきて、「そこもとはおちたる所に侍るめり。あがりたる」など教へゆく。何ものにかあらむ、いと近くさし歩み、さい立つ者などを、「しばし。人のおはしますに、かくはまじらぬわざなり」などいふを、げにとて、少し立ち後るゝもあり。又聞きも入れず、我

○犬防―内陣と外陣との隔にある格子。

○文を―願文を。

○禮盤―佛前の高座。導師などこれに座す。

○誓ふも―佛の本誓にすがりて、願するをいふ。

○千燈の御志は―佛に千燈を供養する御志は。これはなにがしの御爲まで、願文の文なり。

○なにがしの御爲―某の事の御爲。

○帶うちかけて―裝の掛帶を、肩に打掛けて。禮裝の趣なり。

○半挿―水を盛りて、物に注ぐ器。線の字を充つ。

まづとく、佛の御前にとゆくもあり。局にゆくほども、人の居並みたる前を通り行けば、いとうたてあるに、犬防の中を見入れたる心ち、いみじく尊く、などて月頃まうでずすぐしつらむとて、まづ心もおこさる。燈明常燈にはあらで、うちに、又人の獻りたる、おそろしきまで燃えたるに、佛のきら〳〵と見え給へる、いみじくたふとげに、手ごとに文を捧げて、禮盤にゐがはり〳〵誓ふも、さばかりゆすり滿ちて、これはと取り放ちて聞きわくべくもあらぬに、せめてしぼり出したる聲々の、さすがにまた紛れず。「千燈の御志は、なにがしの御ため」と、僅に聞ゆ。帶うちかけて拜み奉るに、「こゝにかうさぶらふ」といひて、榊の枝を折りてもてきたるなどの尊きなども、なほをかし。

犬防のかたより法師寄りきて、「いとよく申し侍りぬ。幾日ばかり籠らせ給ふべき」など問ふ。「しか〳〵の人こもらせ給へり」などいひ聞かせていぬるすなはち、火桶、菓物などもてきつゝ貸す。半挿に水など入れて、盥の手もなきなどあり。「御供の人はかの坊に」などいひて、呼びもて行けば、かはり〳〵ぞゆく。誦經の鐘のおと、わがなりと聞けば、たのもしく聞ゆ。傍によろしき男の、いと忍びやかに額などつく。立居のほども心あらむと聞えたるが、いたく

思ひ入りたる氣色にて、いも寢ず行ふこそ、いと哀なれ。うちやすむ程は、經高くは聞えぬほどに讀みたるも尊げなり。高くうち出させまはしきに、ましてはなどを、けざやかに聞きにくくはあらで、すこし忍びてかみたるは、何事を思ふらむ、かれをかなへばやとこそ覺ゆれ。日ごろ籠りたるに、晝は少しのどかにぞ、早うはありし。法師の坊に、をのこども童などゆきて、つれ〴〵なるに、只かたはらに、貝をいと高く、俄に吹き出したるこそおどろかるれ。清げなるたて文など持たせたる男の、誦經の物うち置きて、堂童子など呼ぶ聲は、山ひゞきあひて、きら〳〵しう聞ゆ。鐘の聲ひゞきまさりて、いづこならむと聞くほどに、やむごとなき所の名うちいひて、「御產たひらかに」など、敎化などしたる、すゞろにいかならむと、おぼつかなく念ぜらるゝ。これはたゞなる折の事なめり。

正月などには、只いと物さわがしく、物のぞみなどする人の、隙なくまうづる見るほどに、行もしやられず、日のうち暮るゝにまうづるは、籠る人なめり。小法師ばらの、もたぐべくもあらぬ屏風などの高き、いとよく進退し、疊などほうとたて置くと見れば、たゞ局に出でて、犬防に、簾をさら〳〵と懸くるさ

○貝—午時を報ずる法螺貝。
○堂童子—南都の寺々にては、下部侍を稱す。
○敎化したる—祈願したるの意。
○物のぞみ—正月の物望は、縣召の除目の競望が、その重なるものならん。

まなどぞいみじく、しつけたるは安げなり。そよ〳〵とあまた下りて、大人だちたる人のいやしからず、忍びやかなる御けはひにて、歸る人にやあらむ、「そのうちあやふし。火の事制せよ」などいふもあり。七つ八つばかりなる男兒の、愛敬づきをごりたる聲にて、さぶらひの人呼びつけ、物などいひたるけはひも、いとをかし。また三つばかりなるちごの寢おびれて、うちしはぶきたるけはひもうつくし。乳母の名、母などうち出でたらむにも、たれならむと、いと知らまほし。夜ひと夜いみじうのゝしり、行ひあかす。寢も入らざりつるを、後夜などはてて、少しうちやすみ寐ぬる耳に、その寺の佛經を、いとあら〳〵しう、高くうち出でて讀みたるに、わざと尊しともあらず。修行者だちたる法師のよむなめりと、ふとうち驚かれてあはれに聞ゆ。また、夜などは顏知らで、人々しき人の行ひたるが、青にびの指貫のはたばりたる、白き衣どもあまた着て、子どもなめりと見ゆる若きをのこの、をかしううちさうぞきたる、童などして、さぶらひの者どもあまたかしこまり、ねねうしたるもをかし。かりそめに屏風たてて、額などすこしつくめり。顏知らぬは誰ならむと、いとゆかし。知りたるは、さなめりと見るもをかし。若き人どもは、とかく局どもなどのわた

○後夜—晝夜六時の一にして、初夜に對す。午前一時半より四時までの間の稱。
○その寺の佛經—その寺の所依の佛經。卽ち本尊に緣ある經文。こゝは初瀨寺なれば本尊に緣ある觀音經なり。
○はたばり—巾廣き。
○ねねう—圓遲の字音。
○額などすこしつくめり—禮拜の態度なり。

りにさまよひて、佛の御かたに目見やり奉らず。別當など呼びて、打ちさゝめき物語して出でぬる。えせものとは見えずかし。

二月晦日、三月朔日ごろ、花盛に籠りたるもをかし。清げなるをのこどもの、忍ぶと見ゆる二三人、櫻、青柳などをかしうて、くゝりあげたる指貫の裾も、あてやかに見なさるゝ。つきづきしきをのこに、裝束をかしうしたる餌袋いだかせて、小舍人童ども、紅梅、萌黄の狩衣に、いろ〳〵のきぬ、摺りもどろかしたる袴など着せ、花など折らせて、侍めきて、ほそやかなる者など具して、金鼓うつこそをかしけれ。さぞかしと見ゆる人あれど、いかでかは知らむ。うち過ぎていぬるこそ。さすがにさうゞしけれ。「氣色を見せましものを」などいふもをかし。かやうにて、寺ごもり、すべて例ならぬ所に、使ふ人のかぎりしてあるは、かひなくこそ覺ゆれ。なほおなじ程にて、一つ心に、をかしき事も、さまざまいひ合はせつべき人、かならず一人二人、あまたもさそはまほし。そのある人の中にも。くち惜しからぬもあれども、目馴れたるなるべし。をのこなども、さ思ふにこそあめれ、わざと尋ね呼びもてありくめるは。

○青柳―表は白、裏は青。
○くゝりあげたる―指貫の裾は、緒をさし通して、括るやうに製す。
○餌袋―菓子飯など入るゝ袋。
○金鼓―鰐口。
○ある人―使はれて居る人。

百三段

○此の題目下文にも出でて、內容も、前半は「にくきもの」の中に見え、後半は下文の「重複せり。さては獨立の意義なければ、はぶくを至當とす。

こゝろづきなきもの　祭、御祓など、すべて男の見る物見車に、只一人乘りて見る人こそあれ。いかなる人にかあらむ、やむごとなからずとも、わかき男どもの物ゆかしと思ひたるなど、引きのせて見よかし。すきかげに唯一人かくよひて、心ひとつにまもり居たらむよ。いかばかり心せばく、けにくきならむとぞ覺ゆる。物へもいき、寺へもまうづる日の雨。つかふ人などの、「我をばおぼさず。某こそ只今時の人」などいふをほの聞きたる。人よりは少しにくしと思ふ人の、おしはかりごとうちし、すゞろなる物うらみし、われさかしがる。

○午未の時―正午より午後四時までの間。
○張むしろ―雨覆の具なり。車の上に莚を張る。
○かうぶりもひしげ―雨にぬれて、くた〳〵になれる樣なり。

百四段

わびしげに見ゆるもの　六七月の午未の時ばかりに、きたなげなる車にえせ牛かけて、ゆるがし行くもの。雨ふらぬ日張むしろしたる車。ふる日張むしろせぬも。年老いたる乞兒、いと寒きをりも、暑きにも。げす女のなりあしきが、子を負ひたる。ちひさき板屋の黑うきたなげなるが、雨にぬれたる。雨のいたくふる日、ちひさき馬に乘りて前驅したる人の、かうぶりもびしげ、袍も下襲もひとつになりたる、いかにわびしからむと見えたり。夏はされどよし。

百五段

○隨身の長―衛府の長におなじ。その狩襖は布なり。
○衲―糞掃衣ともいふ。種々の廢布をあつめて縫へる袈裟。またその樣式によれる袈裟。
○出居―朝廷にて儀式の時、庭上などに臨時に設くる座をいふ。
○阿闍梨―軌範の義。天台眞言宗におけるおもき僧職。
○夜居の僧―禁中等に祗候通夜して、加持する僧。

あつげなるもの　隨身の長の狩衣。衲の袈裟。出居の少將。いみじく肥えたる人の髪おほかる。琴の袋。六七月の修法の阿闍梨、日中の時など行ふ。又、おなじころの銅の鍛冶。

百六段

はづかしきもの　男の心のうち。いざとき夜居の僧。みそか盗人のさるべき隈に隠れ居て見るらむを、誰かは知らむ。暗きまぎれに、懐に物引き入るゝもあらむかし。それはおなじ心に、をかしとや思ふらむ。夜居の僧は、いとはづかしきものなり。若き人の集まりては、人のうへをいひ笑ひ、そしり惡みもするを、つくづくと聞き集むる、心のうちもはづかし。「あなうたて、かしがまし」など、御前ちかき人々の、物けしきばみいふを聞き入れず、いひ〳〵てのはては、うち解けてねぬる後もはづかし。男はうたて思ふさまならず、もどかしう心づきなき事ありと見れど、さし向ひたる人をすかし憑むるこそはづかしけれ。まして情あり、このましき人に知られたるなどは、おろかなりと思ふべくももてなさずかし。心のうちにのみもあらず、又皆、これが事はかれに語り、かれが事はこれにいひ聞かすべかめるを、わがことをば知らで、かく語るをば、こよな

○もどき―非難すること。
○むとく―無德の字音。俗の形ナシといふに近し。
○かづら―髪、入毛をいへり。
○よこたはれ―横倒れに同じ。
○かんがふる―勘當する。
○もとゞりはなち―素頭になるをいふ。
○狛犬しく―高麗樂の狛犬の舞めきて。獅子舞ならん。

きなめりと、思ひやすらむと思ふこそはづかしけれ。いであはれ、また逢はじと思ふ人に逢へば、心もなき者なめりと見えて、はづかしくもあらぬものぞかし。いみじく哀に、心苦しげに見すてがたき事などを、いさゝか何事とも思はぬも、いかなる心ぞとこそあさましけれ。さすがに人のうへをばもどき、物をいとよくいふよ。ことにたのもしき人もなき宮仕の人などをかたらひて、たゞにもあらずなりたる有樣などをも知らでやみぬるよ。

百七段

むとくなるもの　潮干の潟なる大きなる船。髪みじかき人の、かづらとりおろして髪けづるほど。大きなる木の風に吹きたふされて、根をさゝげてよこたはれふせる。相撲のまけて入るうしろ手。えせ者の從者かんがふる。翁のもとどりはなちたる。人の妻などの、すゞろなる物怨じして隠れたるを、必ず尋ねさわがむものをと思ひたるに、さしも思ひたらず、ねたげにもてなしたるに、さてもえ旅だち居たらねば、心と出できたる。狛犬しく舞ふものの、おもしろがりはやり出でてをどる足音。

○八幡の行幸―一條帝の山城石清水八幡宮への行幸。
○女院―東三條院。

修法は　佛眼眞言など讀み奉りたる、なまめかしうたふとし。

百九段

はしたなきもの　こと人を呼ぶに、われかとてさし出でたるもの。まして物取らする折はいと。おのづから人のうへなどうちいひ誘りなどもしたるを、をさなき人の聞き取りて、その人のある前にいひ出でたる。哀なる事など人のいひてうち泣くに、げにいと哀とは聞きながら、涙のふと出でこぬ、いとはしたなし。泣顔つくり、けしきことになせど、いとかひなし。めでたき事を聞くには、又すゞろに、只いできにこそ出でくれ。

八幡の行幸のかへらせ給ふに、女院の御棧敷のあなたに御輿をとゞめて、御消息申させ給ひしなど、いみじくめでたく、さばかりの御有様にて、かしこまり申させ給ふが、世に知らずいみじきに、まことにこぼるれば、化粧じたる顔も皆あらはれて、いかに見苦しかるらむ。宣旨の御使にて、齊信の宰相中將の御棧敷に參り給ひしこそ、いとをかしう見えしか。只隨身四人いみじうさうぞきたる、馬ぞひのほそうしたてたるばかりして、二條の大路廣う清らにめでたきに、馬をうちはやして急ぎ參りて、少し遠くよりおりて、そばの御簾の前にさぶら

○院の別當ぞ云々―院司の長官が取次ぎたりと也。
○關白殿―道隆。
○樞大納言殿―伊周。
○藤壺―飛香舍を稱す。後宮五舍の一。清涼殿の北、弘徽殿の西にあり。
○へい―壁。
○宮の大夫―中宮大夫。この時のは藤原道長。道隆の弟。

ひ給ひし、院の別當ぞ申し給ひし。御かへし承りて、又走らせ歸りまゐり給ひて、御輿のもとにて奏し給ひしほど、いふもおろかなりや。さてうち渡らせ給ふを、見奉らせ給ふらむ女院の御心、思ひやり參らするは、飛び立ちぬべくこそ覺えしか。それには、長泣をして笑はるゝぞかし。よろしききはの人だに、なほこの世にはめでたきものを、かうだに思ひ參らするもかしこしや。

百十段

關白殿の黑戸より出でさせ給ふとて、女房の廊にひまなくさぶらふを、「あないみじの御許たちや。翁をばいかにをこなりと笑ひ給ふらむ」と分け出でさせ給へば、戸口に人々の、いろ〳〵の袖口して、御簾を引き上げたるに、樓大納言殿、御沓取りてはかせ奉らせ給ふ。いとものゝ〳〵しう清げによそほしげに、下襲のしりながく、所せくさぶらひ給ふ。まづあなめでた、大納言ばかりの人に、沓を取らせ給ふよと見ゆ。山の井の大納言、そのつぎ〳〵、さらぬ人々、黑き物を引き散したるやうに、藤壺のへいのもとより、登華殿の前まで居並みたるに、いとほそやかにいみじうなまめかしうて、御はかしなど引きつくろひすやらはせ給ふに、宮の大夫殿の、清涼殿の前に立たせ給へれば、それは居させ

給ふまじきなめりと見るほどに、少し歩み出でさせ給へば、ふと居させ給ひしこそ、なほいかばかりの昔の御おこなひの程ならめと見奉りしこそいみじかりしか。中納言の君の、忌の日とて、くすしがり行ひ給ひしを、「たべ、その珠數しばし。行ひてめでたき身にならむとか」とて、集まりて笑へど、なほいとこそめでたけれ。御前に聞しめして、「佛になりたらむこそ、これよりは勝らめ」とて、打ち笑ませ給へるに、又めでたくなりてぞ見まゐらする。太夫殿の居させ給へるを、かへすがへす聞ゆれば、「例の思ふ人」と笑はせ給ふ。ましてこの後の御ありさま見奉らせ給はましかば、ことわりと思しめされなまし。

○くすしがり—奇しがり。

○すいがい—透垣の音便。竹又は板など、間を透して作りたる垣。

○らもん—羅文。木又は竹を菱形に交叉したる垣。

百十一段

九月ばかり、夜ひと夜降りあかしたる雨の、今朝はやみて、朝日の花やかにさしたるに、前栽の菊の露こぼるゝばかり濡れかゝりたるも、いとをかし。すいがい、らもんなどのうへにかいたる蜘蛛の巣のこぼれ殘りて、所々に絲も絶えざまに、雨のかゝりたるが、白き玉をつらぬきたるさまなるこそ、いみじうあはれにをかしけれ。すこし日たけぬれば、萩などのいとおもげなりつるに、露の落つるに、枝のうち動きて、人も手ふれぬに、ふとかみざまへあがりたる、いみじういとをかしといひたる、こと人の心ちには、つゆをかしからじと思ふこそ、又をかしけれ。

百十二段

七日の若菜を、人の六日にもてさわぎ取り散しなどするに、見も知らぬ草を、子どものもてきたるを、「何とかこれをばいふ」といへど、とみにもいはず。「いさ」など、これかれ見合はせて、「耳無草となむいふ」といふ者のあれば、「うべなりけり、聞かぬ顔なるは」など笑ふに、又をかしげなる菊の生ひたるをもてきたれば、

つめどなほみゝな草こそつれなけれあまたしあれば菊もまじれり。

といはまほしけれど、聞き入るべくもあらず。

百十三段

二月官のつかさに、定考といふことするに、何事にかあらむ。釋奠もいかならむ。孔子などは掛け奉りてすることなるべし。聰明とて、うへにも宮にも、あやしき物など、かはらけに盛りて參らするを。

○耳無草—石竹科の草。

○つめど云々—摘むに身を抓むをかけ、菊に聞くかを。

○官のつかさ—太政官廳。

○定考—轉倒せしめてよむ。六位以下の選叙をなすをいふ。

○釋奠—孔子の祭。

○孔子など—孔子の畫像など。

○聰明—まつりの胙なり。

○頭の辨—行成。

○餅餤—餅の中に鵝鴨などの子、豆に雑菜の煮たるを裏みて、方に截る。

○けもん—解文。諸司より諸省へ書上をする下書なり。日録の書法の如し。

○美麻那成行—作名なり。成行は行成をうち返したる戯書。

○畫はかたちわろし云々—葛城の神のかたち醜しとて、夜々出でて、久米路のいはし橋を渡せりといふ故事。

○左大辨—惟仲が當時の官なり。

○ことうるはしう—態度を整へたるをいふ。

○あらず—公事にあらずの略。

○する事—録などやること。

「頭の辨の御許より」とて、主殿司、繪などやうなる物を、しろきしき紙につゝみて、梅の花のいみじく咲きたるに附けてもてきたる、繪にやあらむと急ぎ取り入れて見れば、餅餤といふものを、二つならべてつゝみたるなりけり。添へたる文に、けもんのやうに書きて、「進上餅餤一つゝみ、例によりて進上如レ件。少納言殿に」とて、月日かきて、美麻那成行とて、奥に、「このをのこはみづから參らむとするを、畫はかたちわろしとて參らぬなり」と、いみじくをかしげに書き給ひたり。御前に參りて御覽ぜさすれば、「めでたくも書かれたるかな。をかしうしたり」など譽めさせ給ひて、御文は取らせ給ひつ。「返事はいかゞすべからむ。この餅餤もてくるには、物などや取らすらむ。知りたる人もがな」といふを聞しめして、「惟仲が聲しつる。呼びて問へ」との給はすれば、はしに出でて、「左大辨にもの聞えむ」と、侍していはすれば、いとことうるはしうてきたり。「あらず、私事なり。もしこの辨、少納言などのもとに、かゝる物もてきたる下部などには、する事やある」と問へば、「さる事も侍らず。只とゞめてくひ侍る。何しに問はせ給ふ。もし上官のうちにて、得させ給へるか」といへば、「いかゞは」といらふ。たゞ返しを、いみじうあかき薄様に、「みづからも

○上官—政官の略字。太政官の役人をいふ。おほく外記等を稱す。

○れいたう—冷淡の字音便。

○びゝしく—美々しく。

○殿—道隆。

○つかさ得はじめたる—新任をいふ。

○細長—男の童および婦人に、この名の服あり。

てまうでこぬ下部は、いとれいたうなりとなむ見ゆる」とて、めでたき紅梅につけて奉るを、すなはちおはしまして、「下部さぶらふ」との給へば、出でたるに、「さやうのものぞ、歌よみしておこせ給へると思ひつるに、びゞしくもいひたりつるかな。女の少し我はと思ひたるは、歌詠みがましくぞある。さらぬこそ語ひよけれ。まろなどに、さる事いはむ人は、かへりて無心ならむかし」との給ふ。「則光、なりやすなど笑ひて止みにし事を、殿の前に人々いと多かりけるに、語り申し給ひければ、『いとよくいひたる』となむの給ひし」と人の語りし。これこそ見苦しき我ぼめどもなれかし。

百十五段

「などてつかさ得はじめたる六位の笏に、職の御曹司の、たつみの隅の築地の板をせしぞ。更に西東のをもせよかし。又、五位もせよかし」などいふことをいひ出でて、「あぢきなき事どもを。衣などに、すゞろなる名どもを付けけむ、いとあやし。衣のなかに、細長をばさもいひつべし。なぞ汗衫は。尻長といへかし。をの童の着たるやうに。なぞ唐衣は。短ききぬとこそいはめ。されどそれは、もろこしの人の着るものなれば。うへのきぬの袴、さいふべし。下襲もよ

○大口―大口の袴の略。表袴の下にはく。

○故殿―道隆。長徳元年九月十日薨ず。

●月秋と期して云云―菅三品が謙徳公の爲に作れる願文に「月與レ秋期而身何去」。

○れう―料の字音。

○まほに近く云々―夫婦同樣に昵ばざると也。

○殿上などに明暮なき―藏人頭を辭するをいふ。

○やくと―役として。

○かたひき―方引。ひゝきにすること。

○頭の辨―行成。

し。又、大口、長さよりは口のひろければ。袴いとあぢきなし。指貫もなぞ。足ぎぬ、もしはさやうのものは、足ぶくろなどもいへかし」など、よろづの事をいひのゝしるを、「清いであなかしがまし。今はいはじ。寢給ひね」といふいらへに、夜居の僧の、「いとわろからむ。夜ひと夜こそなほのたまはめ」と、にくしと思ひたる聲ざまにていひ出でたりしこそ、をかしかりしに添へて驚かれにしか。

百十六段

故殿の御ために、月ごとの十日、御經佛供養せさせ給ひしを、九月十日、職の御曹司にてせさせ給ふ。上達部、殿上人、いとおほかり。清範講師にて、說く事どもいと悲しければ、ことに物の哀深かるまじき若き人も、皆泣くめり。はて、酒のみ詩ずんじなどするに、頭中將齊信の君、「月秋と期して、身いづくにか」といふことを、打ち出し給へりしかば、いみじうめでたし。いかでさは思ひいで給ひけむ。おはします所に分け參るほどに、立ち出でさせ給ひて、「宮めでたしな。いみじうけふのれうにいひたる事にこそあれ」との給はすれば、「清それを啓しにとて、物も見さして參り侍りつるなり。なほいとめでたくこそ思ひ侍れ」と聞えさすれば、「まして さ覺ゆらむ」と仰せらるゝ。わざと呼びもいで、おのづからあふ所にては、「齊信などかまろを、まほに近くは語ひ給はぬ。さすがにくしなど思ひたるさまにはあらずと知りたるを、いと怪しくなむ。さばかり年頃になりぬる得意の、疎くてやむはなし。殿上などに明暮なきをりもあらば、何事をか思ひ出でにせむ」との給へば、「清さなり。難かるべき事にもあらぬを、さもあらむ後には、得譽め奉らざらむがくち惜しきなり。うへの御前などにて、やくとあつまりて譽め聞ゆるに、いかでか。只おぼせしかし。かたはらいたく、心の鬼出で來て、いひにくゝ侍りなむものを」といへば、笑ひて、「齊信など。さる人しも、よそ目よりほかに、譽むるたぐひ多かり」との給ふ。「清それがにくからずはこそあらめ。男も女も、けぢかき人をかたひき思ふ人の、いさゝかあしき事をいへば、腹だちなどするがわびしう覺ゆるなり」といへば、「齊信たのもしげなの事や」との給ふもをかし。

百十七段

頭の辨の職にまゐり給ひて、物語などし給ふに、夜いと更けぬ。「頭辨明日御物忌なるに籠るべければ、丑になりなば惡しかりなむ」とてまゐり給ひぬ。つとめて、

○紙屋紙！薄墨色の紙。朝廷所屬の紙屋院にてすく。
○うらうへに—裏表に。事實と反對
○孟嘗君—支那の周末春秋時代の齊の公族。
○倉都の君—隆圓。

藏人所の紙屋紙ひきかさねて、「頭辨後のあしたはのこり多かる心ちなむする。夜をとほして、昔物語も聞え明さむとせしを、雞の聲に催されて」と、いといみじう清げに、うらうへに事多く書き給へる、いとめでたし。御返事に、「清いと夜ぶかく侍りける雞のころは、孟嘗君のにや」ときこえたれば、たちかへり、「清孟嘗君の鷄は、函谷關を開きて、三千の客わづかにされりとあれども、これは、逢坂の關の事なり」とあれば、

「清夜をこめて鳥のそらねははかるとも世にあふ坂の關はゆるさじ。
心かしこき關守侍るめり」と聞ゆ。立ちかへり、
「頭辨逢坂は人こえやすき關なれば鳥も鳴かねどあけて待つとか。

とありし文どもを、はじめのは、倉都の君の額をさへつきて取り給ひてき。のち〳〵のは御前に。さて、「宮逢坂の歌は詠みへされて、返しもせずなりにたる、いとわろし」と笑はせ給ふ。「頭辨さてその文は、殿上人皆見てしは」との給へば、「清まことにおぼしけりとは、これにてこそ知りぬれ。めでたき事など人のいひ傳へぬは、かひなきわざぞかし。又、見苦しければ、御文はいみじく隱して、人につゆ見せ侍らず。志のほどをくらぶるに、ひとしうこそは」といへば、「頭辨かう物思ひ知りていふこそ、なほ人々には似ず思へど、『思ひ隈なくあしうしたり』など、例の女のやうにいはむとこそ思ひつるに」とて、いみじう笑ひ給ふ。「清こはなぞ、よろこびをこそ聞えめ」などいふ。「頭辨まろが文をかくし給ひける、又、なほうれしきことなり。いかに心憂くつらからまし。今よりもなほ頼み聞えむ」などの給ひて後に、經房の中將、「頭の辨はいみじう譽め給ふとは知りたりや。一日の文のついでに、ありし事など語り給ふ。思ふ人々の譽めらるゝは、いみじく嬉しく」など、まめやかにの給ふもをかし。「清うれしきことも二つにてこそ。かの譽め給ふなるに、また思ふ人の中に侍りけるを」などいへば、「經房それはめづらしう、今の事のやうにもよろこび給ふかな」との給ふ。

○おいこの君—世說に「王徽之字子猷云々、嘗借二居空宅一、便令栽竹、或問之、徽之指竹曰、何可三一日無二此君一邪」。
○吳竹—淡竹（ハチク）の類。

百十八段

五月ばかりに、月もなくいとくらき夜、「女房やさぶらひ給ふ」と、聲々していへば、「宮出でて見よ。例ならずいふは誰ぞ」と仰せらるれば、出でて、「清こは誰ぞ。おどろ〳〵しうきはやかなるは」といふに、物もいはで、御簾をもたげて、そよろとさし入るゝは、吳竹の枝なりけり。「清おい。この君にこそ」といひたるを聞きて、「いざや、これ殿上に行きて語らむ」とて、中將、新中將、六位どもな

○御前の竹―清涼殿前に呉竹あり。

○この君と稱す―この君は竹の異名。本朝文粹に、藤原篤茂「晉騎參兵軍王子猷、種而稱二此君一」。

○本意なくては―の下、歸るまじきにか略せり。

どありけるはいぬ。頭の辨はとまり給ひて、「怪しくいぬる者どもかな。御前の竹を折りて、歌よまむとしつるを、『職にまゐりて、同じくは女房など呼び出でてを』といひてきつるを、呉竹の名を、いとゝくいはれていぬるこそをかしけれ。たれが教を知りて、人のなべて知るべくもあらぬ事をばいふぞ」などの給へば、「竹の名とも知らぬものを、なまねたしとや思しつらむ」といへば、「まことぞ。え知らじ」などの給ふ。まめごとなどいひ合はせて居給へるに、「この君と稱す」といふ詩を誦んじて、又集まり來れば、「殿上にていひ期しつる本意もなくては、などかへり給ひぬるぞ。いと怪しくこそありつれ」との給へば、「さる事には、何のいらへをかせむ。いとなか〳〵ならむ。殿上にてもいひのゝしりつれば、うへも聞しめして、興ぜさせ給ひつる」とかたる。辨もろ共に、かへすがへす同じ事を誦んじて、いとをかしがれば、人々出でて見る。とり〳〵に物どもいひかはして歸るとて、なほ同じ事をもろ聲に誦んじて、左衞門の陣に入るまで聞ゆ。つとめて、いとゝく少納言の命婦といふが、御文參らせたるに、この事を啓したれば、しもなるを召して、「さる事やありし」と問はせ給へば、「知らず。何とも思はでいひ出で侍りしを、行成の朝臣の取りなしたるにや侍らむ」

○御はて―諒闇のはて。正暦三年。

○花の衣に―仁明帝の諒闇のはてに、僧正遍昭のよめる「皆人は花のころにもなりぬなり苦の秋よかわきだにせよ」。

○藤三位―藤原繁子。右大臣師輔の女にて、一條帝の乳母。

○蓑着たる形容なり―蓑蟲のやうなる形容なり。

○卷數―經文など讀誦したる卷數を記して、願主に送る文書。

○胡桃色―表は香色、裏は白。

○椎柴の袖―椎柴はいふ。裏服の染料とする故に、喪服を椎柴の袖といへり。

と申せば、「取りなすとても」と打ち笑ませ給へり。誰が事をも、殿上人譽めけりと聞かせ給ふをば、さいはるゝ人をよろこばせ給ふもをかし。

百十九段

圓融院の御はての年、皆人御服ぬぎなどして、あはれなる事を、おほやけより始めて、院の人も、「花の衣に」などいひけむ世の御事など思ひ出づるに、雨いたく降る日、藤三位の局に、蓑蟲のやうなる童の、大きなる木のしろきに、たて文をつけて、「これ奉らむ」といひければ、「いづこよりぞ。けふあす御物忌なれば、御蔀もまゐらぬぞ」とて、しもは立てたる蔀のかみより取り入れて、さなどは聞かせ奉らず、「物忌なればえ見ず」とて、かみについさして置きたるを、つとめて手洗ひて、その卷數とこひて、伏し拜みてあけたれば、胡桃色といふ色紙の厚肥えたるを、あやしと見てあけもてゆけば、老法師のいみじげなるが手にて、

「これをだにかたみと思ふに都には葉がへやしつる椎柴の袖。

と書きたり。あさましくねたかりけるわざかな。誰がしたるにかあらむ。仁和寺の僧正のにやと思へど、よもかゝることの給はじ。なほ誰ならむ。藤大納言

○仁和寺の僧正―寛朝僧正。
○藤大納言―爲光か。
○かの院―閑融院

○僧綱―僧官の僧正僧都律師、僧位の法印法眼法橋などを稱す。

○刀自―御厨子、臺盤、内侍所の雜役をつとむる女官。
○小兵衛―女房の名。

ぞ、かの院の別當におはせしかば、そのし給へる事なめり。これをうへの御前、宮などに、とう聞しめさせばやと思ふに、いと心もとなけれど、なほ恐ろしういひたる物忌を、しはてむと念じくらして、またつとめて、藤大納言の御もとに、この御返しをしてさしおかせたれば、すなはち又返事しておかせ給へりけり。それを二つながら取りて、急ぎ參りて、「かゝる事なむ侍りし」と、うへもおはしますにはあらで、法師にこそあめれ」との給はすれば、「さはこは誰がしわざにか、すき〳〵しき上達部、僧綱などは、誰かはある。それにやかれにや」などおぼめきゆかしがり給ふに、うへ、「このわたりに見えしにこそは、いとよく似たれ」と打ちほゝゑませ給ひて、今ひとすぢ御厨子のもとなりけるを、取り出でさせ給へれば、「藤三位いでであな心う。これおほせられよ。あな頭いたや。いかで聞き侍らむ」と、たゞせめに責め申して、うらみ聞えて笑ひ給ふに、やう〳〵仰せられ出でて、御使にいきたりける鬼童は、臺盤所の刀自といふ者の供なりけるを、小兵衛がかたらひ出したるにやありけむ」など仰せらるれば、宮も笑はせ給ふを、引きゆるがし奉りて、「藤三位などかくはからはせおはします。なほうたがひもなく、手を打ち洗ひて、伏し拜み侍りしことよ」と笑ひねたがり居給へるさまも、いとほこりかに、愛敬づきてをかし。さて、うへの臺盤所にも、笑ひのしりて、局におりて、この童尋ね出でて、文取り入れし人に見すれば、「それにこそ侍るめれ」といふ。「誰が文を誰がとらせしぞ」といへば、しれ〳〵とうち笑みて、ともかくもいはで走りにけり。藤大納言後に聞きて、笑ひ興じ給ひけり。

○所さりたる物忌―他所にてする物忌。
○馬―駒なり。

○御衣糧糅―ひめ糊。

百二十段

つれ〳〵なるもの　所さりたる物忌。馬おりぬ雙六。除目につかさ得ぬ人の家。雨うち降りたるは、ましてつれ〳〵なり。

百二十一段

つれ〳〵なぐさむるもの　物語。碁、雙六。三つ四つばかりなるちごの物をかしういふ。又、いとちひさきちごの物語したるが、笑みなどしたる。くだもの。男のうちさるがひ、物よくいふがきたるは、物忌なれど入れつかし。

百二十二段

取りどころなきもの　かたちにくげに心あしき人。御衣糧糅のぬれたる。これ

○あとびの火ばし—跡火の火箸。跡火は棺を送り出したる跡にて焚く火、即ち送火なり。
○などてか—下に書かざるべきを省けり。
○御前ばかり—主上の御前ばかりの儀式。
○試樂—こゝのはれば、三月中の午の日に行はるゝ石清水の臨時祭のなるべし。
○かもりづかさ—かんもりづかさ。
○播部寮。宮中の小道具の舗設洒掃等を司る。
○使—祭の勅使。
○衝重—食器を載する臺。今三方といふ物。
○陪從—祭に行ふ東遊の笛の役をつとむる者。舞人に陪從する義。
○やくかひ—屋久貝。夜光貝とも。青螺。
○とりばみ—饗應の殘物を庭上に投げて拾はすること。
○火燒屋—衛士が火をたく小屋。禁中及び東宮后宮等にあり。
○有度濱—駿河舞の一段。やうど濱に、駿河なるうど濱に、うちよする波はなゝくさのいろ、こゝぞよし、ことこそよし」。
○竹のませ—竹の臺のこと。淸涼殿の東北にあり。
○一の舞—第一番の舞。
○袍の領—襟なり。
○あやもなきこま山—單調なる高麗樂。山城に山城の瓜つくり、なよやらいしなや、さいしいみじうわろき事いひたると、よろづの人にくむなることとて、今とゞむべきにもあらず。又、あとびの火ばしといふ事、などてか。世になき事ならねば、皆人知りたらむ。げに書きいで人の見るべき事にはあらねど、この草子を見るべきものと思はざりしかば、怪しき事をも、にくき事をも、只思はむ事のかぎりを書かむとてありしなり。

百二十三段

なほ世にめでたきもの　臨時の祭の御前ばかりの事は、何事にかあらむ。試樂もいとをかし。春は空のけしきのどかにて、うら〳〵とあるに、淸涼殿の御前の庭に、かもりづかさの、疊どもを敷きて、使は北おもてに、まひ人は御前のかたに。これらは僻おぼえにもあらむ。

所の衆ども、衝重どもとりて、前ごとに居るわたし、陪從も、その日は御前に出で入るぞかし。公卿、殿上人は、かはる〴〵盃とりて、はてにはやくかひといふ物して飲みてたつ。即ちとりばみといふもの、男などのせむだにうたてあるを、御前に女ぞ出でて取りける。思ひかけず人やあらむとも知らぬに、火燒屋よりさし出でて、多く取らむと騷ぐ者は、なか〳〵うちこぼしてあつかふほどに、かゝらかにふと取り出でぬる者にはおくれぬ。かしこき納殿に、火燒屋をして取り入るゝこそをかしけれ。かんもり司のものども、疊取るやおそきと、主殿司の官人ども、手ごとに箒とり、砂子ならす。承香殿の前のほどに、笛を吹きたて、拍子うちて遊ぶを、とく出でこなむと待つに、有度濱うたひて、竹のませのもとに歩み出でて、御琴うちたる程など、いかにせむとぞ覺ゆるや。一の舞のいとうるはしく袖をあはせて、二人はしり出でて、西に向ひて立ちぬ。つぎ〳〵出づるに、足蹈を拍子に合はせては、半臂の緒つくろひ、冠、袍の領など繕ひて、あやもなきこま山などうたひて、舞ひ立ちたるは、すべていみじくめでたし。大比禮など舞ふは、日一日見るとも飽くまじきを、はてぬるこそいとくちをしけれど、またあるべしと思ふはたのもしきに、御琴舁きかへしてこのたびはやがて、竹のうしろより舞ひ出でて、ぬぎ垂れつるさまどものなまめかしさは、いみじくこそあれ。搔練の下襲など亂れあひて、こなたかなたに渡りなどしたる、いで、更にいへばよのつねなり。このたびは、またもあるまじければにや、いみじくこそはてなむ事はくちをしけれ。上達部なども、つづきて出で給ひぬれば、いとさうゞしうくちをしきに、賀茂の臨時の祭は、

なや、瓜つくりつくりはれ」。○ぬぎ垂れつる—舞人の右を肩ぬぎて、求子の曲を舞ふをいふ。○かへりだち—還立。社頭の儀はてて、使舞人等禁中に歸り奏り、主上の御前にて、神樂を奏するをいふ。○庭火の云々—神樂の夜のさまなり。○オの男—神樂の歌人をいふ。○半臂の緒—舞人のなり。○少將と—未詳。○一の橋のもとにあなる—亡魂がなり。

かへりだちの御神樂などにこそなぐさめらるれ。庭火のけぶりのほそうのぼりたるに、神樂の笛の面しろうわなゝき、ほそう吹きすましたるに、歌の聲もいとあはれに、いみじく面しろく、寒くさえ氷りて、打ちたる衣もいとつめたう、扇もたる手のひゆるも覺えず。才の男ども召して飛びきたるも、人長の心よげさなどこそいみじけれ。里なる時は、たゞ渡るを見るに飽かねば、御社まで行きて見るをりもあり。大きなる木のもとに車たてたれば、松のけぶりたなびきて、火のかげに半臂の緒、きぬのつやも、晝よりはこよなく勝りて見ゆる。橋の板を蹈みならしつゝ、聲合はせて舞ふほどもいとをかしきに、水の流るゝ音、笛の聲などの合ひたるは、まことに神も嬉しと思しめすらむかし。少將といひける人の、年ごとに舞人にて、めでたきものに思ひしみけるに、なくなりて、上の御社の、一の橋のもとにあなるを聞けば、ゆゝしう、せちに物思ひいれじと思へど、なほこのめでたき事をこそ、更にえ思ひすつまじけれ。

女房「八幡の臨時の祭のなごりこそ、いとつれ〴〵なれ。などて還りてまた舞ふわざをせざりけむ。さらばをかしからまし。祿を得て、うしろよりまかづるこそ、くち惜しけれ」などいふを、うへの御前に聞し召して、「明日還りたらむ、召して舞はせむ」など仰せらるゝ。

女房「まことにやさぶらふらむ。さらばいかにめでたからむ」など申すっうれしがりて、宮の御前にも、

女房「なほそれ舞はせさせ給へ」と、集まりて申しまどひしかば、そのたび還りて舞ひしかば、嬉しかりしものかな。さしもやあらざらむとうちたゆみつるに、舞人御前に召すを聞きつけたる心ち、物にあたるばかり騒ぐも、いと物ぐるほしく、下にある人々惑ひのぼるさまこそ。人の從者、殿上人などの見るらむも知らず、裳を頭にうちかづきてのぼるを、笑ふもことわりなり。

百二十四段

故殿などおはしまさで、世の中に事出でき、物騒がしくなりて、宮またうちにも入らせ給はず、小二條といふ所におはしますに、何ともなくうたてありしかば、久しう里に居たり。御前わたりおぼつかなさにぞ、なほえかくてはあるまじかりける。左中將おはして物語し給ふ。「今日は宮にまゐりたれば、いみじく物こそ哀なりつれ。女房の裝束、裳、唐衣などの折にあひ、たゆまずをかしうても侍るかな。御簾のそばのあきたるより見入れつれば、八九人ばかり居て、黄

○故殿—道隆。○世の中に事いでき—花山法皇を射奉りしにより、長徳二年四月二十四日、中宮の御兄弟伊周隆家等流罪に處せられ、中宮は薙髪せられたるをさす。○左中將—未詳。

○黄朽葉―梔子に茜又は紅をまぜたる色。
○しをん―紫苑。表は薄色、裏は青。

朽葉の唐衣、薄色の裳、しをん、萩などをかしう居なみたるかな。御前の草のいと高きを、『などか、これは茂りて侍る。はらはせてこそ』といひつれば、『露おかせて御覽せむとて、こと更に』と、宰相の君の聲にていらへつるなり。をかしくも覺えつるかな。『御里居、いと心憂し。かゝる所に住居せさせ給はむほどは、いみじき事ありとも、必ずさぶらふべき者に思し召されたるかひもなく』など、あまたいひつる。語り聞かせ奉れとなめりかし。參りて見給へ。あはれげなる所のさまかな。露臺の前に植ゑられたりける牡丹の、唐めきをかしき事」などの給ふ。「いざ、人のにくしと思ひたりしかば、又にくゝ侍りしかば」といらへ聞ゆ。「おいらかにも」とて笑ひ給ふ。

○左の大殿―左大臣殿。藤原道長のこと。
○あなたがた―彼方。敵方。

げにいかならむと思ひまゐらする御氣色にはあらで、さぶらふ人達の、「左の大殿のかたの人しるすぢにてあり」などさゝめき、さしつどひて物などいふに、下より參るを見てはいひ止み、はなち立てたるさまに、見ならはずにくければ、「まゐれ」などあるたびの仰をもすぐして、げに久しうなりにけるを、宮の邊には、只あなたがたになして、虚言などゝ出で來べし。例ならず仰ごとなどもなくて、日ごろになれば、心ぼそくて打ちながむるほどに、長女文をもて來り、長女御前より左京の君して、忍びて賜はせたりつる」といひて、こゝにてさへひき忍ぶもあまりなり。人傳の仰ごとにてあらぬなめりと、胸つぶれてあけたれば、紙には物も書かせ給はず、山吹の花びらを、たゞ一つ包ませ給へり。それに「いはで思ふぞ」と書かせ給へるを見るもいみじう、日ごろの絶間思ひ歎かれつる心も慰みて嬉しきに、まづ知るさまを、長女も打ちまもりて、「『御前にはいかに、物の折ごとに思し出で、聞えさせ給ふなるものを』とて、誰もあやしき御長居とのみこそ侍るめれ。などか參らせ給はぬ」などいひて、「こゝなる所に、あからさまにまかりて參らむ」といひていぬるのちに、御返事書きて參らせむとするに、この歌のもと、更に忘れたり。「いとあやし。同じふる言といひながら、知らぬ人やはある。こゝもとに覺えながら、いひ出でられぬはいかにぞや」などいふを聞きて、ちひさき童の前に居たるが、「『下ゆく水の』とこそ申せ」といひたる。などてかく忘れつるならむ。これに教へらるゝものをかし。御かへり參らせて、少しほど經て參りたり。

○山吹の花びらを―山吹の花は山梔子色なる故、口無しの意をよせたり。
○いはで思ふぞ―六帖「心にはしたゆく水のわきかへりいはで思ふぞいふにまされる」。
○まづ知るさま―感涙のこぼるゝをいふ。古今集「よのなかのうきもつらきもつげなくにまづ知るものは涙なりけり」。

いかゞと、例よりはつゝましうて、御几帳に端がくれたるを、「あれは今まゐりか」など笑はせ給ひて、「にくき歌なれど、この折は、さもいひつべかりけりとな

○ひざう―非常の字音。

○天にはり弓―上弦又は下弦の月の謎なり。

む思ふを、見つけでは、しばしえこそ慰むまじけれ」などの給はせて、かはりたる御氣色もなし。童に教へられしことなど啓すれば、いみじく笑はせ給ひて、「さる事ぞ。あまりあなづるふる言は、さもありぬべし」など仰せられて、ついでに、人のなぞ〳〵合しける所に、かたくなにはあらで、さやうの事にらう〳〵じかりけるが、「左の一番はおのれいはむ。さ思ひ給へ」など頼むるに、さりともわろき事はいひ出でじと、たのもしく嬉しくて、皆人作りいだし選り定むるに、「その詞を聞かむ。いかに」など問ふ。「たゞまかせて物し給へ。さ申して、いとくちゝ惜しうはあらじ」といふを、げにと推しはかる。日いと近うなりぬれば、「なほこの事の給へ。ひざうにをかしき事もこそあれ」といふを、「いさ知らず。さらばな頼まれそ」などむつかれば、おぼつかなしと思ひながら、その日になりて、みな方人の男女居分けて、殿上人などよき人々多く居並みて、合はするに、左の一番に、いみじう用意してもてなしたるさまの、いかなる事をかいひ出でむと見えたれば、あなたの人もこなたの人も、心もとなく打ちまもりて、「なぞ〳〵」といふほど、いと心もとなし。「天にはり弓」といひ出でたり。あなたの方の人は、いと興ありと思ひたるに、こなたの方の人は、物も覚えずあさましうなりて、いとにくゝ愛敬なくて、あなたによりて、殊更に負けさせむとしけるをなど、かた時のほどに思ふに、あなたの人をこに思ひて、うち笑ひて、「やゝ。さらに知らず」と口ひきたれてさるがうしかくるに、「數させ、〳〵」とて、さゝせつ。「いと怪しきこと。これ知らぬもの誰かあらむ。更に數さすまじ」と論ずれと、「知らずといひ出でむは、などてか負くるにならざらむ」とて、つぎ〳〵のも、この人に論じかたせける。いみじう人の知りたる事なれど、覚えぬ事はさこそあれ。「何しかは、え知らずといひし」と、のちに恨みられて、罪さりける事を語り出でさせ給へば、御前なる限は、「さは思ふべし。くちをしく思ひけむ。こなたの人の心ち、聞し召したりけむ、いかににくかりけむ」など笑ふ。これは忘れたる事かは。皆人知りたる事にや。

○數させ―勝負の數取の算をさせ。

○罪さり―謝罪。

百二十五段

正月十日、空いとくらう、雲もあつく見えながら、さすがに日は、いとけざやかに照りたるに、えせ者の家のうしろ、荒畠などいふものの、土もうるはしうなほからぬに、桃の木わかだちて、いとしもと勝にさし出でたる、片つ方は青く、今片つ方は濃くつやゝかにて、蘇枋のやうに見えたるに、ほそやかなる童の

狩衣はかけやりなどして、髪はうるはしきがのぼりたれば、また紅梅の衣白きなど、ひきはこえたる男兒、半靴はきたる、木のもとに立ちて、「我によき木切りて、いで」など乞ふに、また髪をかしげなるわらはべの、袖ども綻びがちにて、袴は萎えたれど、色などよきうち着たる、三四人、「卯槌の木のよからむ切りておろせ。こゝに召すぞ」などいふに、おろしたれば、はしりかひ、取りわき、「我に多く」などいふこそをかしけれ。くろき袴着たるをのこはしり來て乞ふに、「まて」などいへば、木のもとによりて引きゆるがすに、危ふがりて、猿のやうにかいつきて居るもをかし。梅などのなりたる折も、さやうにぞあるかし。

○こひせめ―請ひ新ること。

○ひろひおく―石なり。

百二十六段

清げなるをのこの、雙六を日ひと日うちて、なほ飽かぬにや、みじかき燈臺に火をあかくかゝげて、かたきの賽をこひせめて、とみにも入れねば、筒を盤のうへに立てて待つ。狩衣の領の顔にかゝれば、片手しておし入れて、いとこわからぬ烏帽子をふりやりて、さはいみじう呪ふとも、うちはづしてむやと、心もとなげに、うちまもりたるこそ、ほこりかに見ゆれ。

碁をやむごとなき人のうつとて、紐うち解き、ないがしろなるけしきに、ひろひおくに、おとりたる人の、居ずまひも畏まりたるけしきに、碁盤よりは少し遠くて、及びつゝ、袖の下いま片手にて引きやりつゝ、打ちたるもをかし。

百二十七段

おそろしきもの　橡のかさ。燒けたる所。茨。菱。髪おほかるをのこの頭洗ひてほすほど。栗のいが。

○橡のかさ―どんぐりの笠。

百二十八段

きよしと見ゆるもの　土器。新しき鋺。畳にさす薦。水を物に入るゝ透影。新しき細櫃。

○つきはな―蕚。

百二十九段

きたなげなるもの　鼠のすみか。つとめて手おそく洗ふ人。白きつきはな。すばなしありくちご。油入るゝ物。雀の子。暑きほどに久しく湯あみぬ。衣の萎えたるは、いづれも〳〵きたなげなる中に、練色のきぬこそきたなげなれ。

百三十段

いやしげなるもの　式部の丞のさく。黒き髪のすぢふとき。布屏風の新しき、ふり黒みたるは、さるいふかひなき物にて、なか〳〵何とも見えず。新しくした

○さく―爵。五位に叙せらるゝをいふ。式部丞は六位藏人を勤務し、殿

上おるゝ時五位に叙せらる。故にこの五位は卑しき也。
○おそひ―即ち蓙なり。

○世の中など騒がしき―流行病のあるをいふ。

○ふり―うり。瓜。
○へに―へ(へ)に。へは綜緒即ち足緒。

てて、櫻の花多くさかせて、胡粉、朱砂など色どりたる繪書きたる。遣戸、厨子、何も田舍物はいやしきなり。蓙張の車のおそひ。撿非違使の袴。伊豫簾の筋ふとき。人の子に法師子のふとりたる。まことの出雲蓙の疊。

百三十一段

むねつぶるゝもの　競馬見る。元結よる。親などの心ちあしうして、例ならぬけしきなる。まして世の中など騒がしき頃、よろづの事おぼえず。また、物いはぬちごの泣き入りて乳も飲まず、いみじく、乳母の抱くにもやまで、久しう泣きたる。例の所などにて、ことにまたいちじるからぬ人の聲聞きつけたるはことわり。人などのそのうへなどいふに、まづこそつぶるれ。いみじくにくき人のきたるも、いみじくこそあれ。よべきたる人の今朝の文のおそき、聞く人さへつぶる。思ふ人の文とりて、さし出でたるもまたつぶる。

百三十二段

うつくしきもの　ふりに書きたるちごの顏。雀の子のねずなきするにをどりくる。又、へにつけて居ゑたれば、親雀の蟲などもて來てくゝむる、いとらうたし。三つばかりなるちごの、急ぎて這ひくる道に、いとちひさき塵などのありけるを、目ざとに見つけて、いとをかしげなるおよびにとらへて、大人などに見せたる、いとうつくし。尼にそぎたるちごの、目に髮のおほひたるを掻きは遣らで、うちかたぶきて物など見る、いとうつくし。たすきがけにゆひたる腰のかみの、白うをかしげなるも、見るにうつくし。おほきにはあらぬ殿上わらはの、さうぞきたてられてありくもうつくし。をかしげなるちごの、あからさまに抱きてうつくしむ程に、かいつきて寢入りたるもらうたし。雛の調度。蓮の浮葉のいとちひさきを、池より取りあげて見る。葵のちひさきも、いとうつくし。何も〳〵ちひさき物は、いとうつくし。いみじう肥えたるちごの二つばかりなるが、白ううつくしきが、二藍のうすものなど、衣長くて、たすきあげたるが這ひ出でくるも、いとうつくし。八つ九つ十ばかりなるをのこの、聲をさなげにて文よみたる、いとうつくし。雞の雛の足高に、白うをかしげに、衣みじかなるさまして、ひよ〳〵とかしがましく鳴きて、人のしりに立ちてありくも、また親のもとにつれだちありく見るも、うつくし。かりの子。舍利の壺。瞿麥の花。

○さうぞき―裝束の字音を活用したる語。

○舍利―佛骨。

○かなしく―かはゆく。

○鰭板―端板の義。
○ふさう雲―不祥雲。
○ほこ星―破軍星。
○かさめ―蟹の一種。擁剱。
○ひぢかさ雨―餓雨をいふか。
○いりずみ―入墨。墨。
○牛鬼―佛説に見ゆる牛頭の鬼。

人ばへするもの　ことなる事なき人の子の、かなしくしならはされたる。しはぶき。はづかしき人に物いはむとするにも、まづさきに立つこそあやしけれ。あなたこなたに住む人の子どもの、四つ五つなるはあやにくだちて、物など取りちらして損ふを、常は引きはられなど制せられて、心のまゝにもえあらぬが、親のきたるに所えて、ゆかしがりける物を、「あれ見せよや、母」など引ゆるがすに、大人など物いふとて、ふとも聞き入れねば、手づから引きさがし出でて見るこそ、いとにくけれ。それを「まさな」とばかり打ちいひて、取り隠さで、「さなせそ。そこなふな」とばかり笑みていふ親もにくし。われえはしたなくもいはで見るこそ心もとなけれ。

百三十四段

名おそろしきもの　青淵。谷の洞。鰭板。鐵。土塊。雷は名のみならず、いみじうおそろし。暴風。ふさう雲。ほこ星。おほかみ。牛。かさめ。蟻。籠の長。いかり。それも名のみならず、見るもおそろし。繩莚。強盗、またよろづにおそろし。ひぢかさ雨。地楊梅。生靈。鬼薬。鬼薇蕨。荆棘。枳殼。いりずみ。牡丹。牛鬼。

○ぬひ物―刺繍。

○大根―齒固に用ふ。
○ひめまうちぎみ―姫大夫君。東宮行幸に馬にのりて供奉する少女。
○節折の藏人―二季の大祓の夜、竹

見るにことなることなきものの、文字にかきてことゞしきもの　覆盆子。鴨跖草。茨。胡桃。文章博士。皇后宮の權太夫。楊桃。いたどりはまして、虎の杖と書きたるとか。杖なくともありぬべき顔つきを。

百三十六段

むつかしげなるもの　ぬひ物のうら。猫の耳のうち。鼠のいまだ毛も生ひぬを、巣の中より數多まろばし出でたる。裏まだつかぬ皮ぎぬの縫目。ことに清げならぬ所のくらき。ことなる事なき人の、ちひさき子どもなど、數多持ちてあつかひたる。いと深うしも志なき女の、心ちあしうして久しく惱みたるも、男の心の中にはむつかしげなるべし。

百三十七段

えせものの所うるをりの事　正月の大根。行幸のをりのひめまうちぎみ。六月、十二月の晦日の節折の藏人。季の御讀經の威儀師、赤袈裟着て、僧の名ども讀みあげたる、いとらうゝし。御讀經、御佛名などの御裝束の所の衆。春日祭の舍人ども。大饗の所のあゆみ。正月の藥子。卯杖の法師。五節のこゝろみの

にて、主上の御寸法をはかり奉る女職人。
○御裝束―師付。
○あゆみ―宮吏の誤りあるくこと。
○薬子―元日の御屠蘇をまづ嘗めしむる童女。
○卯杖の法師―天台眞宗より奉る卯杖の法師。
○御髪上―五節の舞姫に隨ふ髪上の童女。
○史生―太政官の書記。大饗の時は列立す。
○稲荷―伏見の稲荷。

御髪上。節會の御陪膳の采女。大饗の日の史生。七月の相撲。雨降る日の市女笠。渡するをりのかん取。

百三十八段

苦しげなるもの　夜泣といふものするちごの乳母。思ふ人二人もちて、こなたかなたに恨みふすべられたる男。こはき物のけあづかりたる驗者、驗だに早くはよかるべきを、さしもなきを、さすがに人わらはれにあらじと念ずる、いと苦しげなり。わりなく物うたがひする男に、いみじう思はれたる女。一の所に時めく人も、得やすくはあらねど、それはよかめり。心いられしたる人。

百三十九段

うらやましきもの　經など習ひて、いみじうたど〳〵しくて忘れがちにて、かへす〳〵同じ所を讀むに、法師はことわり、男も女も、くる〳〵とやすらかに讀みたるこそ、あれがやうに、いつの折とこそ、ふと覺ゆれ。心ちなどわづらひて臥したるに、うち笑ひ物いひ、思ふ事なげにて歩みありく人こそ、いみじくうらやましけれ。稲荷に思ひおこして參りたるに、中の御社のほど、わりなく苦しきを念じてのぼる程に、いさゝか苦しげもなく、後れて來と見えたる者ども

○はこへ―衣裳を中途に引たむること。
○さがりば―下り端。

の、只ゆきにさきだちて詣づる、いとうらやまし。二月午の日の曉にいそぎしかど、坂のなからばかり歩みしかば、己の時ばかりになりにけり。やう〳〵暑くさへなりて、まことにわびしう、かゝらぬ人も世にあらむものを、何しに詣でつらむとまで、涙落ちてやすむに、三十餘ばかりなる女の、壺裝束などにはあらで、たゞ引きはこへたるが、「まろは七たびまうでし侍るぞ。三たびはまうでぬ。四たびはことにもあらず。未には下向しぬべし」と、道に逢ひたる人にうちいひて、くだりゆきしこそ、たゞなる所にては、目もとまるまじきことの、かれが身に、只今ならばやと覺えしか。

男も、女も、法師も、よき子もちたる人、いみじううらやまし。髪長くうるはしう、さがりばなどめでたき人。やむごとなき人の、人にかしづかれ給ふも、いとうらやまし。手よく書き、歌よく詠みて、物の折にもまづとり出でらるゝ人。よき人の御前に、女房いと數多さぶらふに、心にくき所へつかはすべき仰書などを、誰も鳥の跡などのやうには、などかはあらむ。されど、下などにあるを、わざと召して、御硯おろして書かせさせ給ふうらやまし。さやうの事は、所のおとななどになりぬれば、まことに難波わたりの遠からぬも、事にしたが

ひて書くを、これさはあらで、上達部のもと、又始めてまゐらむなど申さする人の女などには、心ことに、うへより始めてつくろはせ給へるを、集まりて、たはぶれにねたがりいふめり。琴笛ならふに、さこそはまだしき程は、かれがやうにいつしかと覺ゆめれ。うち、東宮の御乳母。うへの女房の御かたがたゆるされたる。三昧堂たてて、よひ曉に祈られたる人。雙六うつに、かたきの賽きたる。まことに世を思ひすてたるひじり。

○くゝり物云々―くゝり染のこと。

百四十段

とくゆかしきもの　卷染、むら濃、くゝり物など染めたる。人の子產みたる、男女とく聞かまほし。よき人はさらなり、えせ者、下衆のきはだにきかまほし。除目のまだつとめて、かならずしる人のなるべき折も聞かまほし。思ふ人のおこせたる文。

百四十一段

こゝろもとなきもの　人の許に、とみの物ぬひにやりて待つほど。物見にいそぎ出でて、今やくとくるしう居入りつつ、あなたをまもらへたる心ち。子產むべき人の、ほど過ぐるまでさるけしきのなき。遠き所より、思ふ人の文を得て、かたく封じたる續飯など放ちあくる心もとなし。物見にいそぎ出でて、「事なりにけり」とて、白き笞など見つけたるに、近くやり寄するほどわびしう、おりてもいぬべき心ちこそすれ。知られじと思ふ人のあるに、前なる人に教へて物いはせたる。いつしかと待ち出でたるちごの、五十日、百日などのほどになりたる、行末いと心もとなし。とみの物縫ふに、くらきをり針に絲つくる。されど、我はさるものにて、ありぬべき所をとらへて、人につけさするに、それも急げばにやあらむ、とみにもえさし入れぬを、「いで只なすげそ」といへど、さすがになどてかはと思ひ顏にえ去らぬは、にくささへ添ひぬ。何事にもあれ、急ぎて物へ行くをり、まづわがさるべき所へ行くとて、只今おこせむとて出でぬる車待つほどこそ心もとなけれ。大路いきけるを、さなりけると喜びたれば、外ざまにいぬる、いとくちをし。まして物見に出でむとであるに、「事はなりぬらむ」などいふを聞くこそわびしけれ。子うみける人の、後のこと久しき。物見に、又御寺まうでなどに、もろ共にあるべき人を乘せにいきたるを、車さし寄せたてるが、とみにも乘らで待たするも、いと心もとなく、うちすてもいぬべき心ちする。とみに煎炭おこす、いとひさし。人の歌の返しとくす

○事なりにけり―事の現實になりたるにて、祭の行列の來れるをいふ。
○白き笞―白き杖。看督長の警固の爲にもてる長き杖。
○五十日、百日―いづれも生兒の祝日。
○後のこと―後產。
○煎炭―固炭の類か。

○まつはぐろめ―まつはまたの誤にて、齒黑めなるべし。

○御服の頃―道隆の薨後、一年の忌服ある也。

○官のつかさのあいたん所―太政官廳の朝所。朝所は參議以上の人の食事する所。あいたんはあしたの音便。

○萱草―わすれ草。

○時づかさ―漏刻司。時守あり、毎時漏刻を見て、鐘鼓を鳴して、時を報ず。

べきを、え詠み得ぬほど、いと心もとなし。懸想人などはさしも急ぐまじけれど、おのづから又さるべき折もあり。又、まして女も男も、たゞにいひかはすほどは、時のみこそはと思ふほどに、あへなく僻事も出でくるぞかし。又、心ちあしく、物おそろしきほど、夜の明くる待つこそ、いみじう心もとなけれ。まつはぐろめのひるほども心もとなし。

百四十二段

故殿の御服の頃、六月晦日の御秡といふ事に出でさせ給ふべきを、職の御曹司は方あしとて、官のつかさのあいたん所に渡らせ給へり。その夜はさばかり暑くわりなき闇にて、何事もせばう、瓦葺にてさまことなり。例のやうに格子などもなく、只めぐりて、御簾ばかりをぞ掛けたる、なかなか珍しうをかし。女房庭におりなどして遊ぶ。前栽には、萱草といふ草を、ませゆひて、いと多く植ゑたりける。花ざかりはやかにかさなりて咲きたる、うべ〳〵しき所の前栽にはよし。時づかさなどは只かたはらにて、鐘の音も例には似ず聞ゆるを、ゆかしがりて、若き人々二十餘人ばかり、そなたに行きてはしり寄り、たかき屋にのぼりたるを、これより見あぐれば、薄鈍の裳、唐衣、同じ色の單衣襲、紅の袴どもを着てのぼり立ちたるは、いと天人などこそえいふまじけれど、空よりおりたるにやとぞ見ゆる。おなじ若さなれど、おしあげられたる人はえまじらで、羨ましげに見あげたるもをかし。日暮れて暗まぎれにぞ、すぐしたる人々、皆立ちまじりて、右近の陣へ物見に出でできて、たはぶれ騒ぎ笑ふもあめりしを、「かうはせぬ事なり。上達部のつき給ひしなどに、女房どものぼり、上官などの居る障子を、皆打ちたふしそこなひたり」など、苦しがる者もあれど、聞きも入れず。屋のいとふるくて、瓦葺なればにやあらむ、暑さの世に知らねば、御簾の外に、よるも臥したるも、ふるき所なれば、蜈蚣といふもの、日ひと日落ちかゝり、蜂の巣のおほきにて、附き集まりたるなど、いとおそろしき。殿上人日ごとに參り、よるも居明し、物いふを聞きて、「あにはかりきや、太政官の地の、今やかうのには とならむことを」と誦し出でたりし人こそをかしかりしか。秋になりたれど、かたへ涼しからぬ風の、所がらなめり、さすがに蟲の聲などは聞えたり。八日ぞ還らせ給へば、七夕祭などにて、例より近う見ゆるは、ほどのせばければなめり。

○おしあげられたる―地位の高き。

○やかうのには―野干のすむ場所。野干は狐なり。この句出所未詳。

○かたへ涼しからぬ風―古今集「夏と秋とゆきかふ空の通路はかたへ涼しき風やふぐらむ」。

百四十三段

●人間の四月―白居易の詩に「人間四月芳菲盡、山寺桃花始盛開、長恨春歸無二覓處一、不レ知轉入二此中一來、云々」。

○細殿の一の口―弘徽殿のなり。
○頭中將―齊信。
○源中將―宣方。
○露は別の―菅原道眞の七夕の詩に「露應二別淚一珠空落、雲是殘粧髻未レ成、云々」。
○葛城の神云々―畫はかたちあしとて見よ。

宰相中將齊信、宣方の中將と參り給へるに、人々出でて物などいふに、ついでもなく、「明日はいかなる詩をか」といふに、いさゝか思ひめぐらし、とゞこほりもなく、「人間の四月をこそは」といらへ給へる、いみじうをかしくこそ。過ぎたる事なれど、心えていふはをかしき中にも、女房などこそさやうの物わすれはせね、男はさもあらず。詠みたる歌をだになま覺なるを、まことにをかし。内なる人も、外なる人も、心えずと思ひたるぞことわりなるや。

百四十四段

この三月晦日、細殿の一の口に、殿上人あまた立てりしを、やう〳〵すべり失せなどして、たゞ頭中將、源中將、六位一人のこりて、よろづのことといひ、經よみ歌うたひなどするに、「明けはてぬなり。歸りなむ」とて、「露は別の涙なるべし」といふことを、頭中將うち出し給へれば、源中將もろ共に、いとをかしう誦んじたるに、「いそぎたる七夕かな」といふを、いみじうねたがりて、「曉の別のすぢの、ふと覺えつるまゝにいひて、わびしうもあるわざかな、すべてこのわたりにては、かゝる事思ひまはさずいふは、くちをしきぞかし」などいひて、あまりあかくなりにしかば、「葛城の神、今ぞすぢなき」とて、わけておはしにしを、七夕のをり、この事をいひ出でばやと思ひしかど、宰相になり給ひにしかば、必しもいかでかは、その程に見つけなどせむ。文書きて、主殿司してやらむなど思ひしほどに、七日に參り給へりしかば、うれしくて、その夜の事などいひ出でば、心もぞ得給ふ、すゞろにふといひたらば、あやしなどやうちかたぶき給はむ、さらばそれには、ありし事いはむとてあるに、つゆおぼめかでいらへ給へりしかば、まことにいみじうをかしかりき。月頃いつしかと思ひ侍りしだに、わが心ながらすきゞ〳〵しと覺えしに、いかでさはた思ひまうけたるやうにの給ひけむ。もろともにねたがりいひし中將は、思ひもよらで居たるに、「ありし曉の詞いましめらるゝは知らぬか」との給ふにぞ、「げに〳〵」と笑ふめる。わろしかし。人と物いふを碁になして、近う語らひなどしつるをば、「手ゆるしてけり」、「けちさしつ」などいひ、「をとこはてうけん」などいふことを、人には知らせず、この君と心えていふを、「何事ぞ〳〵」と、源中將はそひつきて問へど、いはねば、かの君に、「なほこれの給へ」と怨みられて、よき中なれば聞かせてけり。いとあへなくいふ程もなく、近うなりぬるをば、「おしこぼちのほどぞ」などいふに、我も知りにけると、いつしか知られむとて、わざ

○宰相になり―參議となる時は、上達部なれば、侍臣の如く日勤せぬなり。

○定め―定目。

○蕭會稽の―朗詠集に大江朝綱「蕭會稽之過二古廟一、託二異代之交一、云云」。蕭會稽は梁の蕭允のこと。會稽を鎮めて、季札の廟を祭りしことあり。

◎いまだ三十の云云―本朝文粋に源英明「顔回周賢者、未レ至二三十期一、潘岳晉名士、早著二秋興詞一、云々」。

と呼び出でて、源中將「碁盤侍りや。まろもうたむと思ふはいかゞ。手はゆるし給はむや。頭中將とひとし碁なり。なおぼしわきそ」といふに、「清さのみあらば、定めなくや」といらへしを、かの君に語り聞えければ、「嬉しくいひたる」とよろこび給ひし。なほ過ぎたる事忘れぬ人は、いとをかし。

宰相になり給ひしを、うへの御前にて、「清詩をいとをかしう誦んじ侍りしものを、『蕭會稽の古廟をも過ぎにし』なども、誰かいひ侍らむとする。しばしならでもさぶらへかし。くち惜しきに」など申ししかば、いみじう笑はせ給ひて、「主上さなむいふとて、なさじかし」など仰せられしもをかし。されどなり給ひにしかば、まことにさうゞしかりしに、源中將劣らずと思ひて、ゆゑだちありくに、宰相中將の御うへをいひ出でて『清いまだ三十の期におよばず』といふ詩を、こと人には似ずをかしう誦し給ふ」などいへば、源中將「などかそれに劣らむ。勝りてこそせめ」とて詠むに、「清更にわろくもあらず」といへば、源中將「わびしの事や。いかであれがやうに誦んぜで」などの給ふ。「清三十の期といふ所なむ、すべていみじう愛敬づきたりし」などいへば、ねたがりて笑ひありくに、陣につき給へりける折に、わきて呼び出でて、源中將「かうなむいふ。なほそこ教へ給へ」といひければ、笑ひて教へけるも知らぬに、局のもとにて、いみじくよく似せて詠むに、あやしくて、「清こは誰ぞ」と問へば、ゑみ聲になりて、源中將「いみじき事聞えむ。かうゝ、昨日陣につきたりしに、問ひ聞きたるに、まづ似たるなめり。『清誰ぞ』と、にくからぬ氣色にて問ひ給ふ」といふも、わざとさ習ひ給ひけむをかしければ、これだに聞けば、出でて物などいふを、源中將「宰相中將の德見ること。そなたに向ひて拜むべし」などいふ。下にありながら、「うへに」などいはするに、これをうち出づれば、「まことにはあり」などいふ。御前に「かく」など申せば笑はせ給ふ。

うちの御物忌なる日、右近のさうくわんみつなにとかやいふ者して、疊紙に書きておこせたるを見れば、源中將「參せむとするを、今日は御物忌にてなむ、三十の期におよばずば、いかゞ」といひたれば、返事に、「清その期は過ぎぬらむ、朱買臣が妻を教へけむ年にはしも」と書きてやりたりしを、又ねたがりて、うへの御前にも奏しければ、宮の御かたに渡らせ給ひて、「主上いかでかゝる事は知りしぞ。『四十九になりける年こそ、さはいましめけれ』とて、宣方は、『わびしういはれにたり』といふめるは」と笑はせ給ひしこそ、物ぐるほしかりける君かなと

○朱買臣が云々―前漢書の朱買臣の傳に「妻羞之求レ去、買臣笑曰、我年五十當二富貴一、今已四十餘矣、女苦日久、待我富貴一報二女功一云々」。

覺えしか。

○弘徽殿―一條帝の女御。藤原義子。
○閑院太政大臣―藤原公季。

百四十五段

弘徽殿とは、閑院の太政大臣の女御とぞ聞ゆる。その御方に、うちふしといふ者の女、左京といひてさぶらひけるを、源中將かたらひて思ふなど、人々笑ふころ、宮の職におはし給ひしに參りて、「時々は御宿直など仕うまつるべけれど、さるべきさまに、女房などもてなし給はねば、いと宮づかへおろかにさぶらふ。宿直所をだに賜はりたらば、いみじうまめにさぶらひなむ」などいひ居給ひつれば、人々「げに」などいふほどに、「清まことに人は、うちふしやすむ所のあるこそよけれ。さるあたりには、しげく參り給ふなるものを」とさしいらへたりとて、「源中將すべて物きこえじ。方人と頼み聞ゆれば、人のいひふるしたるさまに取りなし給ふ」など、いみじうまめだちて怨み給ふ。「清あなあやし。いかなる事をか聞えつる。更に聞きとゞめ給ふことなし」などいふ。傍なる人を引きゆるがせば、「女房さるべき事もなきをほとほり出で給ふ。さまこそあらめ」とて、花やかに笑ふに、「源中將これもかのいはせ給ふならむ」とて、いとものしと思へり。「清更にさやうの事をなむいひ侍らぬ。人のいふだににくきものを」といひて引き

入りにしかば、後にもなほ、「源中將人にはぢがましき事いひつけたる」と怨みて、「殿上人の『笑ふ』とて、いひ出でたるなり」との給へば、「清さては一人を恨み給ふべくもあらざめる。あやし」などいへば、その後は絶えてやみ給ひにけり。

○經綱―白地に色絲を以て花形などおり出したるもの。
○花かへりたる―花田色の褪めたる。
○かづら―かもじ。
○灰かへり―すべて紫色の褪めたるをいふ。紫を染むるに灰汁を用ゐし也。
○夜がれがち―男の通ふことの絶間がち。夜がれは夜離(カレ)の義。
○不斷經―晝夜不斷に經典を讀誦すること。

百四十六段

むかしおぼえてふようなるもの　經綱縁の疊の舊りてふし出できたる。唐繪の屏風の表そこなはれたる。藤のかゝりたる松の木枯れたる。地摺の裳の花かへりたる。衞士の目くらき。几帳のかたびらの舊りぬる。帽額のなくなりぬる。七尺のかづらのあかくなりたる。蒲萄染の織物の灰かへりたる。色好の老いくづをれたる。おもしろき家の木立やけたる。池などはさながらあれど、浮草水草しげりて。

百四十七段

たのもしげなきもの　心みじかくて人忘れがちなる。壻の夜がれがちなる。六位の頭しろき。虚言する人の、さすがに人の事なしがほに、大事うけたる。一番に勝つ雙六。六七八十なる人の、心ちあしうして日頃になりぬる。風吹くに帆あげたる船。經は不斷經。

○あさきためし―萬葉集に采女「淺香山影さへみゆる山の井の淺き心をわが思はなくに」。
○みもひも―健馬樂に「飛鳥井にやどりはすべし、かげもよし、みもひもさむし、みま草もよし」。
○やどりのつかさ―宿官。他に轉任せしむるまで、一時任じておく官。
○式部大夫―五位の式部丞。

百四十八段　近くてとほきもの　宮のほとりの祭。思はぬはらから、親族の中。鞍馬のつゞらをりといふ道。十二月のつごもり、正月ついたちのほど。

百四十九段　遠くてちかきもの　極樂。船の道。男女の中。

百五十段　井は　掘兼の井。走井は逢坂なるがをかしき。山の井、さしもあさきためしになりはじめけむ。飛鳥井、「みもひも寒し」と譽めたるこそをかしけれ。玉の井。少將の井。櫻井。后町の井。千貫の井。

百五十一段　受領は　紀伊守。和泉。

百五十二段　やどりのつかさの權の守は　下野。甲斐。越後。筑後。阿波。

百五十三段　大夫は　式部の大夫。左衛門の大夫。史の大夫。六位の藏人、思ひかゝべき事

○左衛門大夫―五位の左衛門尉。
○史大夫―五位の左大史。史は太政官の文書など掌る役人。

にもあらず、かうぶりえて、何の大夫、權の守などいふ人の、板屋せばき家もたりて、また小檜垣など新しくし、車やどりに車ひきたて、前ちかく木おほくして、牛つながせて、草などかはするこそ、いとにくけれ。庭いと淸げにて、紫草して伊豫簾かけわたして、布障子など張りてすまひたる。よるは、「門つよくさせ」など、事行ひたる、いみじうおひさきなく、こゝろづきなし。親の家、舅はさらなり、をぢ兄などの住まぬ家、そのさるべき人のなからむは、おのづから。むつまじううち知りたる受領、又、國へ行きていたづらなる、さらずは女院、宮腹などの屋あまたあるに住みなどして、つかさ待ち出でて後、いつしかとよき所たづね出でて、住みたるこそよけれ。

百五十四段　女のひとり住む家などは、只いたう荒れて、築土などもまたからず、池などのある所は、水草ゐ、庭なども、いと蓬茂りなどこそせねども、所々すなごの中より靑き草見え、さびしげなるこそあはれなれ。物かしこげに、なだらかに修理して、門いたうかため、きはゞしきは、いとうたてこそ覺ゆれ。

百五十五段

宮づかへ人の里なども、親ども二人あるはよし。人しげく出で入り、奥のかたに、あまたさま〳〵の聲おほく聞え、馬の音して騒がしきまであれど、とがもなし。されど、忍びてもあらはれても、「男おのづから出で給ひけるを知らで」とも、「男又いつか參り給ふ」なども、いひにさしのぞく。心がけたる人は、いかゞはと、門あけなどするを、うたて騒がしうあやふげに、夜なかまでなど思ひたるけしき、いとにくし。「主大御門はさしつや」など問はすれば、「門守まだ人のおはすれば」など、なまふせがしげに思ひていらふるに、「主人出で給ひなばとくさせ。このごろは盗人いと多かり」などいひたる、いとむつかしう、うち聞く人だにあり。この人の供なる者ども、この客今や出づると、絶えずさしのぞきて、けしき見る者どもを笑ふべかめり。まねうちするも聞きては、いかにいとゞきびしういひ咎めむ。いと色に出でていはぬも、思ふ心なき人は、必ずきなどやする。されど、すくよかなるかたは、「夜更けぬ。御門もあやふかなる」といひていぬるもあり。まことに志ことなる人は、「はや」などあまたたびやらはるれど、なほ居あかせば、たび〳〵ありくに、あけぬべきけしきをめづらかに思ひて、「門守いみじき御門を、こよひらいさうとあけひろげて」と聞えごちて、あぢきなく曉

○らいさうと―未詳。

にぞさすなる。いかゞにくき。親添ひぬるは、なほこそあれ。ましてまことならぬは、いかに思ふらむとさへつゝましうて。せうとの家なども、けにくうはさぞあらむ。夜なか曉ともなく、門いと心がしこくもなく、何の宮、内わたりの殿ばらなる人々の出であひなどして、格子などもあげながら、冬の夜を居あかして、人の出でぬる後も、見出したるこそをかしけれ。一在明などは、ましていとをかし。笛など吹きて出でぬるを、我は急ぎても寝られず、人のうへなどもいひ、歌など語り聞くまゝに、寝入りぬるこそをかしけれ。

百五十六段

雪のいと高くはあらで、うすらかに降りたるなどは、いとこそをかしけれ。又、雪のいと高く降り積みたる夕暮より、端ちかう、同じ心なる人二三人ばかり、火桶中にするゑて、物語などするほどに、暗うなりぬれば、こなたには火もともさぬに、大かた雪の光、いと白う見えたるに、火箸して灰など掻きすさびて、あはれなるもをかしきも、いひ合はするこそをかしけれ。よひも過ぎぬらむと思ふほどに、履の音近う聞ゆれば、怪しと見出したるに、時々かやうの折、おぼえなく見ゆる人なりけり。今日の雪をいかにと思ひ聞えながら、何でふ事にさは

り、そこに暮しつるよしなどいふ。「今日こむ人を」などやうのすぢをぞいふらむかし。晝よりありつる事どもをうちはじめて、よろづの事をいひ笑ひ、圓座さし出したれど、片つかたの足はしもながらあるに、鐘の音の聞ゆるまでにな りぬれど、内にも外にもいふ事どもは、飽かずぞおぼゆる。あけぐれのほどに歸るとて、「雪なにの山に滿てり」とうち誦んじたるは、いとをかしきものなり。女のかぎりしては、さもえ居あかさざらましを、たゝなるよりはいとをかしう、すきたる有樣などをいひ合はせたる。

○今日こむ人を―拾遺集に「山里は雪ふりつみてみちもなしけふこむ人をあはれとも見む」。

○あけぐれ―夜明けごろ。

○雪なにの山云々―朗詠集に謝觀「曉入二梁王之苑一、雪滿二群山一云々」。

○やうき―樣器、また楊器。貞丈雜記には、楊にて作れる折敷かといへり。

百五十七段

村上の御時、雪のいと高う降りたりけるを、やうきに盛らせ給ひて、梅の花をさして、月いと明きに、「これに歌よめ。いかゞいふべき」と、兵衞の藏人に賜びたりければ、「雪月花の時」と奏したりけるこそ、いみじうめでさせ給ひけれ。「歌など詠まむにはよのつねなり。かう折にあひたる事なむいひ難き」とこそ仰せられけれ。おなじ人を御供にて、殿上に人さぶらはざりける程、たゝずませおはしますに、炭櫃のけぶりの立ちければ、「かれは何のけぶりぞ。見てこ」と仰せられければ、見てかへり參りて、

わたつみのおきにこがるゝ物見ればあまの釣してかへるなりけり。

と奏しけるこそをかしけれ。蛙の飛び入りて焦がるゝなりけり。

百五十八段

御形の宣旨、五寸ばかりなる殿上わらはの、いとをかしげなるを作りて、みづら結ひ、裝束などうるはしくして、名書きて獻らせたりけりに、「ともあきらのおほきみ」と書きたりけるをこそ、いみじうせさせ給ひけれ。

百五十九段

宮に始めて參りたるころ、物のはづかしき事かず知らず、涙も落ちぬべければ、夜々まゐりて、三尺の御几帳のうしろにさぶらふに、繪など取り出でて見せさせ給ふだに、手も得さし出づまじうわりなし。「これはとあり、かれはかゝり」などの給はするに、高坏にまゐりたるおほとの油なれば、髮のすぢなども、なか〳〵晝よりは顯證に見えてまばゆけれど、念じて見などす。いとつめたき頃なれば、さし出ださせ給へる御手のわづかに見ゆるが、いみじうにほひたる薄紅梅なるは、限なくめでたしと、見知らぬさとび心ちには、いかゞはかゝる人こそ、世におはしましけれと、驚かるゝまでぞまもり參らする。曉にはとくなど

○おき―沖に(オキ)をかく。

○かへる―歸るに蛙をかく。

○おほとの油―おほとなぶらに同じ。

○沈―香木の名。
○梨繪―梨地の蒔繪。

急がるゝ。「葛城の神もしばし」など仰せらるゝを、いかですぢかひても御覽ぜられむとて臥したれば、御格子もまゐらず。女官參りて、「これはなたせ給へ」といふを、女房聞きてはなつを、「待て」など仰せらるれば、笑ひてかへりぬ。物など問はせ給ひ、の給はするに、久しうなりぬれば、「おりまほしうなりぬらむ。さははや」とて、「よさりはとく」と仰せらるゝ。ゐさり歸るやおそきと、あけちらしたるに、雪いとをかし。「今日は晝つかた參れ。雪にくもりてあらはにもあるまじ」など、たび〳〵召せば、この局あるじも、「さのみや籠り居給ふらむとする。いとあへなきまで、御前許されたるは、思しめすやうこそあらめ。思ふにたがふはにくきものぞ」と、只いそがしに急がせば、我にもあらぬ心ちすれば、參るもいとぞ苦しき。火燒屋のうへに降り積みたるも、珍しうをかし。御前近くは、例の炭櫃の火こちたくおこして、それにはわざと人も居ず。宮は沈の御火桶の梨繪したるに向ひておはします。上蔭御まかなひし給ひけるまゝに、近くさぶらふ。次の間に、長炭櫃に間なく居たる人々、唐衣着垂れたるほど、なれ安らかなるを見るも羨ましく、御文とりつぎ、立ち居ふるまふさまなど、つゝましげならず、物いひゐゐみ笑ふ。いつの世にか、さやうにまじらひならむと思ふさへぞつゝましき。おうよりて、三四人つどひて繪など見るもあり。

○おうよりて―奥寄りて。

しばしありて、さき高うおふ聲すれば、「殿參らせ給ふなり」とて、散りたる物ども取り遣りなどするに、奥に引き入りて、さすがにゆかしきなめり、御几帳のほころびより、わづかに見入れたり。大納言殿の參らせ給ふなりけり。御直衣、指貫の紫の色、雪にはえてをかし。柱のもとに居給ひて、「きのふけふ物忌にて侍れど、雪のいたく降りて侍れば、おぼつかなさに」などの給ふ。「道もなしと思ひけるに、いかでか」とぞ御いらへあなる。うち笑ひ給ひて、「あはれともや御覽ずるとて」などの給ふ御ありさま、これよりは何事かまさらむ。物語にいみじう口にまかせていひたる事ども、たがはざめりとおぼゆ。宮は白き御衣どもに、紅の唐綾二つ奉りたる。御ぐしのかゝらせ給へるなど、繪にかきたるをこそ、かゝることは見るに、うつゝにはまだ知らぬを、夢の心ちぞする。女房と物いひ、たはぶれなどし給ふを、いらへいさゝか恥かしとも思ひたらず。聞え返し、虚言などの給ひかくるを、爭ひ論じなど聞ゆるは、目もあやにあさましきまで、あいなくおもてぞ赤むや。御巢子まゐりなどして、御前にも參ら

○大納言殿―伊周。
○道もなし―今日こむ人を見よ。
○あはれともや―同上。